

ふかまち いせき こうふ じょうか まち いせき
深町遺跡・甲府城下町遺跡

(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業、
下水道工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024.3

**山梨県観光文化・スポーツ部
山梨県県土整備部
甲府市上下水道局**



B・C・D区遠景（西上空より撮影）



B・C・D区遠景（東上空より撮影）

巻頭写真 2



B・C・D・E区全景（モザイク写真）



B区 三の堀跡 (北西より撮影)



B区 三の堀跡 土層堆積状況 (北より撮影)

巻頭写真 4



B区 井戸跡 (西より撮影)



B区 井戸跡 (西より撮影)

〔上面〕



〔下面〕



〔掘方〕



C区 地下室遺構（オルソ写真）

巻頭写真 6



C区 地下室上面 (北西より撮影)



C区 地下室上面 (南西より撮影)

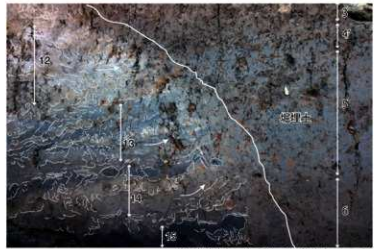


C区 地下室下面（南東より撮影）

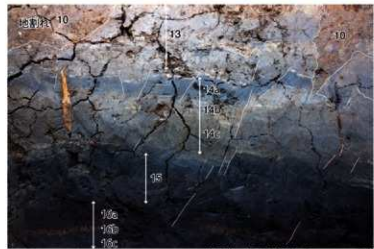


C区 地下室石積（南より撮影）

巻頭図版（第9章第1節）



層中部上部の地質動による変形（11～16層）



地質動による変形状況（10・13～16層）

図3 B区TR3堀北セクション南壁の変形構造

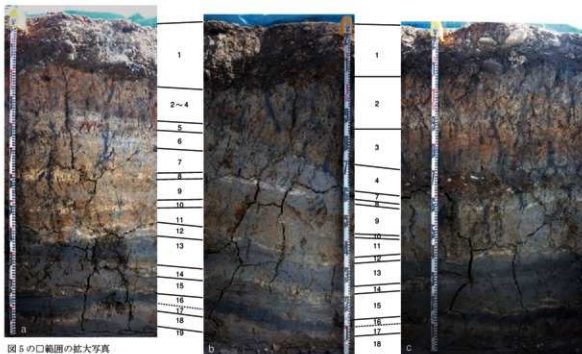


図5の口範囲の拡大写真

図4 B区2トレンチ東壁の堆積層の累重状況（1）



- 1 層 現在の表土。10YR3/3 暗褐色を呈する。巨塊～細塊が混じる。細粒粒砂～細塊、腐植質砂質泥、泥質砂を母材とする偽塊からなる層である。下位層と比べて生物の集積が少なく存在している。
- 2 層 大きさ 10cm 以下の亜角塊状をなす泥質～砂質泥の偽塊からなる。巨塊も混じる。不明瞭であるが堆積斜面とみられる層界面が確認される。人為的に集された堆積物が充填されていることが窺える。最下部は有機質泥質。
- 3 層 大きさ 10～1cm の亜角～亜円塊状をなす偽塊の積層からなる。偽塊は、沖付初期時に生じた偽塊の基部をなす 4 層～12 層までの堆積物からなるが、泥凝り粗粒砂質など、本断面で確認されない堆積物も存在する。また、4～7 層に由来する偽塊の利用が少なく、主に 8 層以下の堆積物の偽塊を主とする。偽塊はほとんどが生物の集積が水平方向を向くものが多く、粘着性変形しているものが多く、隣接する偽塊同士が接合している。さらに積形の左右で利用される偽塊の積層が異なるが、このことから、積形の設置時の表込堆積物母材材料を異なるが、積層している可能性がある。
- 4 層 10YR8/1 灰白を呈する砂質泥からなる。生物擾乱により初成構造が乱れているが不明瞭ながら葉理構造が確認される。洪水時の水位上昇に伴い潜水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物の層とみられる。
- 5 層 10YR7/2 に近い黄褐色を呈する砂質泥～泥からなる。生物擾乱等により初成の構造が乱れている。洪水時の水位上昇に伴い潜水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。
- 6 層 10YR7/2 に近い黄褐色を呈する砂質泥からなる。生物擾乱等により初成の構造が乱れている。洪水時の水位上昇に伴い潜水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物で、堆積後に多量の堆積体止層を挟む。
- 7 層 10YR8/1 灰白を呈する砂質泥からなる。生物擾乱により初成構造が乱れているが不明瞭ながら葉理構造が確認される。洪水時の水位上昇に伴い潜水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。
- 8 層 10YR4/1 褐色～10YR3/1 黒褐色腐植質泥からなる。生物擾乱が著しい。潜水域から水位の高い湿地のような堆積場において、本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。堆積後に比較的長期的にわたり安定した地表環境が継続し、腐植の集積が進行したとみられる。
- 9 層 10YR8/1 灰白色の泥質砂質層を挟む。10YR8/2～8/1 に近い黄褐色～灰白を呈する砂質泥～泥からなる。間欠的な洪水時の浮遊土砂が沈降層を呈するような層状の堆積環境で形成された堆積物の層からなる。堆積後に生物擾乱が進行する堆積体止層を挟む。
- 10 層 10YR4/1～5/1 褐色を呈する有機質泥からなる。生物擾乱が著しい。潜水域から水位の高い湿地のような堆積場において、本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。
- 11 層 10YR8/1 灰白色の泥質砂質層からなる。間欠的な洪水時の浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。
- 12 層 10YR3/1 黒褐色を呈する腐植質泥からなる。生物擾乱が著しい。本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。堆積後に比較的長期的にわたり安定した地表環境が継続し、腐植の集積が進行したとみられる。
- 13 層 10YR5/2 灰黄褐色の泥層からなる。生物擾乱により初成構造が乱れている。洪水時の浮遊土砂が沈降堆積した堆積物とみられる。
- 14 層 10YR4/1～5/1 褐色を呈する有機質泥からなる。段片が散在する。生物擾乱が著しい。潜水域から水位の高い湿地のような堆積場において、本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。
- 15 層 10YR4/1～5/1 褐色を呈する有機質泥からなる。下部に 10YR8/1 灰白色の泥質砂質層を挟む。生物擾乱が著しい。潜水域から水位の高い湿地のような堆積場において、本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。
- 16 層 10YR1/1 褐色～10YR3/1 黒褐色を呈する腐植質泥からなる。生物擾乱が著しい。本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。堆積後に比較的長期的にわたり安定した地表環境が継続し、腐植の集積が進行したとみられる。
- 17 層 10YR3/1 黒褐色を呈する腐植質泥からなる。生物擾乱が著しい。本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物で、堆積後に腐植の集積が進行する比較的安定した地表面環境が継続してたとみられる。



図 6 B 区 3 トレンチ東壁の堆積層の累重状況

巻頭図版（第9章第1節）



- 1層 地下室架設後の埋め戻しの堆積物。現地調査では断面の乾燥によるひび割れがひどく、充分な集積ができていないが、堆積の土質の高まりから竣工時期（西暦）に向かう堆積断面を形成しながら積層している。多様な材料を使用した有機堆積物からなる。レンガや木材なども混じる。人為的堆積物。
- 2層 遺構の機能期に形成された堆積物。7,515/1 灰を呈する地状をなす泥からなる。土質層との境界は比較的確明である（部分的に混ざり合い不明瞭）。基本的には遺構加工時の堆積物の直上に累重する。本製構造物内の図8左下写真からわかるように1段目の階段上まで連続している。当該期の遺構内の水位が1段目より高かったことを示す。
- 3層 遺構加工時の掘削面の底土。7,515/1 灰を呈する泥混じり砂と砂質泥の偽層と、基本層序最下部の12層泥炭の偽層が混ざり合った偽層の混合土。前者の偽層は単身一部弓形状なし、後者の偽層は単身塊状をなすものが主体で、大きさも10cm以上の大きなものが主体。前者の偽層は、遺構基礎堆積物には認められないことから、別の場所から搬入された堆積物を使用されていると推定される。分布をみると、掘削層（西暦）の木造構造物の基礎柱と開口部付近の方向が変わる部分に設置されている本杭・構木材の設置材料として使用されている。
- 4層 10YR4/1 褐灰～10YR3/1 黒褐色腐植泥からなる。生物擾乱が著しく、初成の堆積構造は認められない。本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物で、堆積後に比較的長期にわたり安定した地表環境が継続し、腐植の集積が進行したとみられる。地下室の地表をなしていた可能性がある。
- 5層 10YR8/1 灰白色の霞質砂層を挟む。10YR8/2～8/1 にぶい黄橙～灰白を呈する泥からなる。間欠的な洪水時の浮遊泥が沈降堆積するような潜水域の堆積環境で形成された堆積物の積層。堆積後に生物擾乱が進行する時期を挟む。
- 6層 10YR4/1～5/1 褐灰を呈する泥からなる。生物擾乱が著しい。間欠的な洪水時の浮遊泥が沈降して形成された堆積物とみられる。堆積後に生物擾乱が進行する堆積体初期を挟む。
- 7層 10YR8/1 灰白色の霞質砂の薄層。間欠的な洪水時の浮遊土砂が沈降して形成された堆積物。
- 8層 10YR4/1 褐灰～10YR3/1 黒褐色を呈する腐植を含む泥。生物擾乱が著しい。本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物。堆積後に単身塊状になり、土層化。
- 9層 10YR8/1 灰白色の泥層からなる。生物擾乱により初成構造が乱れている。洪水時の浮遊泥が沈降堆積した堆積物。
- 10層 10YR4/1～5/1 褐灰を呈する有機質泥からなる。生物擾乱が著しい。本地点へ流入してきた洪水時の浮遊泥が沈降して形成された堆積物。
- 11層 10YR4/1～5/1 褐灰を呈する有機質泥からなる。生物擾乱が著しい。本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物。堆積後に比較的長期にわたり安定した地表環境が継続し、腐植を繰り返す湿地のような堆積場において、腐植の集積が行われる。
- 12層 10YR3/2 黒褐色を呈する泥質泥炭層。上部に10YR3/4 暗褐色泥炭の薄層を挟む。未分解顆粒物体が層状に積層している。崖地の堆積物。

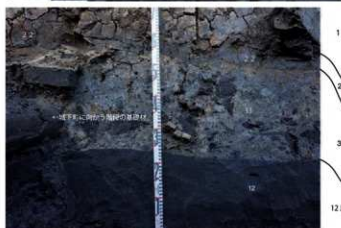
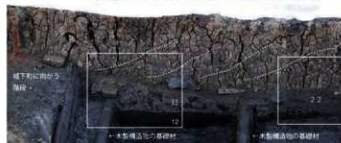


図7 C区の堆積層の累重状況



図8 C区東壁の堆積層の累重状況

あらまし

深町遺跡・甲府城下町遺跡は、近世の甲府城跡を中心として成立した城下町遺跡です。今回調査を実施した地点は、甲府城下町遺跡の南東部の地点と、その三の堀を挟んで東側に接する地域（深町遺跡）になります。

《深町遺跡》

深町遺跡は、江戸時代中期以降に同心屋敷がおかれた地域にあたります。今回の事業対象地内では全体的に近現代の削平や攪乱が著しく、東端のA区と西端のB区を発掘調査しています。

A区では、調査区の中央部分において、溝跡を確認しています。

溝の正確な規模や構造は明らかとすることはできませんでしたが、溝の中は角材や板材を用いた構造物がつくられ、溝の壁面には土留めの為に板材が設置されていました。



A区 溝状遺構（南より）

B区は、享保年間に奉斎されたといわれている笠森稻荷が鎮座していた範囲にあり、調査区の西側にはかつて甲府城の三の堀がありました。

今回の発掘調査では、井戸跡や溝跡、柱穴の他に、調査区西側より三の堀跡がみつかっています。



B区井戸跡（南西より）

B区でみつかった三の堀跡は、堀の東側の法面部分にあたります。

石垣や木製の杭・板材などの土留めをしていた痕跡は確認されておらず、当該地点の法面は土羽（どは）であった可能性があります。

また、法面が地すべりにより部分的に崩れている状況も確認されています。



B区 三の堀跡（北より）

《甲府城下町遺跡》

今回調査を実施した地点（C～E区）は、甲府城下町遺跡の南東部、三の堀に囲まれた町人地の南東隅にあたります。

C区からは地下室が確認されています。地下室内には木製構造物がつくられ、底面は角材を井桁状に組み、北・西・南側は板材により土留めされていました。また、東部では木製構造物と軸を変え、石積みが南を向いてつくられ、その南側には石積みと並行するように丸太材が並べられていました。

D・E区では、明確な近世の遺構は確認されておりませんが、D区では近代の建物跡や配石が、E区からは柱穴と井戸跡、溝跡がみつかっています。E区の溝跡の内、調査区の南側で確認されたSD03は、約20mにわたり、底面に木製の板材が敷き並べられておりました。



C区 地下室（北西より）



C区 地下室東部の石積みと丸太材（東より）



E区 溝跡（SD03）（西より）



D区 1号建物跡（東より）

序 文

本報告書は、(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業、下水道工事事業に伴い、山梨県埋蔵文化財センターが令和3(2021)年度から令和4(2022)年度にかけておこなった深町遺跡・甲府城下町遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

深町遺跡・甲府城下町遺跡は甲府盆地の北部の荒川扇状地の扇端部、甲府市城東二丁目地内にあります。この地域は、甲府城跡を中心に成立した近世の城下町遺跡であり、甲府城とともに、江戸時代を通じて、甲斐国の政治・文化の中心地として栄えてきました。

今回の発掘調査を実施した範囲は、甲府城の南東の三の堀に囲まれる町人地の南東隅(甲府城下町遺跡)と、三の堀外に形成された組屋敷(深町遺跡)にあたります。

深町遺跡からは甲府城の三の堀跡や木製構造物を含む溝跡等が、甲府城下町遺跡からは木製構造物を含む地下室や近代の建物跡や溝跡等がみつかり、これらの調査成果は、近世の甲府城下町における三の堀のあり方や、近世から近代にかけての周辺の土地利用の重要な歴史資料となるものと考えられます。

本書が、今後の深町遺跡・甲府城下町遺跡の保護、地域の歴史学習や研究のために、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び調査報告書の刊行に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2024年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所 長 北村 徹

例 言

- 1 本書は、山梨県甲府市城東二丁目に所在する深町遺跡・甲府城下町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業、下水道工事事業に伴う事前調査であり、山梨県県土整備部及び甲府市上下水道局より山梨県観光文化・スポーツ部が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。
- 3 調査にあたった組織は次のとおりである。
調査主体：山梨県観光文化・スポーツ部
調査機関：山梨県埋蔵文化財センター
所長：西川秀之(令和3・4年度)、北村徹(令和5年度) 次長：保坂和博
調査研究課長：宮里学(令和3・4年度)、小林健二(令和5年度)
調査担当：令和3年度 調査研究課 主任・文化財主事上野桜
史跡資料活用課 会計年度任用職員 小池準一
令和4年度 調査研究課 主任・文化財主事 上野桜、文化財主事 岩永祐貴
会計年度任用職員 秋山浩文
令和5年度 調査研究課 主査・文化財主事 正木季洋
史跡資料活用課 主任・文化財主事 上野桜
- 4 本書の執筆は、第1章の一部・第7章を正木が、第1章～第6章・第8章・第10章を上野が行い、編集は正木が担当した。
- 5 本書に掲載した遺構写真及び作業風景写真は上野(令和3年度)及び岩永(令和4年度)が撮影し、報告書掲載遺物の一部を正木が撮影した。
- 6 発掘調査期間および整理作業期間は以下のとおりである。
発掘調査期間：A 区 令和3年6月15日～7月9日、9月21日
B～D区 令和3年11月8日～令和4年2月26日
E 区 令和4年7月7日～8月31日
整理作業期間：令和4年6月1日～令和5年3月31日
令和5年5月31日～令和6年3月31日
- 7 整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターで実施した。
- 8 本書にかかる記録図面・電子データ、写真、出土遺物等は山梨県立考古博物館で保管している。
- 9 埋蔵文化財調査に係る調整機関は山梨県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課であり、調整担当者は主任・文化財主事熊谷晋祐(令和3・4年度)及び岩永祐貴(令和5年度)である。
- 10 埋蔵文化財調査における世界測地地形座標に基づく基準点・水準点の測量及び景観写真撮影・図化業務は株式会社テクノプランニングに、濁川(三の堀)の現況測量は昭和測量株式会社に、土層堆積構造観察業務は株式会社古生態研究所及びバリノ・サーヴェイ株式会社に、遺物写真撮影はアオヤギフォトスタジオに委託した。また、遺構の測量および図化システムとして、株式会社CUBICの「遺構くん」を使用した。
- 11 埋蔵文化財調査にあたり、次の方々・機関よりご教示・ご協力をいただいた。記して謝意を表する。(敬称略、順不同)
〔協力者〕志村憲一(甲府市教育委員会)、高野高潔(昭和測量株式会社)

〔作業員〕

＜発掘作業員＞

令和3年度

〔会計年度任用職員〕兩宮貞夫、石黒毅志、川住たまま、保坂秋蘭、松上健、田中基子、堤龍生
〔株式会社G・ファクトリー〕

高野眞寿美、原田真弓、宮澤泰彦、溝橋俊章、平吹英美、金丸幸司、佐野晴美

令和4年度

〔会計年度任用職員〕川住資農夫、中込榊

〔公益財団法人甲府市シルバー人材センター〕

功刀静、窪田信一、鮎川曆子、横川賢一、永田恵美子

＜整理作業員＞

令和4年度

〔会計年度任用職員〕難波礼、森原智恵子

令和5年度

〔会計年度任用職員〕土井みさは、難波礼、森原智恵子

凡 例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は、各図中に示した。縮尺を示していないものは任意の大きさである。
- 2 本報告書中、地形図、測量図、遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25,000地図を利用した。また、地理的専門用語は、同院で使用する用語に準拠した。
- 3 調査区は世界測地地形座標により設定しており、遺構図版におけるX・Y軸延長線上に付した数値は座標線の数値であり、南北のグリッド線および図中の北印は真北を示す。
- 4 遺構断面図立面図の左側基点に付した数字は標高(m)を表す。
- 5 出土遺物の注記に用いた遺跡名の略号は以下のとおりである。
深町遺跡(A区・B区) ……………「深町」
甲府城下町遺跡(C区・D区・E区) ……………「KJM」
- 6 遺物の実測は、口径および底径が復元できるもの、時期が推定できる文様をもつものを基準に選定した。
- 7 遺物観察表中の()付き数字は次のとおりである。
〔土器・陶磁器〕口径・底径：推定値 器高：残存値 〔瓦〕長さ・幅：残存値
- 8 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」2008年版による。

目次

巻頭写真図版

あらまし

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1	第7章 E区(甲府城下町遺跡)	35
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 調査の方法	35
第2節 調査の目的と課題	2	第2節 基本土層	35
第3節 発掘調査の経過	2	第3節 遺構と遺物	35
第4節 整理作業の経過	3	第8章 一級河川濁川埋設保存区域における 流域形状の記録	50
第2章 遺跡の位置と環境	4	第1節 経緯と記録の目的	50
第1節 地理的環境	4	第2節 調査と記録の方法	50
第2節 歴史的環境	4	第3節 調査成果	50
第3章 A区(深町遺跡)	8	第9章 自然科学分析	60
第1節 調査の方法	8	第1節 甲府城下町遺跡・深町遺跡の土層堆 積構造観察(B区・C区)	60
第2節 基本土層	8	第2節 甲府城下町遺跡の土層堆積構造観察 (E区)	64
第3節 遺構と遺物	8	第3節 深町遺跡・甲府城下町遺跡における 自然科学分析(B区・C区)	65
第4章 B区(深町遺跡)	12	第4節 甲府城下町遺跡E区の溝状遺構SD03 に関する自然科学分析	72
第1節 調査の方法	12	第10章 総括	78
第2節 基本土層	12	第1節 深町遺跡での調査成果	78
第3節 遺構と遺物	12	第2節 甲府城下町遺跡での調査成果	78
第5章 C区(甲府城下町遺跡)	19	第3節 三の堀に関する調査成果	78
第1節 調査の方法	19	写真図版	
第2節 基本土層	19	報告書抄録・奥付	
第3節 遺構と遺物	19		
第6章 D区(甲府城下町遺跡)	32		
第1節 調査の方法	32		
第2節 基本土層	32		
第3節 遺構と遺物	32		

図 版 目 次

第 1 図	深町遺跡・甲府城下町遺跡調査区配置図	2	第 28 図	D 区(甲府城下町遺跡)平面図	33
第 2 図	甲府城下町遺跡・深町遺跡の周辺遺跡	6	第 29 図	D 区 1 号建物跡・1 号礎石列	34
第 3 図	A 区基本土層図	8	第 30 図	D 区出土遺物	34
第 4 図	A 区(深町遺跡)全体図	9	第 31 図	E 区基本土層図	35
第 5 図	A 区 溝状遺構平面図	9	第 32 図	E 区(甲府城下町遺跡)全体図	36
第 6 図	A 区 トレンチ土層図	10	第 33 図	E 区 SD01・03(1)	39
第 7 図	A 区出土遺物	11	第 34 図	E 区 SD01・03(2)	40
第 8 図	B 区基本土層図	12	第 35 図	E 区 SD01・03(3)	41
第 9 図	B 区(深町遺跡)全体図	14	第 36 図	E 区 溝状遺構・土坑・井戸	42
第 10 図	B 区溝状遺構・土坑・ピット	15	第 37 図	E 区 柱穴(1)	43
第 11 図	B 区 ピット・井戸跡	16	第 38 図	E 区 柱穴(2)	44
第 12 図	B 区 三の堀跡	17	第 39 図	E 区 柱穴(3)	45
第 13 図	B 区 出土遺物	18	第 40 図	E 区溝状遺構・土坑出土遺物	46
第 14 図	C 区 全体図	20	第 41 図	E 区柱穴・遺構外出土遺物	47
第 15 図	C 区 3 号トレンチ土層図	20	第 42 図	E 区 SD03木製構造物木材底板	48
第 16 図	C 区 地下室全体図(上面)	21	第 43 図	E 区 SD03木製構造物木材側板	49
第 17 図	C 区 地下室全体図(下面)	22	第 44 図	作図位置図 S=1/500	51
第 18 図	C 区 基本土層図	23	第 45 図	溝川(三の堀)横断面図 S=1/100	51
第 19 図	C 区 地下室木製構造物立面図(1)	24	第 46 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(1) S=1/60	52
第 20 図	C 区 地下室木製構造物立面図(2)	25	第 47 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(2) S=1/60	53
第 21 図	C 区 地下室木製構造物エレベーション図	26	第 48 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(3) S=1/60	54
第 22 図	C 区 地下室土層断面図(東西)	27	第 49 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(4) S=1/60	55
第 23 図	C 区 地下室土層断面図(南北)	28	第 50 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(1) S=1/60	56
第 24 図	C 区 地下室 石積(1)	29	第 51 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(2) S=1/60	57
第 25 図	C 区 地下室 石積(2)	30	第 52 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(3) S=1/60	58
第 26 図	C 区出土遺物	31	第 53 図	溝川(三の堀)擁壁オルソ写真(4) S=1/60	59
第 27 図	D 区南東サブトレンチ東壁土層図	32			

表 目 次

第 1 表	発掘調査に係る届出等一覧	1	第 10 表	D 区瓦観察表	34
第 2 表	甲府城下町遺跡・深町遺跡の周辺遺跡一覧	7	第 11 表	E 区遺構変更表	35
第 3 表	A 区陶磁器観察表	11	第 12 表	E 区溝状遺構観察表	35
第 4 表	A 区瓦観察表	11	第 13 表	E 区土坑観察表	37
第 5 表	A 区木製品観察表	11	第 14 表	E 区柱穴観察表	37
第 6 表	C 区陶磁器観察表	30	第 15 表	E 区陶磁器観察表	38
第 7 表	C 区土製品・木製品観察表	30	第 16 表	E 区木製品観察表	38
第 8 表	C 区金属製品観察表	30	第 17 表	E 区金属製品観察表	38
第 9 表	D 区陶磁器観察表	34	第 18 表	E 区 SD03木製構造物 底板観察表	38

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

深町遺跡・甲府城下町遺跡の発掘調査は、山梨県県土整備部治水課が進める（都）和戸町竜王線街路整備事業、山梨県県土整備部都市計画課による一級河川濁川河川改修事業、甲府市上下水道局が進める下水道工事業に伴うものである。和戸町竜王線は、甲府市和戸町を起点とし、甲斐市新堰橋へ至る延長約9.6kmの都市計画道路であり、甲府市中心市街地と地域高規格道路新山梨環状道路北部区間の（仮称）和戸ICとを接続するアクセス道路である。また、道路整備とあわせて一級河川濁川の河川改修と甲府市による下水道工事が計画された。

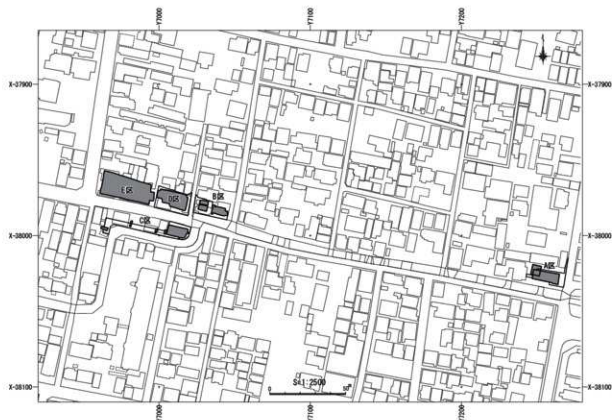
当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」の範囲にあたることや、江戸時代の組屋敷や濁川舟運の河岸があったとされる場所であることから、事業に先立ち、令和3年3月および8月に埋蔵文化財試掘調査を実施した。その結果、江戸時代中期の溝跡や木製構造物、甲府城三の堀跡や井戸跡等が発見された。また、試掘調査により甲府城下町遺跡の範囲外で新たに発見された遺跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地「深町遺跡」として遺跡台帳に登録した。

試掘調査の結果を踏まえ、山梨県県土整備部、甲府市上下水道局、山梨県観光文化・スポーツ部による協議を実施し、令和3年度に約1,007㎡（A区：約187㎡、B区：約198㎡、C区：約307㎡、D区：約315㎡）、令和4年度に約702㎡（E区）の計約1,709㎡の範囲を対象に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。また、甲府城三の堀である濁川の現況測量についても、令和3年度に実施した。

発掘調査に係る届出等は第1表のとおりである。これらにより発掘調査実施に向けた準備を進め、発掘調査を実施した。

第1表 発掘調査に係る届出等一覧

日付	文書番号	文書名	発行者	受信者
令和3年4月28日		(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書	山梨県県土整備部治水課 山梨県県土整備部都市計画課 山梨県観光文化部文化振興・文化財課 甲府市上下水道局	
令和3年5月31日		下水道工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書	甲府市上下水道局 山梨県	
令和3年5月31日		下水道工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書	甲府市教育委員会 山梨県	
令和3年6月4日		令和3年度下水道工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託発約書	甲府市上下水道局 山梨県	
令和3年6月18日	理文第 479号	埋蔵文化財発掘の届出について	山梨県知事	埋蔵文化財センター所長
令和3年7月19日	文化第 1734号	埋蔵文化財の発見について	山梨県知事	南甲府警察署長
令和3年10月4日	理文第 2287号	河川法第27条第1項 許可申請書	埋蔵文化財センター所長	山梨県知事
令和3年10月13日	山梨県指令中北建第 1336号	河川法第27条第1項 許可書	河川管理者 山梨県知事	埋蔵文化財センター所長
令和3年12月8日		(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書	山梨県県土整備部治水課 山梨県県土整備部都市計画課 山梨県観光文化部文化振興・文化財課	
令和3年11月9日	理文第 913号	埋蔵文化財発掘の届出について	山梨県知事	埋蔵文化財センター所長
令和3年9月6日	文化第 2287号	埋蔵文化財の発見について	山梨県知事	南甲府警察署長
令和4年3月23日	理文第 1349号	発掘届	埋蔵文化財センター所長	河川管理者 山梨県知事
令和4年6月1日		(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書	山梨県県土整備部治水課 山梨県県土整備部都市計画課 山梨県観光文化部文化振興・文化財課 甲府市上下水道局	
令和4年7月11日	理文第 483号	埋蔵文化財発掘の届出について	山梨県知事	埋蔵文化財センター所長
令和4年9月6日	文化第 2224号	埋蔵文化財の発見について	山梨県知事	南甲府警察署長
令和5年5月31日		(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書	山梨県県土整備部治水課 山梨県県土整備部都市計画課 山梨県観光文化・スポーツ部文化振興・文化財課 甲府市上下水道局	
令和5年12月28日		令和5年度下水道工事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の委託発約書	甲府市上下水道局 山梨県	



第1図 深町遺跡・甲府城下町遺跡調査区配置図

第2節 調査の目的と課題

本調査地点は、甲府市城東二丁目に所在し、近世の城下町跡である甲府城下町遺跡及び深町遺跡の範囲にあたる。史跡甲府城跡の本質的価値に準じる価値を有する要素である甲府城下町遺跡に含まれる三の堀がどのようなものであったかを考えるとともに、濁川舟運に関連する遺構の可能性や、三の堀の隣接地の町人地の土地利用を考えるため、それらを明らかにすることに努めた。

第3節 発掘調査の経過

A区

事前に調査区や発生土置場において安全対策等準備を行った上で令和3年6月15日から0.25m²バックホーによって表土掘削を実施し、発生土は、近隣の事業用地内に仮置きした。しかし、6月17日、地表下1.2m程の範囲において瓦礫等が多量に投棄されている状況を確認し、成分不明の油膜や悪臭(土壌腐食)が発生したため、山梨県観光文化・スポーツ部、山梨県県土整備部及び甲府市上下水道局との協議の結果、長期間にわたる調査続行が困難であることから、埋蔵文化財残存範囲内でのトレンチ調査に切り替えて短期間に調査を実施することとした。

6月24日から、試掘調査で確認された木製構造物(板材)に対し、トレンチを3本設定(1、2、3トレンチ)し、会計年度任用職員(発掘作業員)による掘削、記録作業を行った。記録作業終了後の6月30日から埋め戻しを開始し、7月9日に調査作業を終了した。また、9月21日に下水道工事の到達立坑部分の工事の際に立会調査を実施した。

B区・C区

事前に調査区や発生土置場においてガードフェンス設置等の安全対策等を行った上で、令和3年11月8日から0.25m²バックホーによって表土掘削を実施し、発生土は、D区や近隣の事業用地内に仮置きした。

11月15日から会計年度任用職員（発掘作業員）及び民間派遣会社の人材派遣による発掘作業員による掘削、記録作業を行った。またカメラや光波測距儀及び測量用PC等により、記録を行った。その他に、基準点杭・方眼杭の設置やC区の木製構造物の測量土層堆積構造観察、出土木製品の一時保存業務を実施した。

D区の調査開始に合わせ、令和4年1月13日から調査区の一部の埋め戻しとD区の表土掘削を実施した。2月15日に空中写真撮影を、同月18日から埋め戻し作業を実施し、25日に調査作業を終了した。また、調査に合わせて濁川（三の堀）の測量業務を実施した。

D区

令和4年1月13日から0.25㎡バックホーによって表土掘削を実施し、発生土はC区内に仮置きをした。表土掘削後、会計年度任用職員（発掘作業員）及び民間派遣会社の人材派遣による発掘作業員による掘削、カメラや光波測距儀等により記録作業を行った。その他委託にて、基準点杭・方眼杭の設置等を実施した。2月15日に空中写真撮影を行い、同月18日から埋め戻し作業を実施し、2月25日に調査作業を終了した。

E区

事前に調査区や発生土置場においてガードフェンス設置等の安全対策等を行った上で、令和4年7月7日から0.45㎡及び0.25㎡バックホーによって表土掘削を実施し、発生土は近隣の事業用地内に仮置きした。

7月7日から会計年度任用職員（発掘作業員）及び公益財団法人甲府市シルバー人材センターからの派遣による発掘作業員による掘削、記録作業を行った。またカメラや光波測距儀及び測量用PC等により、記録を行った。その他委託にて、基準点杭・方眼杭の設置や空中写真測量を実施した。全ての記録作業終了後の8月24日より埋め戻し作業を実施し、同月31日に調査作業を終了した。



表土掘削状況



調査状況

第4節 整理作業の経過

整理作業は令和4・5年度に実施した。令和4年度は令和4年10月12日から令和5年3月24日まで整理作業員（会計年度任用職員）を2名任用し、出土遺物の洗浄・注記・接合・実測作業を実施した。また、遺構図の図化作業や土壌理化学分析等の自然科学分析業務委託を実施している。

令和5年度は令和5年6月1日から令和6年3月22日まで整理作業員（会計年度任用職員）を3名任用し、出土遺物の注記・接合・実測作業、出土品・遺構図のトレスおよび図版作成作業を実施した。委託業務としては、図化を株式会社テクノプランニングに、遺物写真撮影をアオヤギフォトスタジオに委託を行った。また、原稿執筆・編集作業を担当職員が行い、令和6年3月に報告書を刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本書にて報告する周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」及び「深町遺跡」は、山梨県の県庁所在地である甲府市に所在する。

甲府市は県土中央に展開する甲府盆地を南北に縦断する細長い市域を持ち、南端は甲府盆地南縁にて富士河口湖町と接し、北端は甲府市最高地点である金峰山にて長野県境となる。今回の調査地点が所在する甲府市中心市街地は、北に要害山をはじめとする水ヶ森山地が発達して甲府盆地北縁の一角を構成する。水ヶ森山地と甲府盆地の境界では、秩父山塊へ続く太良ヶ峠より南流する相川が甲府市下積翠寺町付近を扇頂として、相川扇状地を形成する。相川扇状地は東方を興因寺山、西方を北から順に要害山、大笠山、愛宕山に囲まれる。愛宕山の南西には、相川扇状地の形成とともに周囲が埋没することで形成されたとされる一条小山と呼ばれる独立丘陵がある。近世には一条小山の山体に甲府城が築かれるとともに、甲府城を中心に城下町が形成された。

甲府城および甲府城下町は、一の堀に囲まれた「内城」、内城外縁から二の堀に囲まれた「内郭」、二の堀から三の堀に囲まれた「外郭」、三の堀外側の「郭外」から構成される。内郭には家老屋敷などの諸役所・倉庫・武家屋敷地、外郭には町人地・武家屋敷地、郭外には町人地・寺社地がそれぞれ置かれた。現在、内城部分の大半は国史跡甲府城跡に指定され、内郭および外郭と郭外の一部は周知の埋蔵文化財包蔵地「甲府城下町遺跡」、南東部の郭外は「深町遺跡」として遺跡台帳に登録されている。

今回の調査地点は、甲府城下町遺跡の南東部の三の堀に囲まれた町人地南東隅とその西側の組屋敷地に該当する場所である。調査地点の南側には甲府城三の堀が一級河川濁川として現在も残る。

第2節 歴史的環境

1 周辺の歴史的環境

旧石器時代～中世

旧石器時代は、緑が丘運動公園東の相川の河床からナウマンゾウの白歯の化石が発見されており、8万年以前のもものと推定されている。また八幡神社遺跡（番号94）では、23,000年前頃の石器が確認されている。

縄文時代の遺跡は、相川扇状地では、八幡神社遺跡、大手下遺跡（番号89）、宝町遺跡（番号68）などがあり、八幡神社遺跡では石鏃製作跡が見つかっている。集落跡としては上石田遺跡（番号16）がある。

弥生時代は、集落跡としては朝気遺跡（番号16）、塩部遺跡（番号14）がある。

古墳時代は、市内には湯村山や愛宕山に古墳が分布しているが、周辺には集落跡としては朝気遺跡、塩部遺跡があり塩部遺跡の方形周溝墓からは日本で最古級の馬歯が出土している。甲府城下町遺跡内では、甲府地方裁判所地点で堅穴状遺構から古墳時代の土器が出土している。

奈良・平安時代は、集落跡として朝気遺跡や塩部遺跡がある。朝気遺跡では平安時代のウマ全身骨格とウマ頭蓋骨が出土しており、また、朝気遺跡一帯は律令制の巨麻郡青沼郷の中心的な集落だったとみられている。

のちに近世の甲府城が築城される一条小山は、平安末期から鎌倉時代の初めには甲斐源氏的一条忠頼の館があり、忠頼の死後、夫人が館を尼寺とし、後に一蓮寺となっている。

戦国大名武田信虎は、永正16年(1519)、甲府市東部の川田から相川の相川扇状地の扇尖部郷岡ヶ崎に居館を移動し、信虎、信玄、勝頼三代にわたって武田氏館を構えた（番号5）。また居館の南方に二町間隔で五本の南北幹幹街路を設定、家臣や商職人集めた武田城下町が整備された（番号4）。

近世

天正10年(1582)に武田氏が滅亡すると、甲斐国は織田の領国となったが、同年の本能寺の変により徳川家康の家臣平岩親吉が支配するところとなる。徳川家康が関東へ移封となると、甲斐国は豊臣家の支配となり、羽柴秀勝、その後に加藤光泰が、光泰が文祿の役に没すると浅野長政・幸長親子が

治めた。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い以後は、再び徳川へと支配が移り、江戸幕府の下で甲府藩(國中)、谷村藩(郡内)が成立するが、享保9年(1724)に幕府直轄地となる。一条小山には豊臣秀吉の命により、羽柴秀勝、加藤光泰らによって甲府城(番号3)の築城が始められ、浅野長政・幸長の頃(1600年頃)に完成し、甲府城下町(番号1)も築城とともに整備されたといわれている。永宝元年(1704)には5代將軍綱吉の側用人である柳沢吉保が甲府城主になり、甲府城の殿舎の造営や石垣の修築を行うとともに、武家地の不足解消に向け、郭外へ武家地を設けるなどの城下町の再整備も実施された(深町遺跡(番号2))。享保9年に柳沢吉里が大和郡山に転封し、甲府勤番支配となり幕末を迎える。

近代

甲府城は、明治5年(1872)、甲府城は陸軍省の管轄となるが、軍事施設の設置は不向きと判断され、明治6年に内城だけの存続が決まり郭門の撤去が始まる。城跡の転用が進み、明治9年に勸業試験場設置、明治36年には中央線が開通し北側は線路となった。大正6年には陸軍省から払い下げ、県有地となる。その間に内城の北側や西側の石垣の解体、堀の埋め立てや城下町の土塁の解体、堀の埋め立てがなされ、次第に市街地化されていった。また太平洋戦争の終戦を迎える昭和20年(1945)7月には、甲府空襲により当時の市域の74%が焦土化した。

2 今回の調査地点付近の歴史的環境

調査地は、城の南東の三の堀の南東隅付近にあたる。周辺には寺院が多く南西に文殊稲荷神社、北西に西教寺、北側に稲荷神社や教安寺、尊徳寺などの寺院がある。

調査区はA～E区に分かれるが、A・B区は三の堀の外側にあたり深町遺跡、C・D・E区については堀の内側にあたり甲府城下町遺跡の範囲内にあたる。

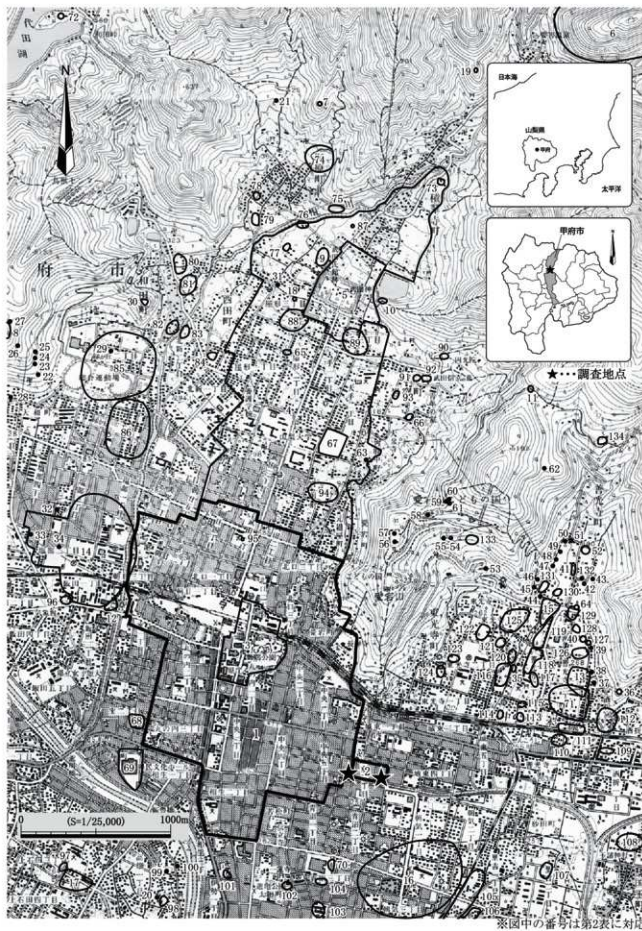
A区については、甲府城の郭外となるが、近世においては組屋敷が形成され、「懷宝甲府絵図」(嘉永2年(1850)7月)では、三の堀の東を流れる濁川の南北に「深町クミヤシキ」の記載がみえる。

B区は、三の堀の南東隅の堀の東側に隣接する場所であり、「懷宝甲府絵図」(明治4年)には川岸の記載が見え、濁川舟運の船着場があったとされている。また、現地には笠森稲荷大神社があり、享保年間に奉斎されたといわれている。

C区については、「懷宝甲府絵図」(嘉永2年)によると三の堀およびその内側に設置された土塁や路にあたる範囲である。

D・E区については、近世では寿誓院がある場所であり、「懷宝甲府絵図」(嘉永2年)には寿誓院の記載がある。現代においては、六地藏を刻んだ石に木製の屋根が乗せられた車地藏尊が奉られている。

近世の甲府城下では万治3年、元禄6年、享保7年、嘉永5年等、度々大火が発生し、深町に関しては、享保12年(1727)の大火により大きな被害を受けた。また江戸時代を通して甲府城下における最大の火災である享和3年(1803)の大火では、深町組屋敷が全焼している。そして安政7年(万延元年・1860)では、深町組屋敷が4軒ほど焼けている。現代においては、昭和20年(1945)の甲府空襲を受けている。



第 2 図 甲府城下町遺跡・深町遺跡の周辺遺跡

第2表 甲府城下町遺跡・深町遺跡の周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	城跡跡
2	深町遺跡	近世	城下町
3	甲府城跡	近世	城跡跡
4	武田城下町遺跡	中世	城跡跡
5	武田氏館跡	中世	城跡跡
6	富定城跡	中世	城跡跡
7	藤原安山遺跡	中世	城跡跡
8	藤村山城跡	中世	城跡跡
9	上野館遺跡	中世	城跡跡
10	藤原・船守跡	中世	城跡跡
11	茶室跡大石	中世	城跡跡
12	横田氏館跡	中世	城跡跡
13	横田氏館跡	中世	城跡跡
14	塩部遺跡	中世～平安	館跡跡
15	北条遺跡	縄文～平安	館跡跡
16	柳又遺跡	縄文～平安	館跡跡
17	上石田遺跡	縄文	館跡跡
18	榎本南A遺跡	中世	寺跡跡
19	一ノ森稲垣遺跡群	縄文	館跡跡
20	高瀬寺館跡	近世	館跡跡
21	虎石穴墳	古墳	古墳
22	高村山1号墳	古墳	古墳
23	高村山2号墳	古墳	古墳
24	高村山3号墳	古墳	古墳
25	高村山4号墳	古墳	古墳
26	高村山5号墳	古墳	古墳
27	高村山6号墳	古墳	古墳
28	万寿寺古墳	古墳	古墳
29	相田無名墳	古墳	古墳
30	二毛寺山遺跡	古墳	古墳
31	お塚さん古墳	古墳	古墳
32	早乙女塚古墳	古墳	古墳
33	柳塚古墳	古墳	古墳
34	地蔵塚古墳	古墳	古墳
35	お印塚古墳	古墳	古墳
36	不老塚古墳	古墳	古墳
37	おんぶつ塚	古墳	古墳
38	おめ塚古墳	古墳	古墳
39	新光寺無名塚	古墳	古墳
40	新光寺無名墳	古墳	古墳
41	三日月古墳	古墳	古墳
42	地蔵塚古墳	古墳	古墳
43	柳塚古墳	古墳	古墳
44	北条無名1号墳	古墳	古墳
45	北条無名3号墳	古墳	古墳
46	北条無名4号墳	古墳	古墳
47	北条無名5号墳	古墳	古墳
48	北条無名6号墳	古墳	古墳
49	北条無名7号墳	古墳	古墳
50	新光寺無名2号墳	古墳	古墳
51	新光寺無名1号墳	古墳	古墳
52	北条元正遺跡	古墳	古墳
53	山崎石古墳	古墳	古墳
54	大塚山3号墳	古墳	古墳
55	大塚山2号墳	古墳	古墳
56	夢見山2号墳	古墳	古墳
57	夢見山1号墳	古墳	古墳
58	大塚山1号墳	古墳	古墳
59	二ツ塚1号墳	古墳	古墳
60	二ツ塚2号墳	古墳	古墳
61	二ツ塚3号墳	古墳	古墳
62	一ツ塚古墳	古墳	古墳
63	コツ塚古墳	古墳	古墳
64	上土野遺跡	奈良	瓦葺跡
65	長岡遺跡	中世	館跡跡
66	沼津遺跡	奈良～中世	館跡跡
67	山梨大学遺跡	奈良～平安	館跡跡

番号	遺跡名	時代	種別
68	安町遺跡	縄文～平安	館跡跡
69	春町遺跡	縄文～近世	館跡跡
70	吉沢遺跡	古墳	館跡跡
71	本郷遺跡	縄文・古墳～近世	館跡跡
72	丸山遺跡	縄文～古墳	館跡跡
73	甘野川遺跡		館跡跡
74	山崎川遺跡		館跡跡
75	不動遺跡	近世	館跡跡
76	御馬場小路A遺跡	中世	館跡跡
77	御馬場小路B遺跡	中世	館跡跡
78	西前田入遺跡	中世～近世	館跡跡
79	西前田石遺跡		館跡跡
80	十二天遺跡	平安	館跡跡
81	水舟遺跡	古墳～平安	館跡跡
82	村之内遺跡	古墳～平安	館跡跡
83	向田A遺跡	鎌倉・古墳	館跡跡
84	向田B遺跡		館跡跡
85	榎ヶ丘二丁目遺跡	古墳～平安	館跡跡
86	榎ヶ丘一丁目遺跡	古墳	館跡跡
87	甘野遺跡		館跡跡
88	榎本南B遺跡	近世	館跡跡
89	大下下遺跡	縄文	館跡跡
90	沼津C遺跡	古墳	館跡跡
91	中道東遺跡	近世	館跡跡
92	沼津A遺跡	古墳	館跡跡
93	中道西遺跡	古墳	館跡跡
94	八幡神社遺跡	縄文	館跡跡
95	新郷小学校遺跡	近世	館跡跡
96	扇田一丁目遺跡	鎌倉・古墳	館跡跡
97	上石田石遺跡	平安	館跡跡
98	宮北遺跡	縄文～平安	館跡跡
99	大北河原遺跡	平安	館跡跡
100	大保北河原遺跡	平安	館跡跡
101	下松丸遺跡	中世	館跡跡
102	北山町遺跡	古墳～近世	館跡跡
103	扇田一丁目遺跡	古墳	館跡跡
104	青沼三丁目遺跡	中世～近世	館跡跡
105	笠古天神遺跡	古墳～平安	館跡跡
106	家之前遺跡	平安	館跡跡
107	中坪遺跡	中世	館跡跡
108	大輪遺跡	古墳	館跡跡
109	内林遺跡	近世	館跡跡
110	本郷C遺跡	古墳～中世	館跡跡
111	本郷B遺跡	平安～近世	館跡跡
112	西河縄文遺跡	縄文	館跡跡
113	宮の前遺跡	縄文	館跡跡
114	新光寺遺跡	平安～近世	館跡跡
115	諏訪遺跡	平安～近世	館跡跡
116	沼津之木遺跡	平安～近世	館跡跡
117	上郷遺跡	縄文～近世	館跡跡
118	菅之脇B遺跡	縄文～平安	館跡跡
119	菅之脇A遺跡	縄文～平安	館跡跡
120	宮家遺跡	平安～近世	館跡跡
121	六天大遺跡	平安～近世	館跡跡
122	美ノ尾遺跡	縄文・古墳～平安～近世	館跡跡
123	六反田遺跡	平安～近世	館跡跡
124	柳崎田遺跡	平安	館跡跡
125	地蔵北遺跡	古墳～平安	館跡跡
126	柳崎東遺跡	平安～近世	館跡跡
127	南赤光入遺跡	平安～近世	館跡跡
128	南赤光出遺跡	古墳～近世	館跡跡
129	新光寺北遺跡	縄文～平安	館跡跡
130	堀下入遺跡	平安～近世	館跡跡
131	堀下B遺跡	平安～近世	館跡跡
132	北赤光入遺跡	平安～近世	館跡跡
133	大塚山水の元遺跡	古墳	館跡跡
134	新堂遺跡	平安	館跡跡

第3章 A区（深町遺跡）

第1節 調査の方法

調査区は事業用地内に於ける試掘調査の結果をもとに南北約6.5m、東西約17.5mの範囲で設定した。表土層は試掘調査の結果をふまえて遺構確認面の直上まで重機を用いて掘削した。しかし、地表下に瓦礫等が多量に投棄され、成分不明の油膜や悪臭が発生したため、開発事業者との協議の結果、長期間にわたる調査続行が困難であることから、埋蔵文化財の残存する範囲内でのトレンチ調査に切り替えて短期間に調査を実施することとし、下水道到達坑範囲は工事掘削時に埋蔵文化財センター職員による立会調査を実施した。

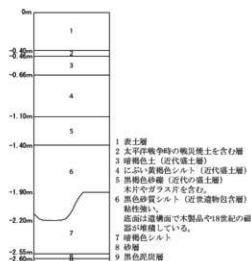
トレンチ調査は人力による掘削、遺構の精査、遺構掘削などの発掘作業を行い、調査の進捗に応じて測量及び写真撮影等の記録作業を行った。記録図類作成にあたっては世界測地座座標に基づく基準杭を委託により設置した。また、調査の進捗状況および遺物・遺構の確認状況等の記録写真はデジタル一眼レフカメラ（Nikon D850）により撮影した。

第2節 基本土層

A区では9層の土層が調査区内に安定的に堆積している（第3図）。

表土（1層）下には太平洋戦争時の戦災焼土を含む土層（2層）が堆積し、その下には近代の盛土層（3～5層）が約1m堆積している。近代の盛土層中からは木材片や瓦礫等が大量に見つかる。近代盛土層下には近世の遺物包含層（6層）が堆積し、その下部の7層上面より木製構造物を含む遺構が確認されている。

また、下水道到達立坑範囲では、表土下に工事掘削最深度となる地表下1.8m以下まで近代の盛土層が堆積している。



第3図 A区基本土層図

第3節 遺構と遺物

1～3号トレンチ中央部以南において遺構を確認した。遺構南側は近代の擾乱を受けており、全体形状は不明であるが、ここでは便宜的に「溝状遺構」と称する。

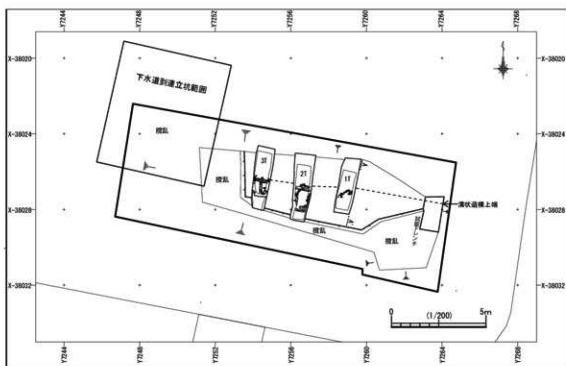
確認できた遺構の掘り込みは北壁のみである。北壁は1号トレンチでは緩やかに立ち上がり、2・3号トレンチではほぼ垂直に立ち上がる。調査区東壁においても緩やかに立ち上がる遺構の掘り込みが確認されており、これらが一連の遺構であるならば、東西規模は約10mとなる。

1号トレンチでは深度の掘削は行っていないが、杭列や板材が確認されており、周辺より近世の軒平瓦片（第7図3）が出土している。

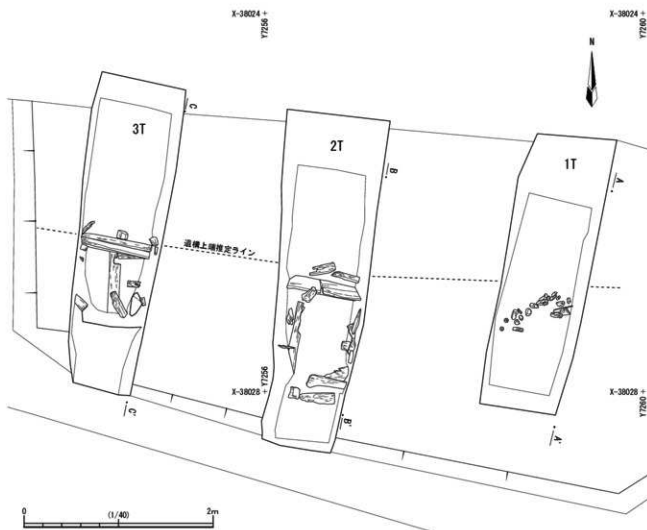
2・3号トレンチでは、遺構内に木製構造物が構築されている状況が確認された。2号トレンチでは北壁に沿って2本の角材（「北角材・南角材」）を壁底部付近に並行して配置し、その間に2枚の板材を上下に重ねられている。南角材には角材を立てており、これは板材を支えていたものと考えられる。板材は南側に傾いた状態で検出され、本来は直立に近い状態であったものが使用あるいは廃絶時に倒れたものと考えられる。また、南角材の南側に直行するように角材を配しているが（「直行角材」）、さらに2号トレンチ南側は未調査のため、全体形状は不明である。

3号トレンチの木製構造物は2号トレンチとほぼ同様の構造であるが、北角材は確認されず、その代わりに木杭が打ち込まれている。また、直行角材の南端部には板材が配置されている状況も確認されている。

遺構からは近世の陶磁器（第7図1・2）や瓦（第7図3）、木桶（第7図4・5）が出土しているがい



第4図 A区(深町遺跡)全体図



第5図 A区 溝状遺構平面図

1号トレンチ東壁

256.600m A



- 1 101R2/1: 黒色粘土 (康状造構覆土)
しまり・粘性あり。径5mm以下の黄褐色土粒を多量に含む。
- 2 101R2/1: 黒色粘土 (堆山層)
しまり・粘性あり。径約2mmの砂を含む。
- 3 5G4/1: 暗緑灰色粘土 (堆山層)
しまり・粘性強い。



1号トレンチ土層堆積状況 西から

2号トレンチ東壁

256.600m B



- 1 101R2/2: 黒褐色粘土 しまりあり。粘性強い。径約1cm以下の炭化材を含む。
- 2 101R2/1: 黒色粘土 しまりあり。粘性強い。褐色土粒・径1mmの砂を含む。
- 3 底2~5cm
- 4 101R2/1: 黒色粘土 しまりあり。粘性強い。褐色土粒を含む。
- 5 101R3/1: 黄褐色粘土 (康状造構覆土) しまりあり。粘性強い。
- 6 101R2/1: 黒色砂質土 (康状造構覆土) しまりゆるい。下部に材が多量に入る。
- 7 5Y3/1: オリーブ黒色粘土 (康状造構覆土) しまりあり。粘性強い。
- 8 5G15/1: 緑灰色粘土 (康状造構覆土) しまりあり。粘性強い。
- 9 101R3/4: 暗褐色砂質土 しまりゆるい。材本入る。
- 10 7.5G14/1: 暗緑灰色粘土 しまり・粘性強い。
- 11 7.5G12/1: 暗緑灰色粘土 しまり・粘性強い。
- 12 5G12/1: キーழ黒色粘土 しまり・粘性強い。
- 13 7.5G15/1: 緑灰色粘土 しまりあり。粘性強い。
- 14 N1.5/9: 黒色泥炭



2号トレンチ (北側) 土層堆積状況 西から



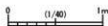
2号トレンチ (南側) 土層堆積状況 西から

3号トレンチ東壁

C 256.600m



- 1 101R2/1: 黒色粘土 しまり・粘性強い。
- 2 101R2/1: 黒褐色粘土 しまりやや強い。粘性強い。
- 3 5G15/1: オリーブ灰色粘土 (康状造構覆土) しまりやや強い。粘性強い。
- 4 (康状造構覆土) 279層に対応
- 5 (康状造構覆土) 279層に対応
- 6 N3/9: 緑灰色粘土 しまり・粘性強い。



3号トレンチ土層堆積状況 西から

第6図 A区 トレンチ土層図

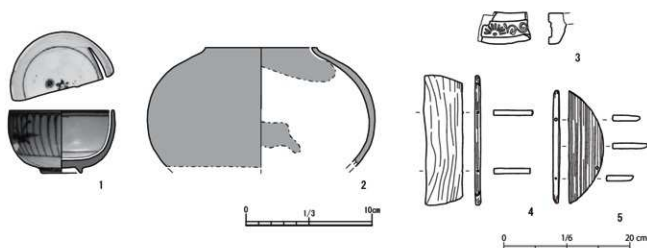
いずれも遺構埋没後の土層中より出土しており、構築・使用段階の時期は不明である。



2号トレンチ木製構造物出土状況 南から



3号トレンチ木製構造物出土状況 南西から



第7図 A区出土遺物

第3表 A区陶磁器観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	焼成	備考
						口径	口径	器高				
1	第7図	4	深町 A区 3T (-0.52M) 鉢型 (-0.53M)	磁器	碗	8.2	3.2	5.0	N8-0 灰白色	網密	良好	透明釉
2	第7図	5	深町 A区 3T 茶碗 (-0.53M)	陶器	鉢?	8.8	-	9.5	10YR8/1 浅黄褐色	密	良好	外面施釉 内面一部釉

第4表 A区瓦観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	焼成	備考
						長さ	幅	厚さ				
3	第7図	1	深町 A区 1T (-0.3M)	瓦	軒平瓦?	8.4	5.1	2.8	10YR7/1 灰白色	砂粒子 黒色粒子	良好	

第5表 A区木製品観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種類	寸法 (cm)			備考
					樹干長	幅	厚さ	
4	第7図	2	深町 A区 2T (-0.5M)	横板	20.5	6.4	0.9	
5	第7図	3	深町 A区 2T (-0.5M)	横板	18	5.5	1.05	

第4章 B区(深町遺跡)

第1節 調査の方法

調査区は、事業用地内における試掘調査の結果をもとに南北約11m、東西約20mの範囲で設定した。当調査区の南側には笠森稲荷とよばれる神社が鎮座していた。表土層は、試掘調査の結果をふまえて、遺構確認面の直上まで重機を用いて掘削し、人力による掘削、遺構の精査、遺構掘削などの発掘作業を行い、調査の進捗に応じて測量及び写真撮影等の記録作業を行った。

記録図類については世界測地座標に基づく基準杭を委託により設置し、立面図および詳細図などの平面図の一部は方眼紙への計測図化、平面図は光波測距儀とコンピュータによる測量で作成した。また、調査の進捗状況および遺物・遺構の確認状況等の記録写真についてはデジタル一眼レフカメラ(NikonD850)により撮影した。

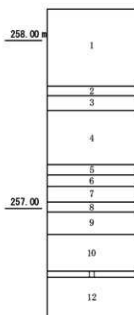
発掘調査では溝状遺構1条、土坑1基、井戸1基、ピット10基を検出したほか、三の堀跡を発見した。遺構分布図中で、各遺構は下記の略称で表記した。

溝状遺構：SD 土坑：SK 柱穴：SP 井戸：SE

第2節 基本土層

調査区内に安定的に堆積する12層に分けられる(第8図)。

- 1 表土層現代の攪乱。
- 2 5層と同質のシルト～極細粒砂による人為層。
- 3 暗褐色土層(10YR3/3)盛土、炭化物やφ5mm前後以上の赤色粒子、5層のブロック含む。
- 4 におい黄褐色シルト～極細粒砂層(10YR5/3)粘性強い 酸化による黄褐色(10YR5/6)部分と植物の腐食による黒褐色(10YR3/2)部分とがまだらに混在する。
- 5 灰褐色シルト層(10YR4/1)粘性強い。
- 6 5層と同質堆積であるが垂直に亀裂が入りブロック状に壊れている粘性強い。
- 7 6層と同質であるがやや明るい 粘性強い。
- 8 黒褐色シルト層(10YR3/1)下層との境は下層をブロック状に壊しながら堆積している。
- 9 灰褐色シルト～極細粒砂層(7.5YR4/2)5層と同質のもの带状堆積がみられる。
- 10 黒色泥炭層(7.5YR1.7/1)他より東の地点よりも植物が分解されている。
- 11 暗赤褐色泥炭層(5YR3/3)他地点では根が密になる。
- 12 11と同質。



第8図 B区基本土層図

第3節 遺構と遺物

全体的に上層からの攪乱が著しく、発見された遺構も上部が削平されているものと思われる。遺物は遺構覆土から発見されたものを中心に掲載した。

1 溝状遺構

1条の溝状遺構を検出した。検出面からの深さは約0.25mで、東西方向に分布していた。遺構内からの遺物出土がなく、上部の攪乱によりいずれの層から掘削されて形成したものが不明であることから、遺構形成時期は明らかでない。

2 土坑

1基の土坑を検出した。溝状遺構に隣接し、同遺構を壊すように形成されていた。土坑内中央が一段深い2段構造となっていた。検出面からの深さは0.2mで、直径は0.8m程度である。

溝状遺構よりも新しい時期に形成したものと考えられるが、遺構内から出土遺物が発見されなかったことから帰属時期は明らかでない。

3 ビット

10基検出した。井戸跡の西側一帯に集中する傾向がみられるものの、特に配列に規則性はみられない。検出面からの深さは深いもので0.25m程度で、直径は約0.1～0.4mである。他の遺構同様、帰属時期は不明である。

4 井戸

笠森稲荷の鳥居に隣接する位置に埋設していた。1基の井戸を検出した。直径1.5mで素掘りした後、直径0.7mの桶を設置しながら桶の周囲を覆土で充填して構築されたと思われる。底面の桶は残存していたが、それよりも上段に設置されていたとみられる土留め用の構造物（同様に桶か？）は失われていた。残存していた桶は長方形の板を井桁状に組んだ上に設置されていた。遺構確認面から残存する桶の上部までの深さは1.3mである。

桶内の覆土は土壌化が顕著で、桶より上部は顕著でない。短時間で意図的に埋設された可能性がある。覆土からの出土遺物はなく帰属時期は不明である。

5 三の堀跡

西側に傾斜する南北方向の法面を発見した。現存する三の堀との位置関係から、南北方向に展開する三の堀の東側法面に該当するものである。現況は埋設されており、地表面にごく小規模な水路があるのみであった。当該水路の西側の擁壁は、濁川の最後の南北方向部分の内、西側の擁壁に連続する。

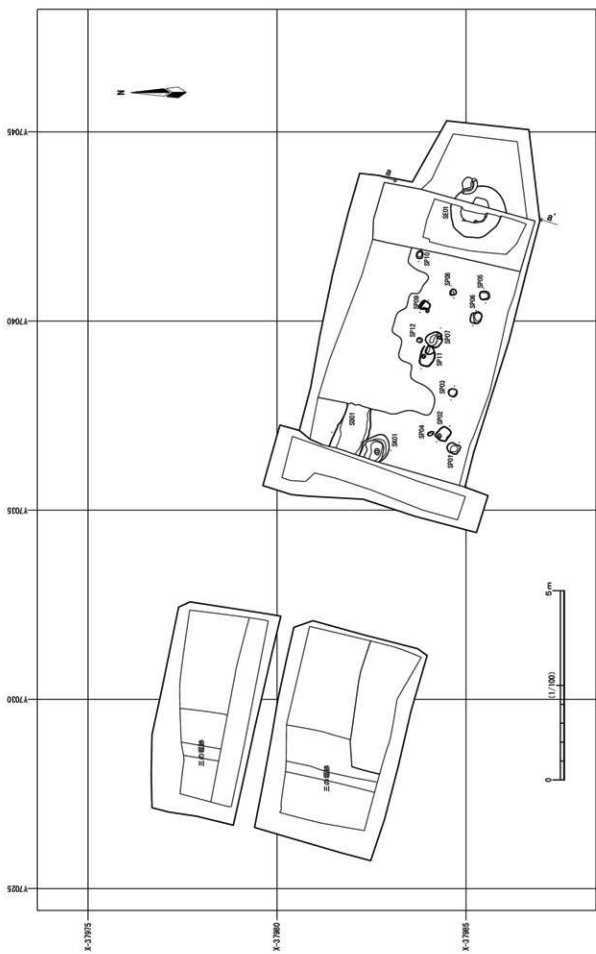
第12図5～11層まで地山層を掘削して、西側を向く法面が形成されていた。法面は円弧滑りにて崩壊していて、12・13層を掘りこまれていたかは、判断できない。また、法面の勾配角度も不明である。法面の表層は土壌化している。石垣や木製板材など、土留め用の構造物は発見されなかった。また、胴木など、土留め用の構造物があったことを想定させるような構造物も発見されなかった。

堀の覆土は、近代に形成されたものと思われる。三の堀法面周辺には、同じ覆土をもつ攪乱が分布する。その上に複数枚の盛土層が堆積し、現地表面となっている。

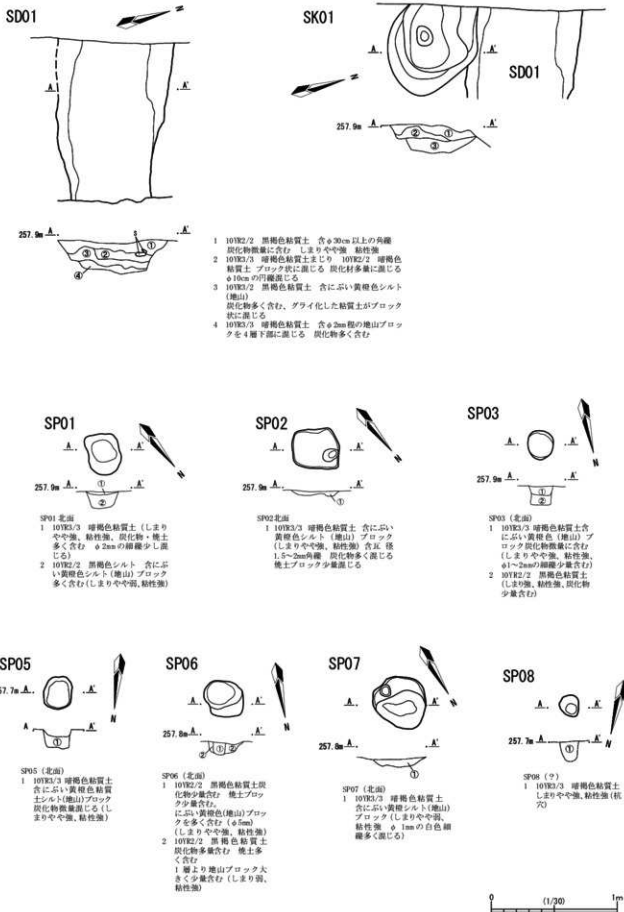
堀の造営時期や法面の崩落時期、修築の有無等を示す痕跡は発見されなかった。

6 出土遺物

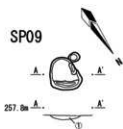
遺構の覆土から発見された遺物を中心に報告する。1・3～5はいずれも三の堀跡の覆土から発見されたものである。1は近世もしくは近代のものと考えられるカワラケである。3は近世もしくは近代のものと考えられる陶器の皿、5は桶の底板である。4は磁器の鉢で、堀が埋没した後の堆積層から出土した。2はSP04から発見された近世もしくは近代のものと考えられるカワラケである。



第9図 B区(深町遺跡)全体図



第10図 B区 溝状遺構・土坑・ピット

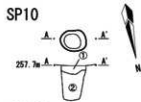


SP09

257.8m

SP09 (北面)

1 101R3/3 暗褐色粘質土
含る5cmの薄片層、炭
化物多量、粘土少量
(しまり強、粘性強)

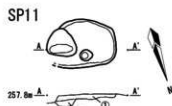


SP10

257.7m

SP10 (南)

1 101R3/3 暗褐色粘質土 粘土混じり、
白色細砂混じり(しまり強、粘性
強)
2 101R2/2 黒褐色粘質土 炭化物微量に
混じる に近い黄褐色ブロック少量
混じる (φ3mm~5mm) 粘土プロッ
ク混じる (しまりやや弱い、粘性強)

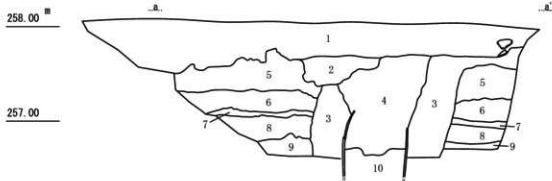
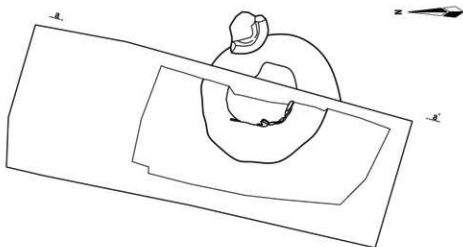


SP11

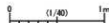
257.8m

SP11 (北面)

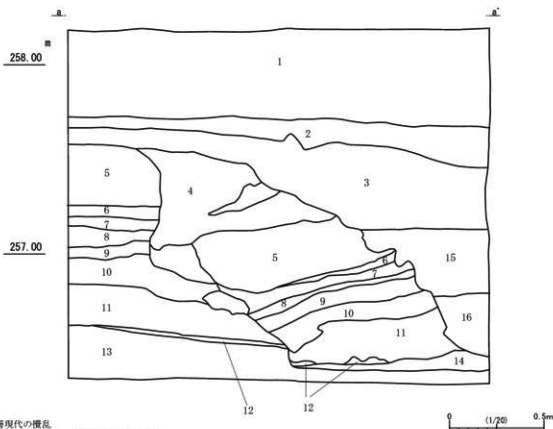
1 101R2/2 黒褐色粘質土 焼土ブ
ロック、炭化物多く混じる φ1mm
の白色細砂多く含む しまり
強、粘性強
2 101R3/3 暗褐色粘 土 炭化物
多量 (しまり強、粘性強)



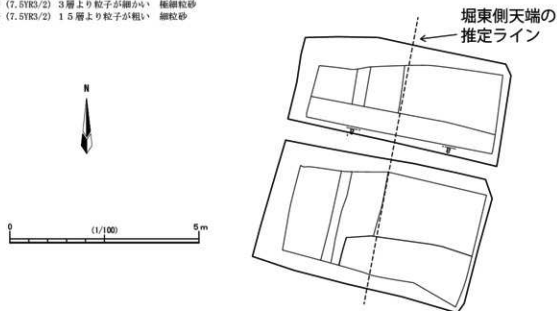
- 1 現代表土 (層見)
- 2 5層~8層の土が混ざって堆積 (井戸掘方)
- 3 101R4/1 ~ 5/1 褐灰色シルト粘土 ブロック混ざり込んでいる (井戸埋土)
- 4 101R7/3 に近い黄褐色シルト粘土 しまりあり
間、下層に101R8/4 浅黄褐色シルト粘土入る
- 5 101R4/1 ~ 5/1 褐灰色シルト粘土 しまりあり
- 6 101R3/1 黒褐色シルト粘土 しまりあり
- 7 101R4/1 ~ 5/1 褐灰色シルト粘土 しまりあり
- 8 101R3/1 黒褐色シルト粘土 しまりあり
- 9 泥炭
- 10 101R3/1 褐灰色砂質土



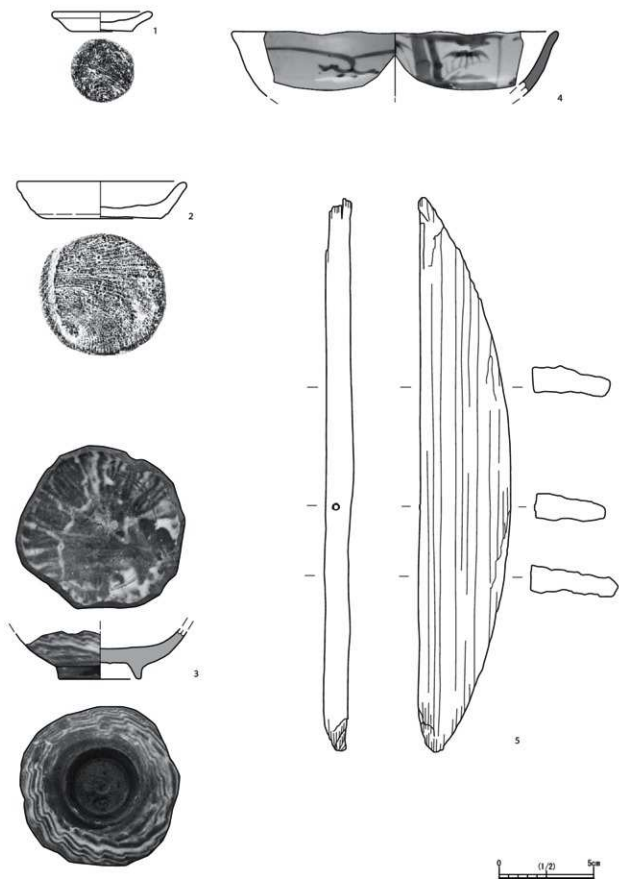
第11図 B区 ビット・井戸跡



- 1 表土層現代の擾乱
- 2 5層と同質のシルト～極細粒砂による人為層
- 3 暗褐色土層 (10YR3/3) 盛土、炭化物やφ5 mm前後以上の赤色粒子、5層のブロックを含む
- 4 に近い赤褐色シルト層 (5YR4/3) 粗砂を含むほかにφ10 mm以下の小礫を含む。5層や9層のブロックを含む
- 5 に近い黄褐色シルト～極細粒砂層 (10YR5/3) 粘性強い 酸化による黄褐色 (10YR5/6) 部分と礫物の腐食による黒褐色 (10YR3/2) 部分とがまだらに混在する
- 6 灰褐色シルト層 (10YR4/1) 粘性強い
- 7 5層と同質堆積であるが垂直に亀裂が入りブロック状に壊れている 粘性強い
- 8 6層と同質であるがやや明るい 粘性強い
- 9 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 下層との境は下層をブロック状に壊しながら堆積している
- 10 灰褐色シルト～極細粒砂層 (7.5YR4/2) 5層と同質のもの形状堆積がみられる
- 11 黒色泥炭層 (7.5YR1.7/1) 能より東の地点よりも礫物が分解されている
- 12 暗赤褐色泥炭層 (5YR3/3) 能地点では根が密になる
- 13 11と同質
- 14 暗青灰色シルト層 (5B4/1) 粒砂を少量含む
- 15 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 3層より粒子が細かい 極細粒砂
- 16 黒褐色土層 (7.5YR3/2) 1.5層より粒子が粗い 細粒砂



第12図 B区 三の堀跡



第13图 B区 出土遺物

第5章 C区（甲府城下町遺跡）

第1節 調査の方法

調査区は、事業用地内における試掘調査の結果をもとに南北約7m、東西約14mの範囲で設定した。表土層は、試掘調査の結果をふまえて、遺構確認面の直上まで重機を用いて掘削し、人力による掘削、遺構の精査、遺構掘削などの発掘作業を行い、調査の進捗に応じて測量及び写真撮影等の記録作業を行った。また、南側を流れる濁川（三の堀）や周辺調査区等との地層の連続状況を確認・記録するため、調査区の西側に4つのトレンチ（1～4号トレンチ）を設定した。

記録図類については世界測地地形座標に基づく基準杭を委託により設置し、立面図および詳細図などの平面図の一部は方眼紙への計測図化、平面図は光波測距儀とコンピュータによる測量で作成した。また、調査の進捗状況および遺物・遺構の確認状況等の記録写真についてはデジタル一眼レフカメラ（NikonD850）により撮影した。

第2節 基本土層

調査区内には10層の土層が調査区内に安定的に堆積している（第23図1～4・13～18層）。1層は現代の砕石層、2層は近現代の盛土層である。3・4層は明確な帰属時期は出土品等から近代の土層と考えられ、暗褐色土ブロック（第18図南壁3層）等が含まれることから人為的な堆積物である可能性がある。

13層以下は自然作用の堆積層である。13層上面は部分的に褐色に変色するほか、上部に植物根の痕跡が複数確認されており、第3節にて記述する地下室遺構の地表をなしていた可能性がある。また、調査区南壁の濁川に近接した最東部では13層の上部が東方向に向かうにつれ下がっていく状況がみられ、土層堆積構造観察（第9章第1節）においては、これは崩壊ないし浸食による作用によるものとされている。この崩壊ないし浸食作用は3号トレンチ（第15図7層上面）や地下室遺構南東部（第18図写）など、濁川に沿った他地点でも確認されている。地下室遺構南東部ではこの崩壊ないし浸食作用の後に盛土している状況もみられ（第18図写）、第23図11・12層についても同様の盛土であると想定される。

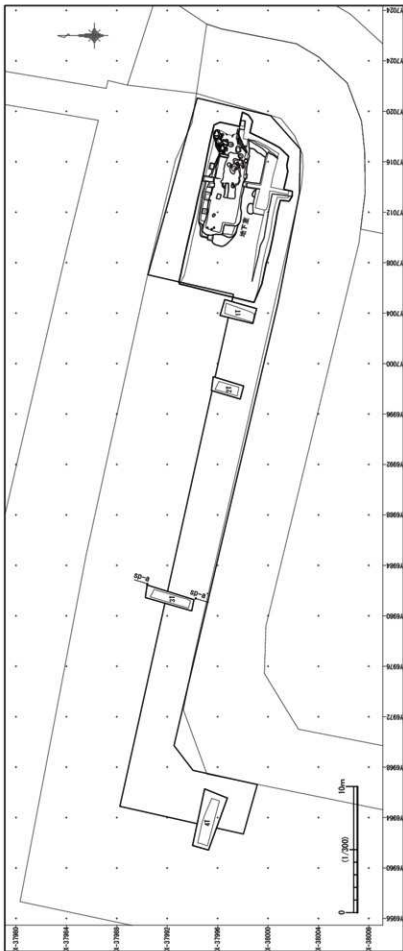
第3節 遺構と遺物

C区では調査区中央部から北東部にかけての範囲で地下室1基を確認した。

掘方 確認できた掘り方の規模は東西約9.0m、南北約3.2mとなる。遺構西側は南西端に小段を有し、最上部は緩やかに、下部は垂直に立ち上がる。南壁はほぼ東西方向にのび、垂直に立ち上がる壁を有する。北側は同様に垂直に立ちあがる壁を有し、西端から約7mまでは南壁と並行するが、以東は角度を変え北東方向にのびる。また、北壁の外側には幅約30～50cmの小段が設けられ、小段の北端には木杭が設置されている。

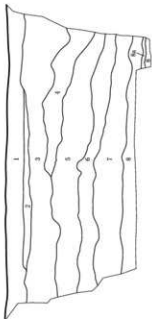
施設 遺構内には木製構造物や石垣が設置されている。木製構造物は掘り方底面付近に南北方向の丸太（「南北丸太」）4本を1.5～1.7mの間隔で設置している。この南北丸太のうち東から2本は約0.7mの長さで北壁に接するように設置されているが、残り3本は約2.2mの長さを有し、両端は南北の両壁に接するように配置されている。また、南北丸太下部には角材や石を設置しているものもある。

南壁際では南北丸太に直行するように東西方向に角材を設置している（「東西角材」）。南壁の東西角材は2本の角材をつなぎ合わせ、総延長は約5.7mとなる。南壁と東西角材の間には2枚の板材（「東西板材」）を上下に積み重ねている。東西板材は、東西角材と同様に東西に2組の上下材を並べることにより総延長は約5.6m、残存高は最大0.7mとなる。また、東西角材に上面に約90cm間隔でほぞ穴を施し、そこに角材を立てることにより板材の北側の支えとしている（「立角



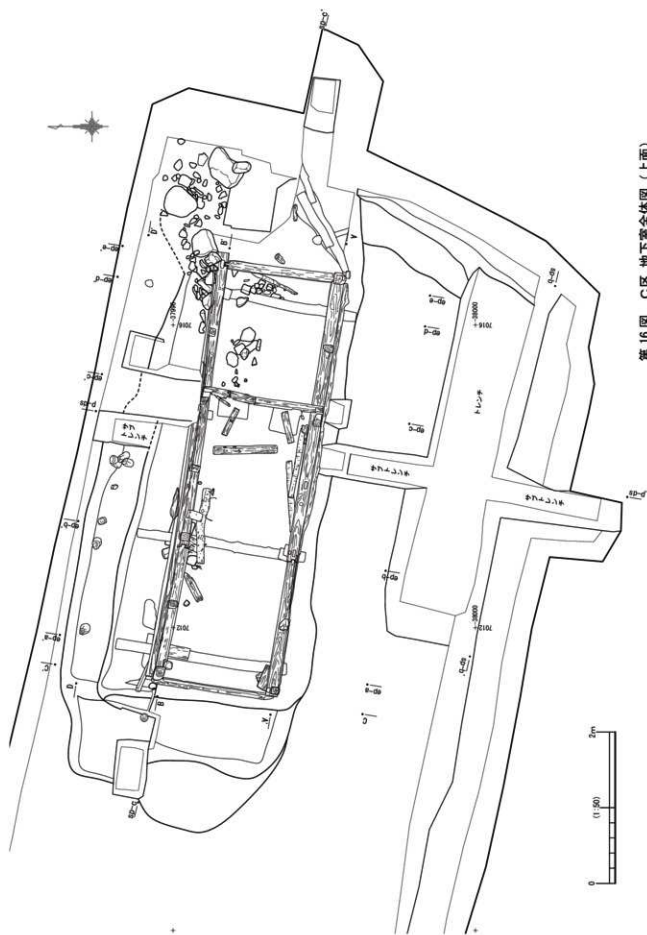
第14図 C区 全体図

259.000m 50.0

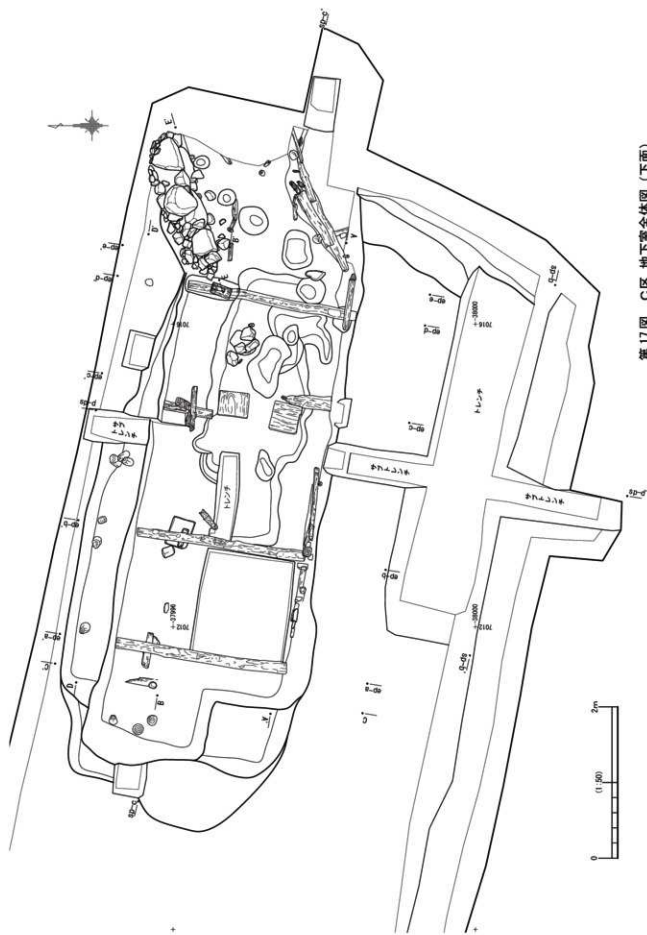


第15図 C区3号レンチ土層図

- 1 10P83/4: 褐色粘土 (硬土) 上部コンクリートが入る。
- 2 10P84/4: 褐色粘土 上部は褐色土 土体工後、水化付着入る。瓦や多量崩土、崩れに下部卵石入る。
- 3 10P83/4: 褐色シルト 土質、粘粒あり、径10mm以下の塊を含む。
- 4 10P83/4: 褐色シルト 土質、粘粒あり、径10mm以下の塊を含む。
- 5 10P83/4: 褐色シルト 土質、粘粒あり、径10mm以下の塊を含む。黄褐色質 (10P85/8) 含む。
- 6 10P83/4: 褐色シルト 土質、粘粒あり、径10mm以下の塊を含む。
- 7 10P82/2: 黄土、黄褐色シルト 土質、粘粒あり、上部は堆積物砂が混入。
- 8 10P82/2: 黄土、黄褐色シルト 土質、粘粒あり、上部は堆積物砂が混入。
- 8a 10P82/2: 褐色シルト 土質、粘粒あり、上部は堆積物砂が混入。



第16図 C区 地下室全体図(上面)

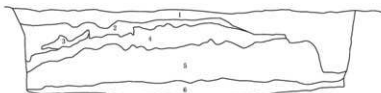


第17図 C区 地下基地図(下面)

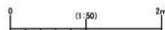
C区 南壁

258.300m 標高

sp-7



- 1 10YR3/3 : 暗褐色土 大礫～細礫混じり。
- 2 10YR3/2 : 黒褐色シルト しまり・粘性あり。
- 3 10YR3/3 : 暗褐色シルト しまり・粘性あり。
- 4 10YR3/4 : 暗褐色シルト しまり・粘性あり。
- 5 10YR7/3 : にぶい黄褐色シルト (遺構確認面) しまり・粘性あり。
上部に褐色に変色している部分あり。根跡多数みられる。
- 6 10YR4/1～5/1 : 黄灰色シルト しまり・粘性あり。
にぶい黄褐色 (10YR7/3) シルト層を挟在する。



C区 地下室南東部



写 C区 地下室南東部 オルソ写真

※上層番号は第23図に対応

第18図 C区 基本土層図

材」)。

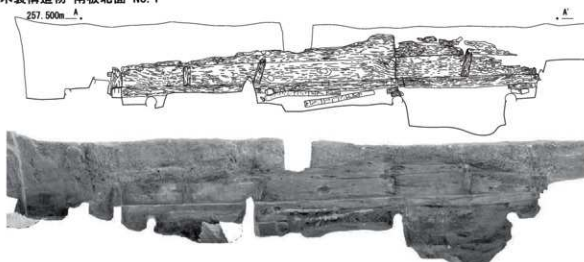
北側部分では南側構造物より北側約1.5mの地点に南壁と同様・同規模の構造物が設置されているが、東西板材は上下方向に3枚積み重ねている。また、東西板材と北壁の間には0.3～0.5mの空間が設けられているが、東西板材の北側には板材の支えとなる材は確認されておらず、空隙に埋土を充填していたものと想定される。

西側では南北に設置された東西角材の西端部に、長さ約1.6mの板材2枚を上下に積み重ね(「南北板材」)、最大残存高は約0.3mとなる。南北板材の北西部の空隙には土が充填されており、階段状の空間が造り出されている。

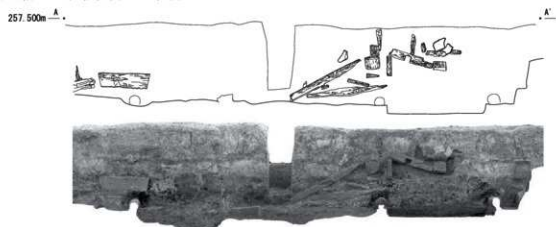
北東部の掘り方の向きが変化する範囲では、北側の壁に沿って石積みが確認されている。石積みの規模は東西約2.4m、最大高さ0.7m、最大2段の自然石を多用する野面積みで積まれており、石積み下には胴木が設置されている。胴木は長さ約1.2mの丸太材からなり、石垣面に沿って2本の胴木を並べ、胴木の南側には木杭が設置されている。

石積みの南側1.6mの地点では石積みと並行する方向に丸太材が並べられている(「斜め丸太」)。斜め丸太の北側は木杭が打たれ、南側には盛土が充填されており、石積みとともにそれぞれ遺構

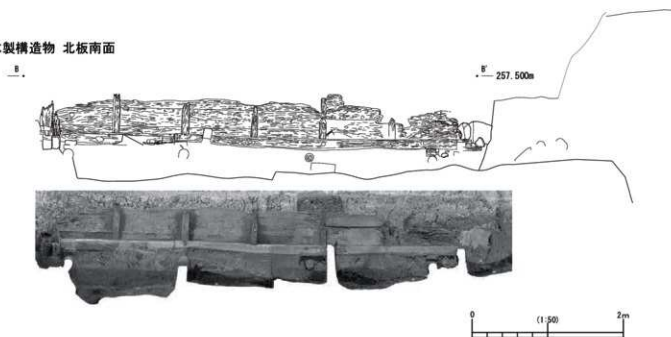
木製構造物 南板北面 No. 1



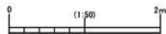
木製構造物 南板裏側 (No.1裏側)



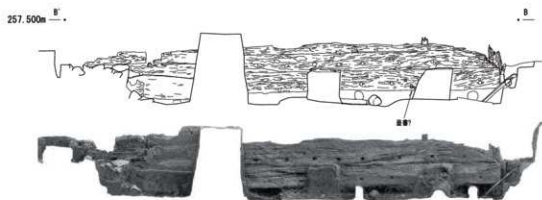
木製構造物 北板南面



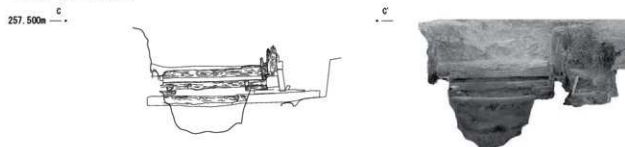
第19図 C区 地下室木製構造物立面図(1)



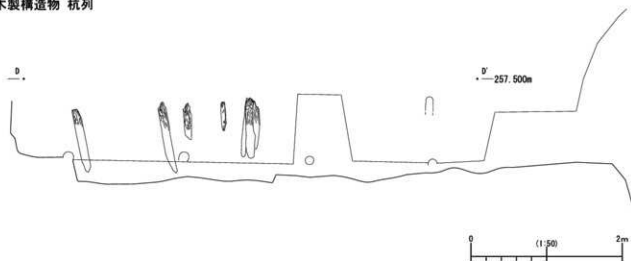
木製構造物 北板北面



木製構造物 西板東面



木製構造物 杭列



第20図 C区 地下室木製構造物立面図(2)

の南北壁としての機能を有していたと推定される。

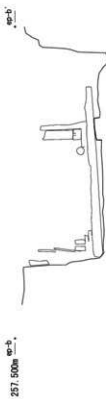
土層 遺構内の堆積土層は大きく埋土1～3の3つに大別される(第9章第1節)。埋土1は遺構廃絶後の埋め戻し土層、埋土2は遺構機能時の堆積物、埋土3は木製構造物設置時の盛土である。遺構東西方向の土層断面図(第22図)で見ると、埋土3の22層は遺構西側の南北丸太付近と東側の斜め丸太以東に堆積する。17～21層は埋土2であり、西側の階段状空間の上面レベルまでほぼ水平に堆積する。1～16層は埋土1であり、各層の上面ないし下面は東から南に向かって傾斜する傾向がみられ、東側から西側に向かって埋められていった状況が読み取れる。

遺物 埋土1・2から陶磁器やレンガ、木製品、金属製品が出土している。埋土からは近代所産の

木製構造物エレベーション図 No. 1



木製構造物エレベーション図 No. 2



木製構造物エレベーション図 No. 3



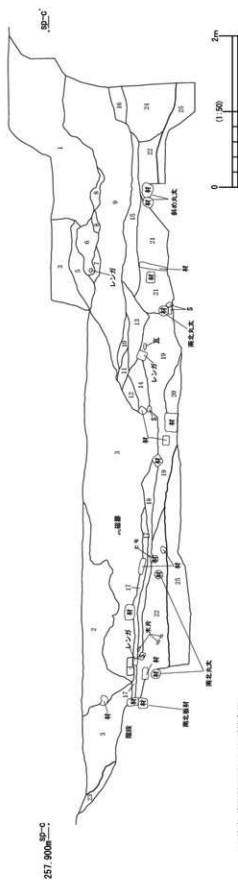
木製構造物エレベーション図 No. 4



木製構造物エレベーション図 No. 5



第21図 C区 地下室木製構造物エレベーション図



- 1 焼土・炭化材・瓦・レンガ等含む。
 - 2 2.5/3/1: 黒褐色粘土 しまりあり。部分多量に含む。
 - 3 10/23/1: 黒褐色粘土 黄色土板(塊山)、炭分含む。しまりあり。
 - 4 10/23/1: 黒褐色粘土 黒・レンガ片・木材含む。しまり・粘性あり。
 - 5 10/23/1: 黒褐色粘土 黒・レンガ片・木材含む。しまり・粘性あり。
 - 6 5/3/1: オリーブ褐色粘土 しまりあり。炭分入る。
 - 7 10/23/2: 黒褐色土 径約2cmの礫を含む。
 - 8 10/23/2: 黒褐色粘土 しまりあり。
 - 9 10/23/2: 黒褐色粘土 しまりあり。
 - 10 2.5/3/2: 黒褐色粘土 しまりあり。粘性強い。炭化材含む。
 - 11 2.5/3/3: 黒褐色粘土 しまりあり。粘性強い。炭化材含む。
 - 12 2.5/3/4: 黒褐色砂質粘土 炭化材入る。炭化材入る。
 - 13 2/0: 黒褐色土 青白色を含む。しまりあり。
 - 14 10/23/1: 黒褐色粘土 炭化材を含む。しまりあり。
 - 15 10/23/1: 黒褐色砂質粘土 褐色粘土を含む。しまり・粘性あり。
 - 16 10/23/1: 黒褐色粘土 褐色粘土を含む。しまり・粘性あり。
 - 17 7.5/2/1: 黒色シルト しまり強い。
 - 18 2.5/3/2: 砂ネリ層 しまり強い。
 - 19 10/23/1: 黒褐色粘土 しまり強い。
 - 20 10/23/1: 黒褐色粘土 しまり強い。
 - 21 2.5/3/1: 黒褐色粘質シルト しまりあり。
 - 22 10/6/1: 黒褐色粘土 25層の泥炭層・木片入る。しまり強い。
 - 23 10/6/2: には、黒褐色粘質シルト(埋山層) しまりあり。
 - 24 埋設物(埋山層) 黒褐色粘土(埋山層) しまり強い。
- ※1-16: 断面1 17-21: 断面2 22: 埋土

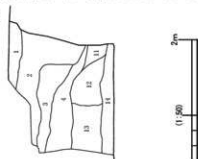


C区地下室 東西土層東端下部 (オゾン写真)

第22図 C区 地下室土層断面図(東西)

258 500m 10⁴-d

- 1 砕石
 2 10YR5/3：暗褐色土 硬質じる。
 3 10YR5/2：黄褐色シルト しまり・粘性あり。
 4 10YR5/4：暗褐色土 粘性あり しまり・粘性あり。
 5 10YR5/1：暗褐色土 しまり・粘性あり。
 6 5E5/1：緑灰色土 しまり・粘性あり。
 7 10YR5/1：暗褐色土 しまり・粘性あり。
 8 10YR7/3：黄褐色シルト しまり・粘性あり。
 9 10YR7/3：黄褐色シルト しまり・粘性あり。
 10 10E4/1：暗褐色土 硬質じる。
 11 暗褐色土
 12 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。
 13 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。
 14 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。
 15 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。
 16 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。
 17 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。
 18 10YR5/1：暗褐色土 黄褐色土 硬質じる。



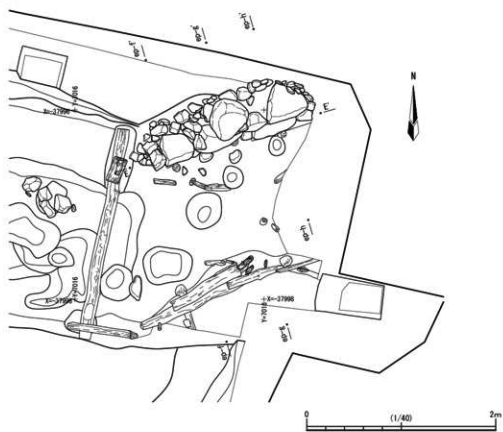
C区 地下至南北土層北端部 (オルソン写真)



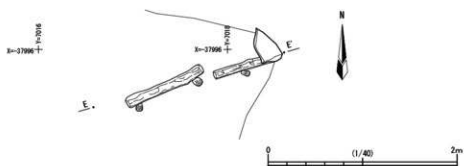
C区 地下至南北土層南端部 (オルソン写真)

第23図 C区 地下室土層断面図 (南北)

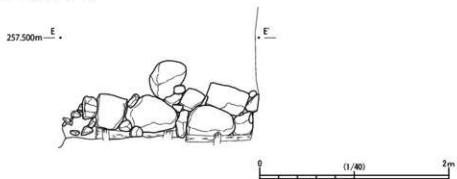
地下室 石積平面图



地下室 石積下胴木平面图



地下室 石積立面图



第24图 C区 地下室 石積 (1)

ものが特に多い傾向にあり、レンガ（第26図No.9）は埋土1層中より出土しており、近代以降に廃絶し、埋められた状況を示しているものと考えられる。埋土2からは近世・近代の両者が出土しており、地下室遺構の使用時期は近世から近代にかけてのものと考えられる。

石積エレベーション図 No. 1

257.500m ep-f

ep-f



石積エレベーション図 No. 2

257.500m ep-g

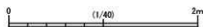
ep-g



石積エレベーション図 No. 3

257.500m ep-h

ep-h



第25図 C区 地下室 石積（2）

第6表 C区陶磁器観察表

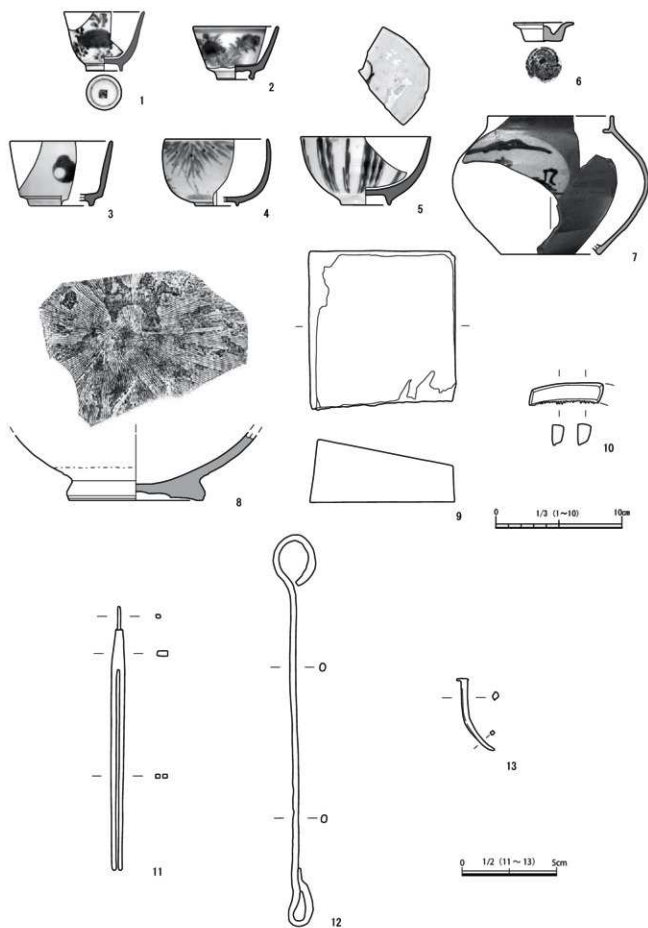
遺物番号	図取番号	実測番号	注記	出土地点	種類	器種	時期	法量 (cm)			色調	胎土	備考
								口径	口径	器高			
1	第26図	20	KJM C区 J-1 220014	埋下室	磁器	湯呑	近代	16.4	28	4.7	10Y8-1 灰白色	磁密	透明釉
2	第26図	22	KJM C区 J-1 220017	埋下室	磁器	盆	近代	6.8	28	4.2	10Y8-1 灰白色	磁密	透明釉
3	第26図	12	KJM C区 J-6 211220	埋下室	磁器	湯呑	近世	18.0	15.0	5.1	10Y8-1 灰白色	磁密	透明釉
4	第26図	13	KJM C区 J-5 211220	埋下室	磁器	小碗	近世	18.0	3.4	5.3	10Y8-1 灰白色	磁密	透明釉
5	第26図	23	KJM C区 J-1 220017	埋下室	磁器	碗	近代	10.2	14.0	3.4	10Y8-1 灰白色	磁密	透明釉
6	第26図	18	KJM C区 T-1 220009	埋下室	陶器	土瓶蓋	近代	4.8	28	28	7.5Y8.6-6 褐色	砂粒子	施釉
7	第26図	19	KJM C区 T-3-3 220209	埋下室	陶器	土瓶	近代	10.0	16.0	11.0	7.5Y8.6/4.1 赤褐色	砂粒子	施釉
8	第26図	14	KJM C区 W-1 211220	埋下室	陶器	すり鉢	近世	-	10.6	3.4	10Y8/7.4 に赤・黄褐色	赤色・白色粒子	

第7表 C区土製品・木製品観察表

遺物番号	図取番号	実測番号	注記	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	備考
							長さ	幅	厚さ			
9	第26図	15	KJM C区 中トレセクションズ内 レンガ1 220202	埋下室	土製品	レンガ	12.7	11.6	3	5YR6.6 褐色	赤色・白色粒子・砂粒子	
10	第26図	7	KJM C区 W-1 211220	埋下室	木製品	桶	3.1	1.7	1.0			

第8表 C区金属製品観察表

遺物番号	図取番号	実測番号	注記	出土地点	種類	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
							長さ	幅	厚さ		
11	第26図	21	KJM C区 カンザシ 220309	埋下室	金属製品	かんざし	14.0	0.75	0.25	9.1	
12	第26図	17	KJM C区 I-2 220309	埋下室	鉄製品	鉄製品	22.0	12.3	0.3	16.1	
13	第26図	16	KJM C区 I-1 220309	埋下室	鉄製品	釘	3.8	0.4	0.4	1.5	



第26图 C区出土遗物

第6章 D区(甲府城下町遺跡)

第1節 調査の方法

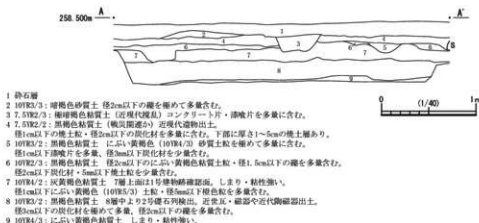
調査区は、事業用地内における試掘調査の結果をもとに南北約15m、東西約36mの範囲で設定した。表土層は、試掘調査の結果をふまえて遺構確認面の直上まで重機を用いて掘削し、人力による掘削、遺構の精査、遺構掘削等の発掘作業を行い、調査の進捗に応じて測量及び写真撮影等の記録作業を行った。

記録図類については世界測地座標に基づく基準杭を委託により設置し、記録図は原則として光波測距儀により行った。また、調査の進捗状況および遺物・遺構の確認状況等の記録写真についてはデジタル一眼レフカメラ(NikonD850)により撮影した。

第2節 基本土層

南東部サブトレンチでは9層の土層が確認されており、このうち、1・4・6～9層の6つの層が調査区内に安定的に堆積している(第27図)。

4層からは近現代の遺物が出土し、また、下部には焼土層が堆積しており、太平洋戦争中の甲府空襲に関連する可能性もある。7層上面では1号建物跡等の遺構が確認されており、2号礎石列は8層中位より確認されている。8層中からは近世の瓦や磁器(第30図1～3)とともに近代の陶磁器等が出土しており、確認された遺構は近代遺構の所産と考えられる。



第27図 D区南東サブトレンチ東壁土層図

第3節 遺構と遺物

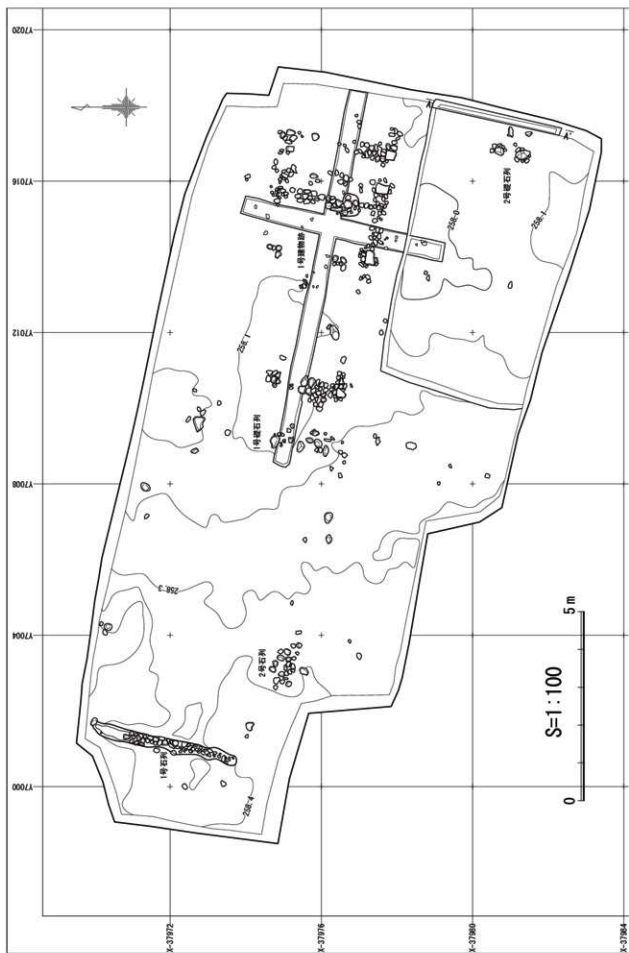
D区からは建物跡1軒、礎石列2条、石列2条を確認している。

1 建物跡(1号建物跡)(第29図)

調査区北東部に位置する。近現代の生活活動等により全体像は不明瞭であるが、残存状態の良い南東部では、約90cm間隔に配置された礎石間に礎を充填させている。確認された建物規模は東西約7m、南北約3m、推定される礎石配置は南北3間、東西7間であるが、南東隅では重点礎が東側に延びている状況もあり、建物規模等はさらに大きくなる可能性もある。また、東から2間目の空間には南北方向の礎石・充填礎があり、建て替えまたは複数の建物の存在も示唆される。礎石周辺からは近代の陶磁器等が出土しており、近代前後に存在していた建物跡と考えられる。

2 礎石列(1号礎石列・2号礎石列)(第29図)

1号礎石列は調査区中央部、2号礎石列は調査区南東部に位置する。両者とも礎石は約65cmの間隔で配置され、2号礎石は南北1間、1号礎石列は部分的に礎石が欠如しているが南北5間であったと考

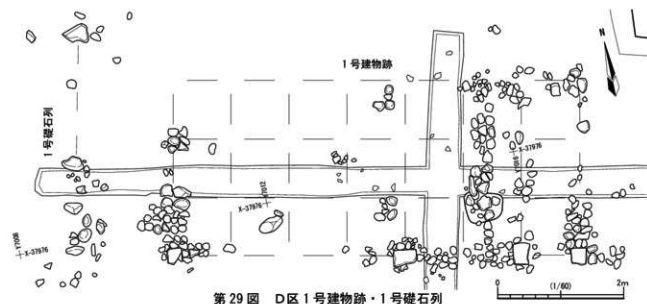


第28圖 D区(甲府城下町遺跡)平面図

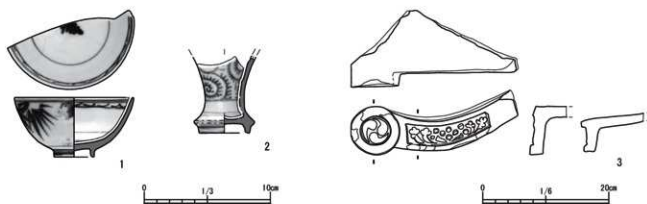
えられる。出土遺物は明確ではないが、いずれも1号建物跡と同一層より検出されていることから、1号建物跡とはほぼ同時期のものと推測される。

3 石列(1号石列・2号石列)

1・2号石列ともに調査区西側に位置する。1号石列は南北長約3.9m、幅0.3～0.4m溝内に礫を充填している。2号石列は明確な掘り込みは確認されていないが、東西約1.5m、南北約0.5mの範囲に礫が充填されている。



第29図 D区1号建物跡・1号礫石列



第30図 D区出土遺物

第9表 D区陶磁器観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	焼成	備考
						口径	口径	器高				
1	第30図	24	甲府城下町D区南東部中ア1r	磁器	碗	19.4	(3.2)	4.7	2SGY8-1灰白色	網密・砂粒子	良好	透明釉
2	第30図	25	甲府城下町D区南東部中ア1r	磁器	仏具	-	4.0	6.1	10Y 灰白色	網密	良好	透明釉

第10表 D区瓦観察表

遺物番号	図版番号	実測番号	注記	種類	器種	法量 (cm)			色調	胎土	焼成	備考
						長さ	幅	厚さ				
3	第30図	26	甲府城下町D区南東部中ア1r	瓦	軒丸瓦	11.2	26.5	1.8	5Y6-2灰オリーブ色	白色・黒色粒子	やや粗	

第7章 E区(甲府城下町遺跡)

第1節 調査の方法

調査区は、事業用地内における試掘調査の結果をもとに南北約15m、東西約36mの範囲で設定した。表土層は、試掘調査の結果をふまえて、遺構確認面の直上まで重機を用いて掘削し、人力による掘削、遺構の精査、遺構掘削などの発掘作業を行い、調査の進捗に応じて測量及び写真撮影等の記録作業を行った。

記録図類については世界測地形座標に基づく基準杭を委託により設置し、立面図および詳細図などの平面図の一部は方眼紙への計測図化、平面図は光波測距儀とコンピュータによる測量で作成した。また、調査の進捗状況および遺物・遺構の確認状況等の記録写真についてはデジタル一眼レフカメラ(NikonD850)により撮影した。

発掘調査では溝状遺構5条、土坑3基、井戸1基、柱穴38基を検出しており、各遺構の略式記号は以下のとおり付している。

溝状遺構：SD 土坑：SK 柱穴：SP 井戸：SE

また、発掘調査時に付した遺構名等については、調査時または調査後の検討により第11表のとおり変更している。

第11表 E区遺構変更表

変更前	変更後	変更前	変更後
SD01	穴番	SP27	穴番
SK03	穴番	SP28	穴番
SP08	穴番	SP29	穴番
SP12	穴番	SP26	SE01
SP19	穴番	SP43	SD06
SP26	穴番		

第2節 基本土層

調査区内に安定的に堆積する1～3層に分けられる(第31図)。調査で確認された遺構はいずれも2層上面で確認されている。以下に、個々の層について概観する。

- 1層：10YR2/1 黒色土層。表土層。近現代の生活痕跡により大きく乱れている。
- 2層：10YR3/3 暗褐色粘質土層。遺構検出面。しまり・粘性強く、鉄分混じる。径2～3cm大の礫を多量に含む。
- 3層：7.5Y4/1 灰色砂質シルト層。ラミナ構造がみられ、河川作用による自然堆積層である。

土層堆積状況については、委託業務より堆積構造観察を行っており、第2層は礫が多く含まれるものの第3層を削割せずに堆積していることから、水の営力によるものではなく、人為的に盛土されたものとされている。(第9章第2節参照)



第31図 E区基本土層図

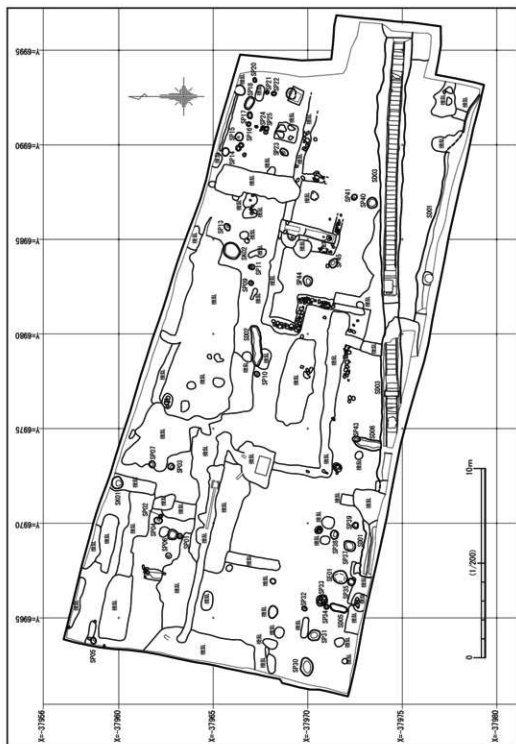
第3節 遺構と遺物

1 溝状遺構

E区からは5条の溝状遺構を検出している。今回検出した遺構は、多くが深さ約0.05から0.1mとごく浅く、用途等が不明なものが多い。以下に特徴的な溝状遺構について記述するが、各遺構のデータは第12表に掲載している。

第12表 E区溝状遺構観察表

遺構名	縦断 (m)			時代	重観	出土遺物	備考
	長径	短径	深さ				
SD01 (26.0)	(0.7)	0.85		近代以降	SD03を切る。	古銭磁器類、陶器類	
SD02	2.1	0.5	0.1	近代		近代銭	
SD03 (22.0)	1.0	1.05		近代	SD03に切られる。	古銭磁器類、陶器類	立面に木製磚造物。
SD05	0.9	0.4	0.05	-			
SD06 (1.5)	0.6	0.1		-	SP43に切られる。	漆喰	



第32図 E区(甲府城下町遺跡)全体図

(1) SD03 (第33図)

遺構概要 調査区中央部南壁から東壁中央部に位置する。西側はおよび東側は調査区外に及ぶため全貌は不明であるが確認された規模は、長さ約22m、幅約1m、深さ約1mで、東西方向に主軸をもつ。西端部でSD01と交錯し、土層堆積状況からSD01に切られて構築されている。

遺構底面には板材とその南北両側に側板を設置した木製構造物が敷設され、水路としての機能を有していたものと想定される。底板となる板材にはチョウナや鋸による加工痕跡のほか、機械製材の痕跡が認められる。底面の傾斜は東から西に向かって下がっている。

遺構内の土層堆積堆積構造観察を委託により行っており、木製構造物上の土層は人為的に埋め戻さ

れ、水路としての利用が終了した後に短時間で埋め戻されたとされる。(第9章第2節参照)

出土遺物 覆土内より近世の磁器椀(第40図8)、陶器皿(第40図7)等が出土している。

帰属時期 出土遺物には近世の遺物があるが、底面の木製構造物では近代以降の技術である機械製材の痕跡が認められることから、近代以降に使用されたと考えられる。

2 土坑

E区からは3基の土坑を検出し、各遺構のデータは第13表に掲載した。後世の生活活動により上部が削平されており、SK04以外は全貌が不明である。SK04は近代の陶器甕が埋設された埋堂遺構である。

第13表 E区土坑観察表

遺構名	形状	規模(m)			時代	出土遺物	備考
		長径	短径	深さ			
SK01	-	-	-	-	近代	木桶	上部不明。
SK02	楕円形	0.9	0.8	0.1	近代		
SK04	楕円形	(0.55)	-	0.25	近代	近代陶器甕	埋堂遺構。

3 井戸

E区からは1基の井戸を検出している。

(1) S E O 1 (第36図)

遺構概要 調査区南西部に位置する。長径約0.8m、短径約1.0mである。石や木材等の構材はみられない。覆土も単層であり、使用終了後一度に埋設されたものと考えられる。

出土遺物 なし

帰属時期 不明。

4 柱穴

E区からは38基の柱穴を検出しており、各遺構のデータは第14表に掲載した。柱穴の大半が遺物を伴わないため詳細な帰属時期は判然としない。柱穴中には集石を伴うもの(SP30・31・33)があり、それらは礎石の可能性もある。また、柱材が残存しているもの(SP07)もある。

第14表 E区柱穴観察表

遺構名	形状	規模(m)			出土遺物	備考
		長径	短径	深さ		
SP01	楕円形	0.27	0.24	0.25	近代磁器・陶器	
SP02	楕円形	0.20	0.16	0.09	近代磁器類	
SP03	円形	0.33	0.32	0.41	近代磁器・陶器	
SP04	楕円形	0.42	0.30	0.15		
SP05	楕円形	0.34	0.27	0.45		
SP06	不整形	0.51	0.47	0.14		集石
SP07	楕円形	0.36	0.31	0.25		柱材
SP08	-	-	-	-		欠番
SP09	円形	0.25	0.23	0.18		
SP10	楕円形	0.30	0.24	0.16		
SP11	不整形	0.32	0.25	0.10		
SP12	-	-	-	-		欠番
SP13	不整形	0.38	0.29	0.10		
SP14	楕円形	0.31	0.26	0.23		
SP15	円形	0.44	0.41	0.28		
SP16	円形	0.23	0.21	0.17		
SP17	楕円形	0.35	0.25	0.08		
SP18	長円形	0.69	0.43	0.08		
SP19	-	-	-	-		欠番
SP20	楕円形	0.24	0.15	0.09		
SP21	円形	0.19	0.17	0.07		
SP22	円形	0.25	0.21	0.09		
SP23	-	0.15	-	0.40		

遺構名	形状	規模(m)			出土遺物	備考
		長径	短径	深さ		
SP24	不整形	0.25	(0.20)	0.13		SP25を切る。
SP25	-	(0.18)	0.17	0.07		SP24に切られる。
SP26	-	-	-	-		欠番
SP27	-	-	-	-		欠番
SP28	-	-	-	-		欠番
SP29	-	-	-	-		欠番
SP30	不整形	0.95	0.62	0.13		集石
SP31	不整形	0.66	0.56	0.08		集石
SP32	楕円形	0.26	0.22	0.15		
SP33	楕円形	0.64	0.55	0.14		集石
SP34	円形	0.25	0.22	0.29		
SP35	円形	0.38	0.37	0.07		
SP36	-	-	-	-		SK04に重畳
SP37	不整形	0.65	0.50	0.05		
SP38	不整形	0.46	0.41	0.16		
SP39	楕円形	0.34	0.31	0.07		
SP40	円形	0.56	0.54	0.15		
SP41	円形	0.31	0.27	0.37		
SP42	楕円形	(0.41)	0.27	0.11		SK06を切る。
SP43	-	-	-	-		SK06に重畳
SP44	楕円形	0.53	0.46	0.13		
SP45	不整形	0.50	0.40	0.19		近代磁器

第15表 E区陶磁器観察表

報告番号	図版	洋記	出土地点	類別	器種	時期	法量		備考
							口径	高さ	
1	第40図	KJM SD01 230809	SD01	陶器	甕	近世	-	4.8 (3.4)	
2	第40図	KJM SD01 230809	SD01	陶器	甕	近世	-	3.8 (2.2)	
3	第40図	KJM SD01 230808	SD01	陶器	鉢	跡	(15.2)	-	(3.5)
4	第40図	KJM SD01 埋土層 230816	SD01	陶器	鉢	跡	-	-	(4.5)
5	第40図	KJM SD01 230809	SD01	陶器	鉢	跡	-	-	(3.1)
6	第40図	KJM SD02 P2 230802	SD02	土器	鉢	跡	-	11.4 (2.0)	
7	第40図	KJM SD03 P11 7積土 230824	SD03	陶器	灯明皿	古墳	8.8	3.8	2.0 羨門付
8	第40図	KJM SD03 埋土層 230823	SD03	陶器	甕	近世	10.9	4.1	5.3
10	第40図	KJM SK04 P9	SK04	陶器	甕	跡	-	22.4 (22.0)	
11	第41図	KJM SP01 P4 230729	SP01	磁器	甕	近代	(6.4)	3.4	4.3
12	第41図	KJM SP01 P4 230728	SP01	陶器	鉢	近世	(12.2)	-	-
13	第41図	KJM SP02 230729	SP02	磁器	甕	近世	-	16.2 (1.7)	鑑定焼
14	第41図	KJM SP03 埋土層 230801	SP03	陶器	甕	近世	-	(6.8) (2.2)	
15	第41図	KJM SP03 230819	SP03	磁器	段差皿	近世	(10.8)	-	(4.2)
17	第41図	KJM P42 230725	遺構外	陶器	甕	近世	-	4.7 (4.4)	羨門付、サブレンチ内出土
18	第41図	KJM 北西区黒色土層 230729	遺構外	陶器	甕	近世	-	(7.5) (4.2)	
19	第41図	KJM 黒色土層 230728	遺構外	磁器	紅皿	近代	(6.8)	(2.0)	1.5
20	第41図	KJM 不明 230822	遺構外	磁器	甕	近代	9.4	5.0	2.5

第16表 E区木製品観察表

遺物番号	図版番号	出土地点	類別	寸法 (cm)			備考
				最大長	最大幅	厚さ	
9	第40図	SK01	木桶	81.5	84.0	1.7	木釘により2枚の板材を接合
16	第41図	SP07	木柱	24.3	10.7	10.8	上部は腐乱

第17表 E区金属製品観察表

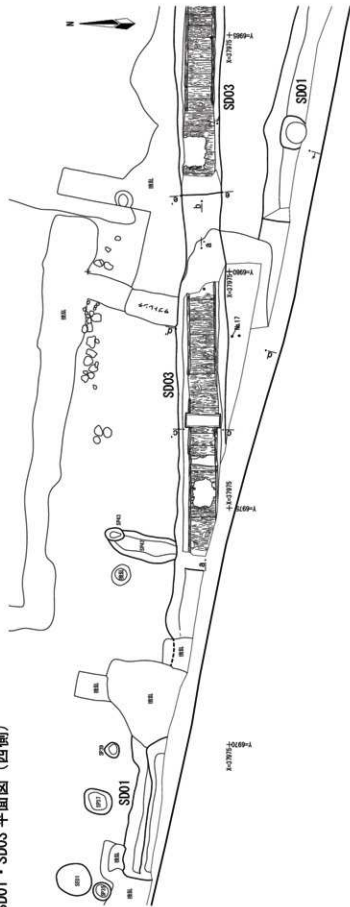
遺物番号	図版番号	出土地点	洋記	素材	類別	寸法 (cm)		重量 (g)	備考
						最大長	最大幅		
21	第41図	遺構外	KJM 黒色土層 古銭01 230725	銅	古銭	2.3	2.3	0.1	1.81 貫水鑑定
22	第41図	遺構外	KJM 南西区黒色土層一括 230803	鉄	和釘	(10.8)	0.4	0.4	10.91
23	第41図	遺構外	KJM 南西区黒色土層一括 230728	鉄	和釘	(7.8)	2.5	0.6	15.96
24	第41図	遺構外	KJM 南西区黒色土層一括 230728	鉄	和釘	(5.0)	0.9	0.5	11.63

第18表 E区SD03木製構造物 底板観察表

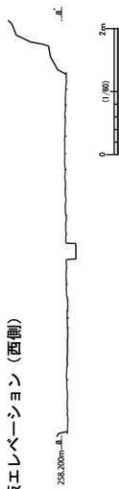
遺物番号	実測	器種	寸法 (cm)			その他 (表面加工痕跡)
			長さ	幅	厚さ	
1		板材	(85)	(20)	2.2	釘穴。
2		板材	(20)	(11.0)	2.0	釘穴。
3		板材	(55.0)	(8.0)	2.0	釘穴。
4		板材	44.0	2.0	2.0	釘穴。
5.A	第42図	板材	44.0	(21.5)	2.5	機械製材か。
5B		板材	44.0	(8.0)	2.0	大眼か。
6		板材	(33.5)	(2.5)	2.0	大眼か。
7		板材	(18.0)	(17.0)	2.2	大眼か。
8		板材	(2.0)	(17.5)	2.0	機械製材か。
9		板材	44.0	(25.5)	2.0	チャウナ。釘穴。
10		板材	(51.0)	(18.5)	2.2	機械製材か。釘穴。
11		板材	43.5	(16.0)	2.4	機械製材か。本釘から4cmに北口方向の釘あり。
12		板材	44.0	(2.5)	2.5	機械製材か。
13		板材	63.5	(23.5)	2.5	機械製材か。釘穴。
14		板材	(30.0)	(14.0)	2.5	機械製材か。
15		板材	44.0	(21.0)	2.9	機械製材か。
16		板材	44.0	(24.0)	2.5	機械製材か。
17		板材	44.0	(21.5)	2.0	チャウナ。
18		板材	44.0	(25.5)	2.0	機械製材か。
19		板材	(31.5)	(17.0)	1.8	機械製材か。
20		板材	44.0	(26.5)	2.5	断面あり。釘穴あり。北口から5cmに北口方向の釘あり。
21		板材	44.0	(8.0)	2.0	チャウナ。釘穴あり。
22		板材	44.0	(11.0)	2.4	加工痕不明瞭。
23		板材	44.0	(24.0)	2.5	加工痕不明瞭。
24		板材	(53.4)	(12.0)	2.0	加工痕不明瞭。
25		板材	(45.0)	(23.0)	2.0	加工痕不明瞭。
26		板材	(33.0)	(24.0)	2.0	加工痕不明瞭。
27		板材	(32.5)	(17.0)	2.0	大眼か。ほぞ穴あり。取付材か。
28		板材	63.5	(17.8)	2.5	大眼か。
29		板材	(21.5)	(7.0)	2.5	加工痕不明瞭。
30		板材	44.0	(22.0)	2.0	機械製材か。
31		板材	(47.0)	(22.0)	2.2	機械製材か。
32		板材	(37.5)	(20.0)	2.5	加工痕不明瞭。
33		板材	(61.5)	(14.0)	2.5	加工痕不明瞭。
34		板材	63.5	(20.0)	2.5	加工痕不明瞭。
35		板材	(41.0)	(20.0)	2.5	加工痕不明瞭。
36		板材	(37.5)	(8.0)	(1.5)	機械製材か。

遺物番号	実測	器種	寸法 (cm)			その他 (表面加工痕跡)
			長さ	幅	厚さ	
37		板材	(41.5)	(11.5)	(1.8)	機械製材か。
38		板材	44.0	(18.5)	2.8	チャウナ。断面から4.5cmに北口方向の釘あり。
39		板材	(60.0)	(18.0)	2.0	機械製材か。
40		板材	(21.5)	(8.0)	2.0	断面あり。
41		板材	(50.0)	(18.0)	(1.5)	断面あり。断面から7cmに北口方向の釘あり。
42		板材	(26.5)	(21.0)	(1.5)	加工痕不明瞭。
43		板材	44.0	(17.0)	2.5	チャウナ。
44		板材	44.0	(18.0)	(2.5)	チャウナ。
45		板材	(13.0)	(1.4)	1.2	加工痕不明瞭。
46		板材	64.5	(25.5)	2.2	機械製材か。
47		板材	63.0	(26.0)	2.0	機械製材か。
48	第42図	板材	63.6	(18.5)	1.8	断面あり。
49		板材	63.5	(26.5)	2.0	大眼か。
50		板材	44.0	(21.0)	2.0	大眼か。
51		板材	44.0	(23.1)	2.0	大眼か。断面から8cmに北口方向の釘あり。
52	第42図	板材	63.2	(25.5)	1.5	大眼か。断面から4.5cmに北口方向の釘あり。
53		板材	44.0	(25.5)	2.0	機械製材か。
54		板材	44.0	(25.0)	2.5	チャウナ。
55		板材	(63.5)	(24.0)	2.0	加工痕不明瞭。釘穴あり。
56	第42図	板材	63.0	(18.0)	2.0	断面あり。釘穴あり。
57	第42図	板材	44.0	(26.5)	2.5	チャウナ。釘穴あり。
58		板材	63.0	(27.0)	1.8	機械製材か。
59		板材	63.0	(18.5)	(1.0)	断面長方形。加工痕不明瞭。
60		板材	(61.5)	(29.0)	2.0	加工痕不明瞭。釘穴あり。
61		板材	64.5	(25.0)	2.5	機械製材か。釘穴あり。
62		板材	44.0	(23.8)	(1.8)	加工痕不明瞭。
63		板材	(55.0)	(13.0)	(12.5)	加工痕不明瞭。
64		板材	(55.0)	(18.0)	(1.5)	加工痕不明瞭。釘穴あり。
65		板材	64.0	(15.5)	2.2	加工痕不明瞭。釘穴あり。
66		板材	(50.0)	(26.5)	(1.5)	機械製材か。釘穴あり。
67		板材	(50.0)	(26.5)	(1.8)	機械製材か。釘穴あり。
68		板材	(61.0)	(18.0)	(1.4)	加工痕不明瞭。
69		板材	(40.0)	(12.0)	(1.5)	加工痕不明瞭。
70		板材	(42.5)	(14.0)	(2.5)	加工痕不明瞭。
71		板材	(24.0)	(8.8)	(1.0)	加工痕不明瞭。
72		板材	(42.0)	(12.0)	(0.7)	加工痕不明瞭。

SD01・SD03 平面図 (西側)

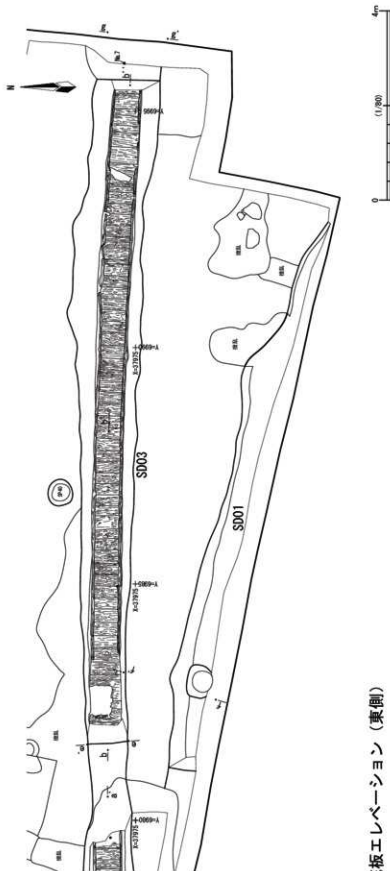


SD03 底板エレベーション (西側)

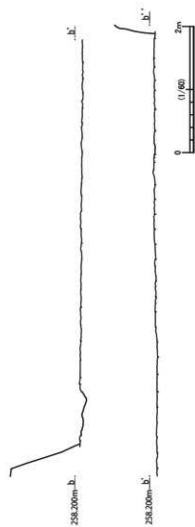


第33図 E区 SD01・03 (1)

SD01・SD03 平面図 (東側)



SD03 底板エレベーション (東側)



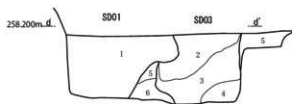
第34図 E区 SD01・03 (2)

SD01・SD03 交差部

SD03 木製構造物下部



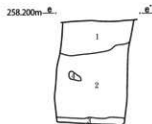
- 1 N30・増褐色粘質シルト（地山）
しまり・粘性強い。



- 1 10YR3/2 増褐色粘質土（SD01埋土）
粗砂・真砂土混じる。ブロック混じりの人為埋土。
2 10YR4/1 褐色粘土 炭化材・鉄分混じる。
3 10YR6/1 褐色粘土 真砂土混じる。炭化材は2層より少ない。
4 10YR3/2 増褐色粘土（SD03埋土）炭化物含む。細少量含む。
5 10YR3/2 増褐色粘質土（地山）
しまり・粘性強い。植物・鉄分・真砂土含む。
6 5YR3/4 増赤褐色粘質土 粗砂混じる。真砂土多く含む。

SD03 中央部

密土層堆積構造観察（第9章第2節地点2）

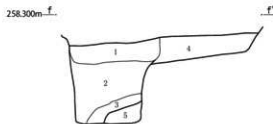


- 1 黒色粘土
2 褐色粘土 黒色粘土ブロック（4層）混じる。
3 黒色粘土
4 黒色粘土



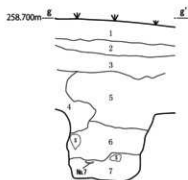
SD01・SD03 交差部 土層堆積状況

SD01 中央部

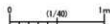


- 1 10YR2/2 黒色粘質土（覆土）
2 10YR3/3 増褐色粘質シルト（SD01埋土）
粗砂・粘土ブロック・鉄分（黄色）を含む。
3 10YR2/2 褐色粘土（SD01埋土）粗砂混じる。
4 10YR3/2 増褐色粘質土（地山）
しまり・粘性強い。植物・鉄分・真砂土含む。
5 10YR5/2 灰黄褐色粘質土（地山）

SD03 調査区東壁

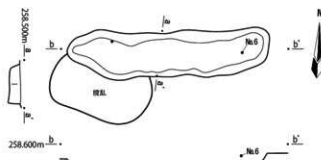


- 1 表土
2 アスファルト
3 10YR2/2 黒褐色粘土 粘土ブロック混じる。
4 10YR3/2 黒褐色粘土（SD03埋土）粘土ブロック混じる。
5 10YR3/2 黒褐色粘土（SD03埋土）炭化物・鐵含む。
6 10YR3/3 増褐色粘土（SD03埋土）炭化物含む。細少量含む。
7 10YR4/3 に近い黄褐色粘土（SD03埋土）粗砂・鐵混じる。



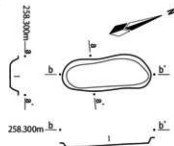
第35図 E区 SD01・03（3）

SD02



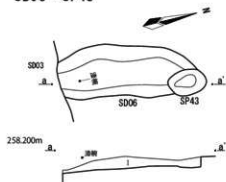
1 10YR2/1: オリーブ黒色シルト
しまり・粘性強い。径2cm大の垂直線少量混じる。

SD05



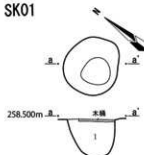
1 10YR2/2: 黒褐色砂質シルト
しまりや中固く、粘性強い。
粗砂混じる。径2cm大の垂直線含む。

SD06・SP43



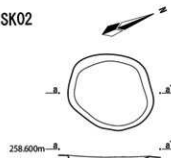
1 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (SD06)
しまり強く、粘性やや強い。
径5cm大の円線含む。炭化物を微量含む。
2 10YR2/1 黒色粘質土 (SP43) しまり弱く、粘性強い。
粗砂混じる。炭化物を多量に多く含む。

SK01



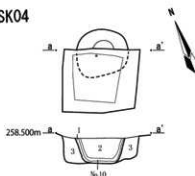
1 5R2/1: 青黒色砂礫混じり粘土
しまり・粘性強い。
径5cm大の線を多量に含む。
堆山層がグライ化により変色している。

SK02



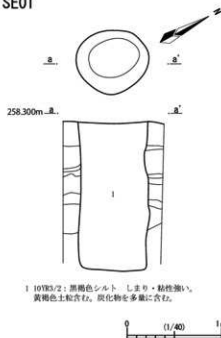
1 10YR2/2: 黒褐色粘質土 しまり・粘性強い。
黄砂土多く含む。径4cm大の垂直線含む。

SK04



1 10YR3/2: 黒褐色粘質土 しまり・粘性強い。
2 10YR4/1: 褐色灰黒砂 しまり・粘性なし。灰や珪藻含む。
3 10YR4/3: 濃い黄褐色粘質土 しまり・粘性強い。堆山層。

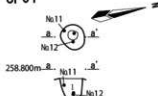
SE01



1 10YR3/2: 黒褐色シルト しまり・粘性強い。
黄褐色土粒含む。炭化物を多量に含む。

第 36 図 E 区 溝状遺構・土坑・井戸

SP01



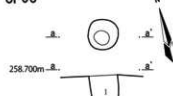
1 10YR 2/1: 黒色砂礫じり粘土
しまり・粘性強い、2cm大の礫少量含む。

SP02



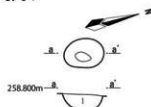
1 10YR2/1: 黒色砂礫じり粘土
2 10YR4/6: 黄褐色粘質土 堆山礫、真砂土混じる。

SP03



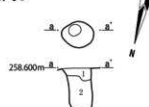
1 10YR3/3: 暗褐色粘質土 しまり・粘性強い、径5cm大の礫少量含む、下部の方が礫少ない。

SP04



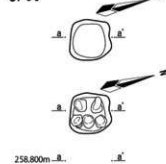
1 10YR2/1: 黒色砂礫じり粘土
しまり・粘性強い、真砂土含む。炭化物を微量含む。

SP05



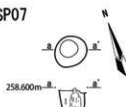
1 5YR2/1: 黄褐色砂礫じり粘土
しまり弱く、粘性強い、真砂土含む。径2cm大の礫混じる。
2 10YR2/1: 黒色粘土
しまり弱く、粘性強い、径2cm大の礫を多量に含む。

SP06



1 10YR2/2: 黄褐色粘質土
しまり・粘性強い。炭化物を微量に含む。

SP07



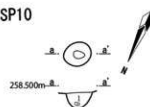
1 10YR3/2: 黄褐色粘質土
しまり・粘性強い、真砂土少量混じる。

SP09



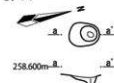
1 10YR2/1: 黒色粘質土
しまりやや強く、粘性強い、径5cm大の礫門礫を多量に含む。

SP10



1 10YR2/1: 黒色粘質土
しまり・粘性強い、真砂土多く含む、径約5cmの礫門礫混じる。

SP11



1 10YR3/3: 暗褐色粘質土
しまり・粘性強い、真砂土・径5cmの礫門礫少量混じる。

SP13

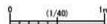


1 10YR3/2: 黒色粘質土
しまり・粘性強い、炭化物を微量含む。

SP14

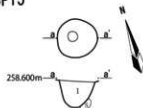


1 10YR2/1: 黒色砂質シルト
しまり・粘性強い、黄褐色ブロック混じる、径10cm大の礫門礫を含む。



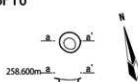
第 37 図 E区 柱穴 (1)

SP15



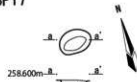
1 10YR3/2: 黒褐色粘質土
しまり・粘性強い。
径2cm大の円錐少量掘る。

SP16



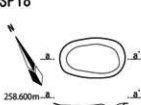
1 10YR3/1: 黒褐色砂質シルト
しまりやや弱く、粘性強い。
黄褐色ブロック・粗砂混じる。

SP17



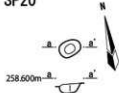
1 10YR3/1: 黒褐色粘質シルト
しまり・粘性強い。真砂土少量含む。

SP18



1 10YR3/1: 黒褐色粘土
しまり・粘性強い。径約3mmの白色粗砂含む。

SP20



1 10YR3/2: 黒褐色粘質土
しまり・粘性強い。
真砂土少量含む。

SP21



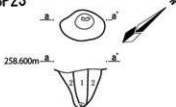
1 10YR3/2: 黒褐色粘質土
しまり・粘性強い。
真砂土少量含む。

SP22



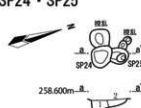
1 10YR3/2: 黒褐色砂質シルト
しまり強く、粘性やや強い。
真砂土少量含む。

SP23



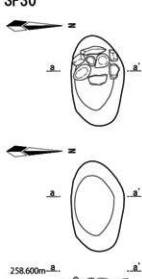
1 10YR2/1: 黒色砂質土
しまり強く、粘性弱い。
黄褐色土混じる。径約2mmの粗砂含む。
2 2.5Y5/3: 黄褐色砂質シルト 堆山層。

SP24・SP25



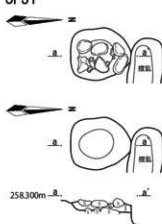
1 10YR2/1: 黒色砂質土 (SP24)
しまりやや弱く、粘性やや強い。真砂土混じる。
2 10YR3/3: 暗褐色砂質土 (SP25)
しまりやや弱く、粘性強い。真砂土を1層より多く含む。

SP30

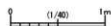


1 10YR3/3: 暗褐色粘土
しまり・粘性強い。真砂土混じる。
径2cm大の錐を多く含む。

SP31

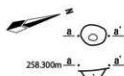


1 10YR3/3: 暗褐色土
しまり・粘性強い。真砂土混じる。



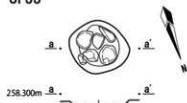
第38図 E区 柱穴(2)

SP32



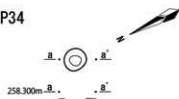
1 10YR3/2：黒褐色粘質土
しまり・粘性強い。粗砂・真砂土混じる。

SP33



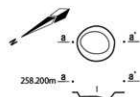
1 10YR3/3：暗褐色土
しまり・粘性強い。真砂土混じる。

SP34



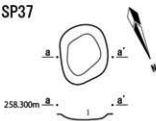
1 10YR2/2：黒褐色粘質土
しまり強く、粘性強い。粗砂・炭化物を微量含む。

SP35



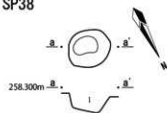
1 10YR3/2：黒褐色粘質土
炭化物含む。しまり・粘性強い。

SP37



1 10YR3/3：暗褐色粘質土
しまり・粘性強い。褐色土粒・粗砂混じる。

SP38



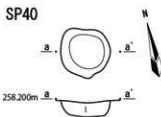
1 10YR3/3：暗褐色粘質土
粗砂・黄褐色土粒混じる。

SP39



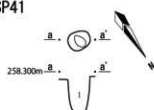
1 10YR3/2：黒褐色粘質土
しまりやや弱く、粘性強い。
黄褐色土粒混じる。

SP40



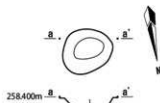
1 10YR3/1：黒褐色粘質土
しまり・粘性強い。径20m大の円礫・粗砂混じる。

SP41

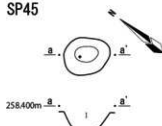


1 10YR2/1：黒色砂質土
しまり強く、粘性やや弱く、
径1cm大の礫を微量含む。

SP44



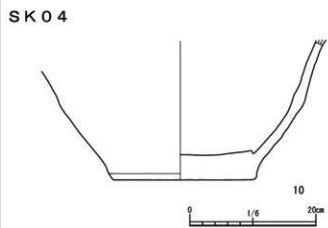
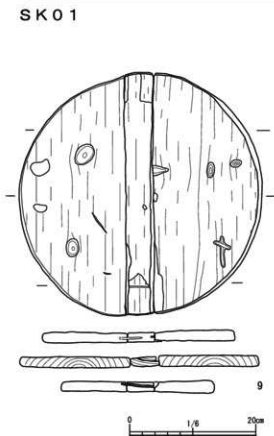
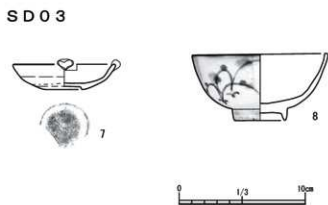
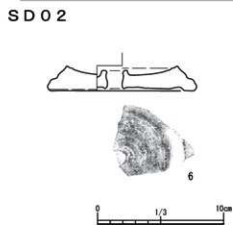
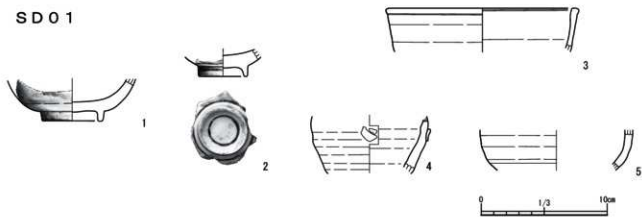
SP45



1 10YR4/1：黄褐色砂質シルト
粗砂・炭化物・黄褐色土粒混じる。



第 39 図 E 区 柱穴 (3)



第40图 E区溝状遺構・土坑出土遺物

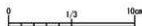
SP01



11



12



SP02



13



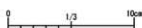
SP03



14



15



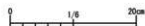
SP07



16



16



遺構外



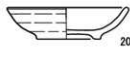
17



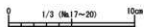
18



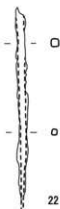
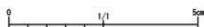
19



20



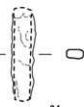
21



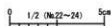
22



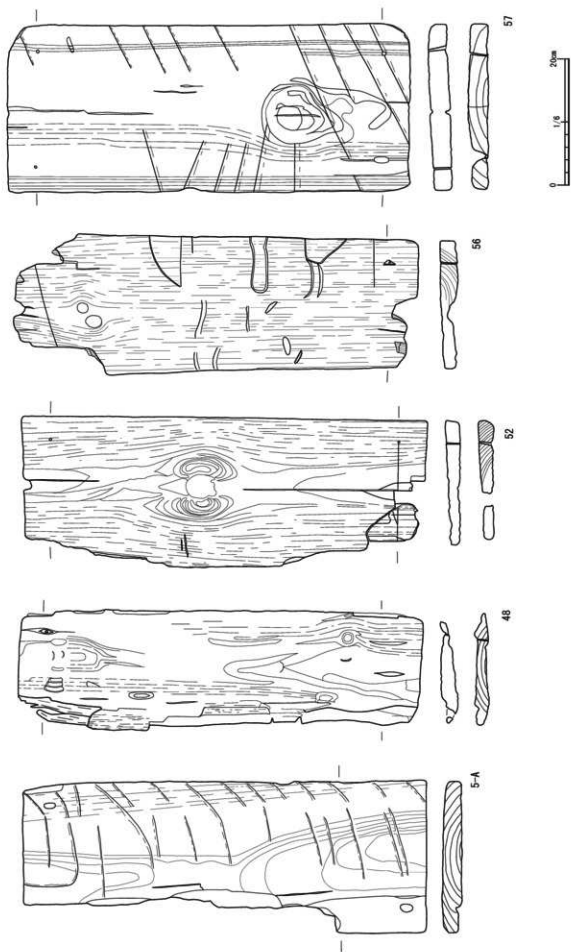
23



24

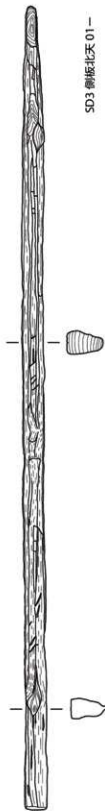


第41図 E区柱穴・遺構外出土遺物

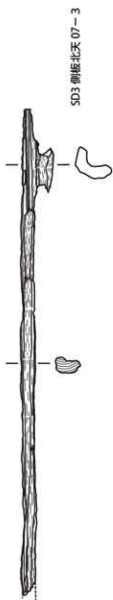


第42图 E区 SDO3木简残片木料 54-57

北側側板

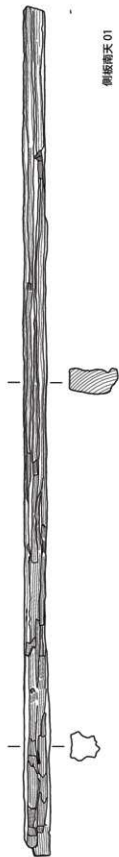


SD3 側板北天 01-

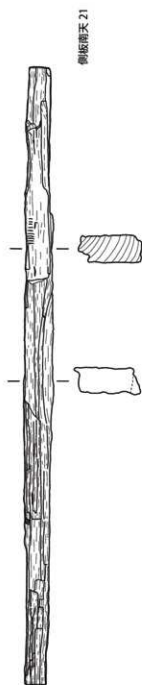


SD3 側板北天 07-3

南側側板



側板南天 01



側板南天 21



第43図 E区 SDO3木製構造物木材 側板

第8章 一級河川濁川埋設保存区域における流域形状の記録

第1節 経緯と記録の目的

都市計画道路と戸竜王線建設工事とそれに並行して実施される一級河川濁川河川改修工事に伴い、甲府城下町における三の堀（以下、「三の堀」という。）の一部でもある濁川の流路が一部変更され、旧流路を埋め立ててその上に道路を建設する計画が実施されるはこびとなった。これに伴い、令和元年度に山梨県教育委員会学術文化財課（当時）と山梨県県土整備部で三の堀の遺構保護に関する協議を実施した。三の堀は甲府城下町の外周を廻る堀で、史跡甲府城跡に関連する重要な要素の1つであるといえる。この協議により、道路下に埋め立てられる計画の旧流路については、可能な限り現況流路の擁壁を存置して埋め立て施工をすることで遺構を埋設保存するとともに、事前に現況流路の状況を記録するという保護措置をとることとなった。

第2節 調査と記録の方法

調査対象は、三の堀南東隅の総延長約69mである。三の堀の南東域は北に3回、東に2回クランクしている。このうち最も北側の東西方向の箇所と、それに続く南北方向の箇所の一部を、記録作成の上、埋設保存することとした。

対象域では擁壁が石垣であり、流路形状とともに石垣の特徴を記録する必要がある。そのため、対象地周辺に繁茂する植物を除去と作業員による人力での清掃作業を実施したうえで、目視による石垣の観察と、堀断面のエレベーション図作成、石垣の立面オルソ写真撮影を実施した。

第3節 調査成果

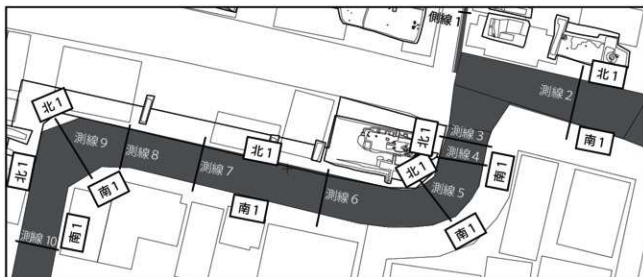
1 目視による石垣の観察結果

対象地内には石垣が3面とそれぞれが接する入隅と出隅が各1箇所ずつある。入隅・出隅はいずれも曲面で構成されており、該当箇所の石材配置は落とし積みによってなっていることから、近代に築造された石垣であることがわかる。石垣の石材はすべて安山岩である。当該地域一体は安山岩の産出地域であり、近代には流通石材の花崗岩も多用されるようになるが、特に近世では安山岩が当該地域の主要石材である。隅角部を除く石垣各面には、多様な石積みの形状がみられる。近代の積みなおし部分である落とし積みによる箇所以外は、切り石による布積みである。ただしこの中でも、底部付近に落とし積み様の石材配置がみられる箇所がある。第50～52図の矢印の範囲は底面から布積みであり、近世の所産の可能性がある。石材の形状や大きさ、加工度合い、積み上げの特徴の違いから、いくつもの解体ラインをみることができ、繰り返し改修されてきたことがわかる。そのため築造時期が近世まで遡るとみられる布積みの石垣であったとしても、近代の改修を受けている可能性もある。

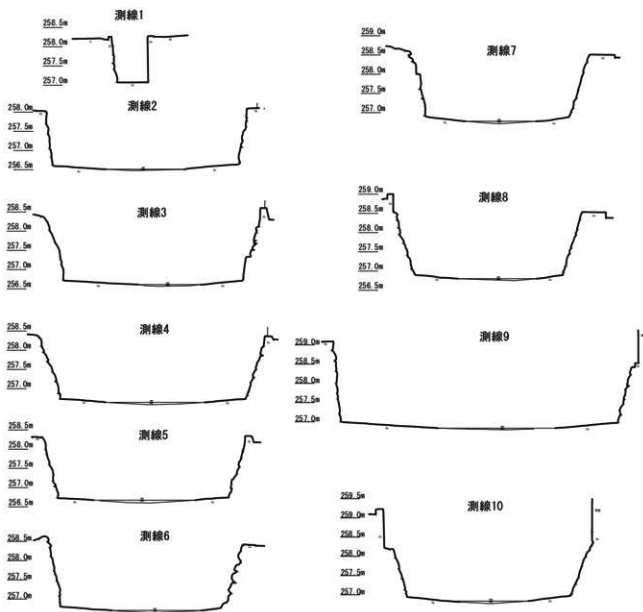
2 測定の成果

第44図に示した範囲を測量した。本書では立面のオルソ写真と堀の断面図を掲載した。各面の観察所見は第3節に記載した通りである。

現況の堀幅は0.5mで天端からの深さは、約1.5～2.0mである。堀底はコンクリートで舗装されており、堀内の関連する遺構の有無などは不明である。また、当該箇所一帯は歴史的に三の堀と濁川が接続する箇所該当する。濁川は、東海地方からの物流を支えた舟運の舞台である富士川の支流にあたり、三の堀に接続する当該箇所は舟運の終着点の1つであったとみられているが、近代の改修などを受けているためか、これに関連すると考えられるような痕跡もみられない。



第44図 作図位置図 S=1/500



第45図 濁川（三の堰）横断面図 S=1/100



第46図 潘川（三の堀）掃聖オルソ写真（1） S-1/60

南3



南3つづき



第47図 湊川（三の堀）崩壁オルソ写真（2） S-1/60



第48図 湊川（三の船）擁壁オルソ写真（3） S-1/60

南5

測線9



南6

測線10



南6つづき

測線10



第49図 瀬川 (三の堀) 擁壁オルソ写真 (4) S-1/60

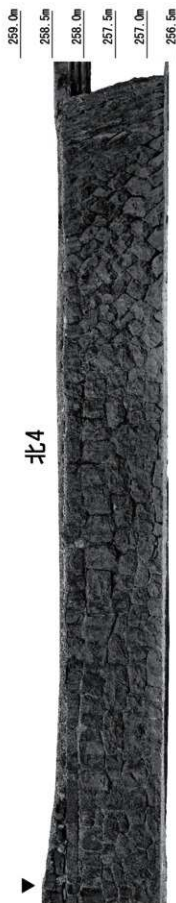


第50図 潘川（三の堀）掃墓オルソ写真（1） S-1/60

北3



北4



近世の石積みの可能性あるが、下層に落とし積みあり。

北4つづき



第51図 湊川（三の堀）塙壁オルソ写真（2） S-1/60

北4つづき



259.0m
258.5m
258.0m
257.5m
257.0m
256.5m

← 近世の石積みか? →

北4つづき



259.0m
258.5m
258.0m
257.5m
257.0m
256.5m

北5



259.0m
258.5m
258.0m
257.5m
257.0m
256.5m

259.0m
258.5m
258.0m
257.5m
257.0m
256.5m

第52図 湊川（三の船）塙壁オルソ写真（3） S-1/60

北6



北6つづき



第53図 濁川（三の段）橋壁オルソ写真（4） S-1/60

第9章 自然科学分析

第1節 甲府城下町遺跡・深町遺跡の土層堆積構造観察（B区・C区）

株式会社 古生態研究所

はじめに

今回の調査では、甲府城下町遺跡（城東2丁目周辺）発掘調査区の堆積層の成因および土地利用に関する情報を得ることを目的として、現地での堆積層の累重状況について観察記載を行った。

1 調査内容

現地調査はB区・C区を対象とし、発掘調査の進捗状況に合わせて、2021年12月23日・24日、2022年2月3日・4日、2022年2月8日・9日の3回に分けて実施し、各区の堆積断面について層相観察記載と写真撮影を行った（図1）。これら現地調査結果を室内で整理し、調査地の堆積層の累重状況や土地利用状況について検討した。

2 調査地の地形概要

今回の調査地は、甲府盆地北部の釜無川とそれに合流した荒川によって形成された釜無川・荒川扇状地北西部の扇端付近に位置する（吉村・平川,1984）。B・C調査区は、甲府城の三の丸の堀跡と推定されている、扇状地を南下する現在の濁川流路沿いに位置する（図1）。濁川は扇状地を東方向に流下した後、釜無川・荒川扇状地と相対する方向から扇状地を広げる笛吹川扇状地との地形境界部の低湿地に入り、南流している。また低湿地の濁川の地下浅所には数層の泥炭層を挟む細粒物質が広く分布することが確認されている。なお、甲府城は、甲府盆地北部の一条小山と呼ばれる平山に築城されており、今回の調査地は城下町の南東端に位置する。

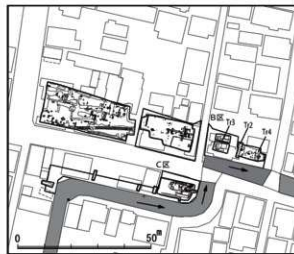


図1 調査地点の位置

3 調査結果

3-1 B区 TR3 堀北セクション南壁

(1) 堆積層の累重状況

TR3西端では甲府城の三の堀に対比される可能性がある南北方向に伸びる堀跡が検出されている。堀北セクション南壁では、堀から堀西側肩部にいたる遺構の基盤層から表土までの堆積層の累重状況が確認されており、調査の結果、1層～16層に区分された（図2（巻頭図版））。

(2) 古環境変遷と地震動の影響

調査底面付近に分布する泥炭層からなる16層は、後背湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。本層最上部では泥炭層を構成する植物遺体の分解が進行し腐植が集積していることから、堆積の進行に伴い水位が低下し、土壌化したことが推定される。本泥炭層はC区でも確認されており、泥炭層上部で280±20yrBP (cal AD1521-1792)の年代値が得られている（本報告書・パルムサーヴェイ株式会社）。

泥炭層の上位には、15～13層の泥層～腐植泥層が積層する。各層は間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられ、堆積後には水位が低下し、土壌生成が進行する堆積場に変化していたことが推定される。

12・11層の砂質泥～泥質砂層は、上記15～13層と同様に、間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。ただし、堆積層厚が厚く、構成碎屑物の粒径が粗粒化しており、本地点への土砂流入量が増大傾向にあったと推定される。

B区 Tr2では、この粗粒堆積物を供給したとみられる、西から東へ流下する浅い流路が確認されて

いる。12層・11層形成期になると、調査地一帯は西方からの土砂流出の影響を強く受けるようになり、氾濫原が発達したことが推定される。先述したように釜無川・荒川扇状地と笛吹川扇状地の地形的境界域をなす低湿地の濁川の地下浅所には数層の泥炭層を挟む細粒物質が広く分布することが確認されている。上記16層～13層は、これら低湿地で確認されている堆積物と連続する可能性があり、そうだとすると今回の調査地で釜無川・荒川扇状地の扇端が到達するのは12層形成期以降となる。今後、堆積・地形的検討成果の蓄積を待って再評価したい課題である。

一方、掘埋土は、9層から7層が滞水域で形成された堆積物で、最下部の9層には掘削時に生じた15層由来の偽礫が混在していた。8層は菓理状の構造が確認され、水流下で形成されたことが推定される。埋土中上部の6層～4層は、土壌生成が進行する時期を挟む、堀の法面や周囲の地表堆積物などから供給された堆積物からなる。その上位の3・2層は人為的に盛土された堆積物である。

堀が掘削されている基盤堆積物は振動（押し引き）、回転、垂直振動の圧力により著しく変形している状況が確認された。特に堀の西肩部の11層～16層上部までの堆積物が土塊として、掘方向に円弧すべりしている状況が確認された（図3（巻頭図版））。また、上部には地割れが確認された。同様の変形構造は、後述するB区の他のトレンチおよびC区の対比される基盤堆積物でも確認されている。このように同時期の堆積物における変形が広範囲に及んでいること、新旧の堆積物が同時に変形していることから、変形構造は地震動に起因する可能性が高い。一般に含水比が高い堆積物は地震応力で流動したり塑性変形を生じ、相対的に含水比が低くせん断速度が速いときに脆性破壊がおこる。また、地震イベントの年代は、変形ゾーン上端直上および直下の堆積物の年代によって決まる（Matsuda,2000）。今回の場合、法面より離れた場所の基盤層は脆性破壊、堀法面に隣接する基盤層は多少塑性変形していた。含水比の違いに起因するものと推定される。地割れ内の堆積物は、地割れと同時に供給された可能性と人為的に投入された可能性の双方が考えられる。いずれにしても上部は偽礫が接合し、締まっていることから、被災後に人為的な修復が行われていることが推定される。また、地震の発生層準は、堀構築後、掘埋戻しまでの時期と推定される。なお、甲府盆地に被害を及ぼした近世以降の記録地震は、1704年元禄地震（M8.2）、1707年宝永地震（M8.6）、1854年安政東海地震（M8.4）、1923年の大正関東地震（M7.9）がある。今回の調査区で確認された地震痕跡はこれらのいずれかの地震に起因する可能性がある。

3-2 B区 TR2 セクション東壁

(1) 堆積層の累重状況

TR2セクション東壁の堆積層は1層～19層に区分された。堆積層は、概ね南側に緩く傾斜しており、トレンチ南部で凹地状の微地形が確認される（図4・5（巻頭図版））。

(2) 古環境変遷

本トレンチの堆積物の累重状況は、先述したTr3の基盤堆積物と類似する。すなわち、本地点の2～12層がTr3の11・12層、13層～19層がTr3の13層～15層に対比される可能性が高く、同様な堆積環境が推定される。

19～13層は、間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられ、堆積後には水位が低下し、土壌生成が進行する堆積場に変化したことが推定される。後背湿地の堆積環境が推定される。

12層～2層も同様に、間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。ただし、堆積層厚が厚く、構成碎屑物の粒径が粗粒化しており、本地点への土砂流入量が増大傾向にあったと推定される。特に6層より上位では粗粒堆積物が流入するようになり、4層形成期には浅い流路が形成される。古流向は西から東を示し、釜無川・荒川扇状地からの土砂流出に起因することが推定される。

また、本トレンチの堆積物も地震動により変形している。主に振動（押し引き）の圧力により脆性破壊が著しく、菓理・層理の連続性が悪い。

3-3 B区 TR4 井戸セクション東

(1) 堆積層の累重状況

TR4 井戸セクション東では井戸跡が検出されている。東壁断面の堆積層は大きく1層～19層に区分される(図6(巻頭図版))。

(2) 古環境変遷

井戸遺構の基盤をなす堆積物の累重状況は、上述してきた Tr3・Tr2 と概ね類似する。次のように対比される。本地点の3層～7層が Tr2 の2～12層と Tr3 の11・12層、8～17層が Tr2 の13層～19層と Tr3 の13層～15層に対比される。堆積環境も基本的には同様に間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。17～8層は堆積層厚が薄く、構成砕屑物の粒径が細粒であるのに対して、7層～4層では層厚が厚くなり、粗粒化していることから、6層以降、本地点への土砂流入量が増大し、氾濫原が発達したことが推定される。また、本トレンチの基盤堆積物も地震動により変形しており、主に振動(押し引き)の圧力による脆性破壊である。そのため業理・層理が不連続となっている。

井戸内の堆積物は、井戸枠の裏込め堆積物(3層)と井戸埋土(2層)である。井戸枠の裏込め土は掘削時に生じた堆積物が利用されている。ただし、腐植を多く含む堆積物と腐植を含まない堆積物を互層状に積層させているようにみえる。裏込め土の施工の仕方にも何らかの規則性が存在した可能性がある。井戸埋土は最下位の井戸枠が残存している層準で有機質泥質砂からなる。層相から機能期ないし廃絶後に形成された堆積物の可能性がある。その上位には、人為的に投入された、大きさ10cm以下の垂角塊状をなす泥質砂～砂質泥の偽礫と巨礫などが混在する堆積物で充填されている。堆積休止期を示す土壌化層準を挟まないことから、一度の施工で埋め戻されていることがうかがえる。

3-4 C区

(1) 堆積層の累重状況

C区では、城下町から堀側へ開口する船着場(河岸)跡の可能性ある木製構造物からなる遺構が検出されている。現地調査段階で残存していた堆積物は、上位より1～12層に区分される。ただし、1層については乾燥によるひび割れが著しく、十分な観察ができなかった(図7・8(巻頭図版))。

(2) 古環境変遷

C区の木製構造物が設置されている遺構の基盤堆積物の累重状況は、先述したB区3Trと対応する。最下位の12層の泥炭層は、後背湿地のような堆積環境で形成されたことが推定される。本層最上部の14C年代測定の結果から、16世紀前半～18世紀後半の暦年較正年代が得られている。また、木製構造物が設置されている遺構の基底面をなしている。

泥炭層の上位には8～5層の泥層～腐植質泥層が積層する。各層は間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられ、腐植を含む層準は堆積後に水位が低下し、土壌生成が進行する堆積場に变化していたことが推定される。

4層～3層の砂質泥～泥質砂層も間欠的な洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された堆積物とみられる。調査区中央の南北ベルト断面では浅いトラフ型斜交業理が発達する砂～泥質砂が確認されており、調査区内を洪水流が流下したことが推定される。このように4～3層形成期には、調査区内への土砂供給量が増大し、急激に氾濫原が発達したことが推定される。古流行は西から東であったことから、釜無川・荒川扇状地性の堆積物と推定される。

3層は、遺構構築時に木製構造物の設置材として使用されている、多様な堆積物を使用した盛土である。偽礫に使用されている堆積物は、掘削された基盤堆積物に由来するものと、基盤堆積物には認められないものが混在していることが特徴であり、盛土材料として、別の場所から搬入された可能性が高い。

木製構造物が設置されている遺構は、濁川に連結する開口部になる場所で遺構の向きを変えている。開口部近くの資材の利用は、河川の流れの影響を直接受ける北側が石材、反対側が木材を使用している。また、開口部は位置土洪水等で侵食されている可能性があり、補修痕跡が確認される(図9(巻頭図版))。この崩壊の原因は、洪水等の増水による侵食の他、今回の調査地で広く確認された地震動による変形などが想定される。復旧工事は層状に盛土と填圧しながら積層させている。この盛土の堆積斜面は南側から北側にかけて緩やかに傾斜しており、崩壊しなかった側から修復されたことが窺える。

2層は、遺構が機能していた時期に堆積した堆積物とみられる。木造建造物内の2層は塊状をなす泥層からなる。この泥層は城下町側の階段下部まで連続しており、そのレベルまで遺構内の水位が高かったことが示唆される。本遺構については、河岸跡の可能性が指摘されているが、3層・2層堆積物の利用状況もそのことを指示している。

1層は、遺構廃絶後の埋め戻しの堆積物からなる。レンガや木材なども混じる。埋戻しは遺構の開口部側の高まりから城下町側にかけて、堆積斜面を形成しながら埋戻しが行われている。

以上、基盤堆積物および盛土堆積物について述べたが、本調査地の基盤層にもB区の堆積物と同様に地震動による変形構造が確認される。特に滞水していた層は塑性変形しており、遺構機能期に地震動が発生している状況が確認される。

4 まとめ

今回の調査では、B・C区の堆積層の累重状況と堆積環境変遷を明らかにすることを目的として現地調査を実施した。その結果、以下の事項が明らかとなった。

- (1) B区・C区の堆積層の累重状況は類似していた。ここでは、B・C区共通の基本層序として、1層から7層、遺構埋土1～3層を設定する。図9(巻頭図版)に詳細を記載する。
- (2) 調査地一帯の地形環境は次のように変化した。
7層形成期：泥炭層が厚く堆積する後背湿地。
6層～5層形成期：本地点へ流入してきた浮遊泥の沈降堆積物の積層で、堆積後には比較的長期にわたり安定した地表環境が継続し土壌生成が進行する乾湿を繰り返す後背湿地。
4層～3層形成期：土砂流出が増大し、氾濫原が発達する時期。堆積後には離水した可能性が高い。なお、本堆積物は釜無川・荒川扇状地からの土砂流出に起因することが推定される。
2層・1層形成期：人為的な造成土の形成期
- (3) 調査地における人間活動が顕著となるのは、氾濫原の発達と離水が進行する3層形成期と推定される。氾濫原の離水と人間の占拠が連動している可能性がある。また、堀掘削に伴い、地下水位が低下し、土地の水はけが良くなったことが推定される。
- (4) 調査地の広範囲において基盤堆積物や遺構埋土が変形していた。新旧堆積物が同時に変形しており、地震動に起因することが推定された。どの程度の被害であったかは不明であるが、堀では肩部堆積物が崩壊していた。

引用文献

- Matsuda, J.-I. (2000) Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology*, 135, 99-116.
- 宇佐見龍夫 (1987) 新編日本被害地震総覧, 東京大学出版会, 493p.
- 吉村 稔・平川一臣, 1984, I 地形分類図, 「土地分類基本調査 甲府 5万分の1」, 山梨県, 15-25

第2節 甲府城下町遺跡の土層堆積構造観察 (E区)

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本調査の対象とした甲府城下町遺跡 E 区は、甲府市城東 2 丁目地内に所在する。本調査では、発掘調査区内での堆積物の成因に関する情報を得ることを目的として、調査区の 2 地点において堆積物の観察記載を行った。

1 地形概要

調査地は、甲府盆地の北西から南東方向に流れる釜無川および荒川により発達した釜無川扇状地および荒川扇状地の扇端に位置する。また、北東から南西方向に流れる笛吹川により発達した扇状地である笛吹川扇状地と荒川扇状地の境界には低湿地帯が分布する。

2 観察結果および考察

(1) 地点 1

地点 1 は造成された範囲と考えられる地点である。

土層観察の結果では本地点は、上位より第 1 層～4 層に分層した。まず、第 1 層は、腐植層が混じる砂質シルト層、第 2 層は、径 5～10cm の円礫が混じる砂礫層、第 3 層は径 0.5～2cm の亜円礫～重角礫が混じる砂質シルト層であり、炭化材が混じる。第 4 層は粘土質シルト層であり、縞状のラミナが発達する。また第 4 層の最上部は薄く黒色化する。これは旧地表の土壌化層である可能性が考えられる。

本地点は扇状地の端部であり、基本的に第 4 層のような湿地帯が発達し、第 2 層および第 3 層のような礫層が自然に堆積するには、洪水等の大規模なイベントが想定される。しかしながら、各層は局地的に分布し、また第 3 層は、第 4 層を削割せずに堆積しているため、水の営力によるものとは考えにくい。これらのことから、第 1～3 層は、造成の際の人為的な盛土であると考えられる。

(2) 地点 2

地点 2 は上・下水の判別は明確ではないが、溝状遺構 (SD03) 内の堆積物である。

土層観察の結果では本地点は、上位より第 1～3 層に分層した。第 1 層は黒色の粘土層、第 2 層は褐色の粘土層であり、黒色の粘土ブロックが混じる。第 3 層は黒色の粘土層である。また、第 3 層には、明治以降と推定される木製の板が埋没する。

本地点は、第 2 層に粘土ブロックが混じることから第 2 層以上は人為的な土層であると考えられる。水路は第 3 層まで掘り方を掘削し、板などを埋設した後使用したものと考えられる。ただ、水路がい

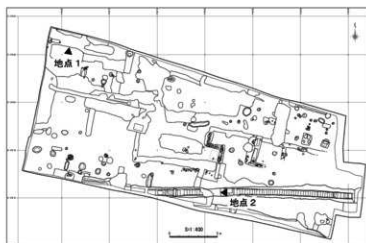
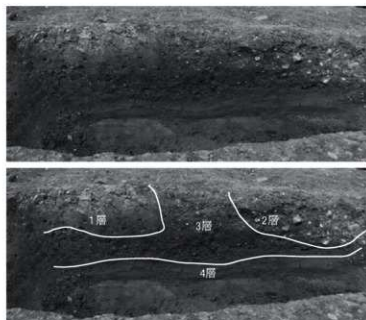
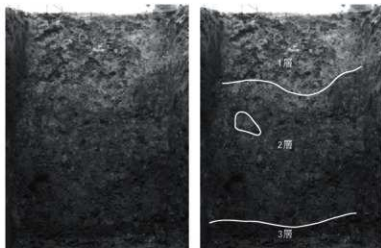


図1 E区土層堆積構造観察位置図



写1 地点 1

わゆる暗渠であったかどうかについては、天板の痕跡等が検出されていないため不明である。堆積物がおおむね一様であることから、水路としての利用が終了した後に短時間で埋め戻されたと考えられる。



写2 地点2

第3節 深町遺跡・甲府城下町遺跡における自然科学分析（B区・C区）

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

深町遺跡・甲府城下町遺跡は山梨県甲府市城東二丁目地内に所在する。本分析調査では、年代に関する情報を得るために放射性炭素年代測定を、遺跡周辺環境復元を行うために珪藻分析・花粉分析をそれぞれ実施する。

1 試料

試料は、C区北壁の試料番号2,4,6,8,10,12,14、B区堀の試料番号14,15の9試料である。これら全点について珪藻分析、花粉分析を実施する。この内、C区北壁の試料番号14の1点について放射性炭素年代測定を実施する。

2 分析

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、付着した土壌等の付着物等を取り除き、調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。しかし、試料が脆弱な場合、炭素の損耗が激しく、分析に必要な炭素量が得られない場合がある。このため、試料によってはアルカリの濃度を薄めて処理を行う(AaAと記載)。真空ラインを用いて、試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)を行う。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 δ 13Cは試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4 (Bronk,2009)、較正曲線はIntCal20 (Reimer et al.,2020)である。

(2) 珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満し放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検視し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したのものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot et al.(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985～1991)、Desikachary(1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した。

堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が100個体以上産出した試料について珪藻化石群集変遷図を作成した。出現率は化石総数を基数とした百分率で表し、基本的に1%以上(産出種数により変更)の産出率を示す分類群についてのみ表示した(図中の●印は、総数が100個体以上産出した試料うち1%未満の種を示し、+印は総数100個体未満の場合の産出を示す)。表示する分類群は、分析試料全体で産出率の合計が1%以上の分類群である。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・pH・流水の相対頻度について図示した。

塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかにいったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pHに対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物(岩石・大型の藻類・水生植物など)に附着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは附着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

(3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による飲物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や鳥倉(1973)、中村(1980)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

3 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、図1に示す。同位体補正を行った値は、 210 ± 20 BPを示す。暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20 (Reimer et al.2020)を用いる。 2σ の値は、calAD1521~1792である。

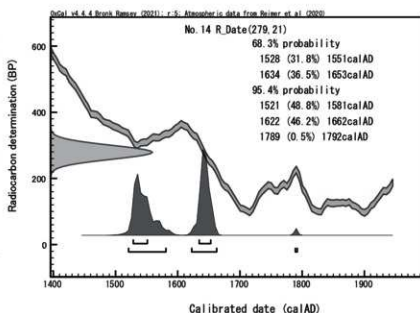


図1. 暦年較正結果

表1. 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	性状2	方法	補正年代 BP (暦年較正用)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値			確率 %		
						1 σ	2 σ	確率 %			
1	自然繊維 高炭層 C区北壁 試料番号14	泥炭	AAA	200 ± 20 (279 ± 21)	-24.88 ± 0.38	#	cal AD 1528 - cal AD 1551	622 - 400 calBP	31.8		
							cal AD 1634 - cal AD 1653	316 - 298 calBP		36.5	
							2 σ	cal AD 1521 - cal AD 1581	430 - 370 calBP	48.8	
								cal AD 1622 - cal AD 1662	328 - 288 calBP		46.2
								cal AD 1789 - cal AD 1792	162 - 159 calBP		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した範囲は、測定精度 $\pm 2\sigma$ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.4を使用。
- 6) 暦年の計算には1相目まで訂正した年代値を使用。
- 7) 較正データセットはIntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改訂された場合の再計算や比較が行いやすいように、1相目を表している。
- 9) 統計的に真の値に入る確率は、 1σ が68.2%、 2σ が95.4%である。

(2) 珪藻分析

分析結果を表2、図2に示した。分析した9試料のうち、B区堀(試料番号14.15)からは珪藻化石が産出したが、C区北壁(試料番号2,4,6,8,10,12,14)は無化石であった。産出した珪藻化石の保存状態は、全体的に壊れた殻が多く、不良である。

C区北壁の試料番号2,4,6,8,10,12,14は無化石であった。

B区堀の試料番号14からは、200個体以上産出した。産出した分類群は、淡水生種と淡水~汽水生種を主にして、汽水生種と海水~汽水生種を低率に伴う種群で構成される。産出した種は、淡水~汽水生種のNavicula veneta, Nitzschia palea, 淡水生種で流水不定性種のLemnicola hungarica、陸生珪藻のHantzschia amphioxys, Pinnularia subcapitata等である。

B区堀の試料番号15からは、40個体産出した。産出した分類群は、淡水生種と淡水~汽水生種で構

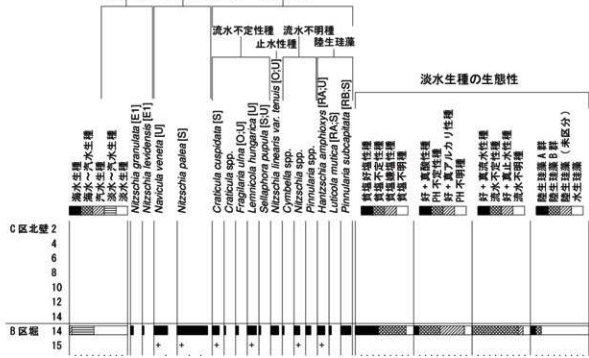
表 2. 珪藻分析結果

種 名	生態性			種標	C区北壁										B区底	
	塩分	pH	流水		2	4	6	8	10	12	14	14	15			
<i>Nitzschia sigma</i> (Kuetz.) W.Smith				E2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia granulata</i> Grunow				E1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-
<i>Nitzschia levidensis</i> (W.Smith) Grunow				Meh	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing				U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	24	7
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W.Smith				S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	53	17
<i>Asconomeis</i> spp.				unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Cocconeis placentula</i> var. <i>egyptia</i> (Ehr.) Cleve				r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Cratichia cuspidata</i> (Kuetz.) DiMann				S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12	3
<i>Cratichia</i> spp.				ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Cymbella</i> spp.				unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Ogishima</i> spp.				unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Pragmaria ulna</i> (Nitzsch) Lange-Berthold				OU	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-
<i>Gyrodinium acuminatum</i> (Kuetz.) Rabenhofst.				ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Gyrodinium</i> spp.				unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow				RAU	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	7
<i>Lemnolima hungarica</i> Grunow Boudot & Hesson				ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	16	2
<i>Lenticula mucica</i> (Kuetz.) DiMann				RAS	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer				l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia brevisium</i> Grunow				BBU	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Nitzschia linearis</i> var. <i>tennis</i> (W. Smith) Grunow				l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	1
<i>Nitzschia</i> spp.				unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	1
<i>Pinularia subcapitata</i> Gregory				RBS	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18	-
<i>Pinularia</i> spp.				unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	-
<i>Seliaphora papula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky				SU	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
<i>Stauroneis stauroneuta</i> Reimer				l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Suriella angusta</i> Kuetzing				r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	77	24
淡水生種					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	118	16
珪藻化石総数					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	204	40

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水環境指標種 C2: 汽水環境指標種
- D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種
- E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水産生種群 (以上は小杉, 1988)
- G: 淡水河川産生種群 H: 河口湾産生種群 J: 上流河川産生種群 K: 中～下流河川産生種群
- L: 下流河川産生種群 M: 湖沼産生種群 N: 湖沼沿岸産生種群 O: 湖沼遠岸産生種群
- P: 高塩度帯産生種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安原, 1990)
- R: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種 (以上は Asai and Watanabe, 1995)
- S: 陸生珪藻 (RA-A群, PB-B群, R: 未区分, I群, 堀内, 1991)

汽水生種 淡水～汽水生種 淡水生種



海水～汽水～淡水産生種出率・各種産出率・定形産出率は全体産出率、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基準として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料についてを示す。なお、●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した産生種を示す。

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海洋環境指標種 C2: 汽水環境指標種 D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種 E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水産生種群 (以上は小杉, 1988)
- G: 淡水河川産生種群 H: 河口湾産生種群 J: 上流河川産生種群 K: 中～下流河川産生種群 L: 下流河川産生種群 M: 湖沼産生種群 N: 湖沼沿岸産生種群 O: 湖沼遠岸産生種群 P: 高塩度帯産生種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安原, 1990)
- S: 好汚濁性種 U: 好清水性種 V: 広適応性種 W: 好汚濁性種 (以上は Asai & Watanabe, 1995) R: 陸生珪藻 (RA-A群, PB-B群, I群, 堀内, 1991)

図 2. 珪藻化石群集

成される。産出した種は、淡水～汽水生種の *Navicula veneta*, *Nitzschia palea* 等である。

(3) 花粉分析

結果を表3に示す。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、そのほとんどが、花粉外膜が壊れている状態で産出していた。

検出された種類は、木本花粉のマツ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属など、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ科などである。

表3. 花粉分析結果

種 類	C区 北壁								B区 堀	
	2	4	6	8	10	12	14	14	15	
木本花粉	-	-	-	-	-	-	3	-	1	
マツ属榿管状亜属	2	-	-	1	-	4	10	-	1	
マツ属 (不明)	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
ハシノキ属	-	-	-	-	-	1	-	1	-	
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ニレ属一ケヤキ属	1	-	-	-	-	-	-	1	-	
ウコギ科	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
イボタノ木属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
草本花粉	-	2	-	3	-	5	-	1	1	
イネ科	-	-	1	-	-	2	-	1	-	
カヤツリグサ科	-	-	-	1	-	-	-	1	-	
ヤブタバコ属一ツナギフカミ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
アカサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	-	-	3	-	1	-	-	-	-	
キク科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
タンポポ科	-	-	-	1	-	1	-	-	2	
不明花粉	-	1	-	-	-	-	-	1	2	
シダ類胞子	2	2	1	7	-	18	7	1	17	
シダ類胞子										
合 計	3	0	0	1	0	6	15	1	3	
木本花粉	1	2	4	5	1	8	1	3	3	
草本花粉	0	1	0	0	0	0	0	1	2	
不明花粉	2	2	1	7	0	18	7	1	17	
シダ類胞子	6	4	5	13	1	32	23	5	23	
合計 (不明を除く)										

4 考察

(1) 年代測定結果

B区の試料番号14は近世以降の年代値を示す。この時期は暦年較正曲線が鋸歯状になっているので、較正年代の幅が広がる。

(2) 堆積環境

C区北壁の試料番号2,4,6,8,10,12,14は無化石であった。

本7試料から産出した珪藻殻は少なかったため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、直接的な堆積環境の推定は困難である。経験的には、堆積後に好氣的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。次に、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている (千木良,1995)。

本7試料も珪藻化石の堆積後に、好氣的な環境下等の要因で分解・消失した可能性が高い。

B区堀の試料番号14から産出した種は、淡水～汽水生種の *Navicula veneta*, *Nitzschia palea*, 淡

水生種で流水不定性種の *Lemnicola hungarica*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata* 等である。本試料から産出した種の生態性について述べると、淡水～汽水生種の *Navicula veneta* は、広温性、電解質が多い水域または汽水域、富栄養化の著しい水域で強腐水域まで耐えられるとされる。電解質の乏しい水域には生育できない (Lange-Bertalot, 2001) とされる。電解質物質の豊富な水域から汽水域に普通にみられるほか、強度に富栄養化した時にもみられることから、汚濁に対する適応性が強い種とされている (Witkowski & Lange-Bertalot & Metzeltin, 2000)。淡水～汽水生種とした *Nitzschia palea* は、好汚濁性種 (Asai & Watanabe, 1995) とされ、汚濁した水域に特徴的に認められる種である。流水不定性種の *Lemnicola hungarica* は、付着性で池や流れの弱い川などで浮葉植物の葉に付着して生育する場合が一般的であるが、中汚濁耐性種 (小林ほか, 2006) とされる。また、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata* 等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など大気に接触した環境に生活する一群 (小杉, 1986) である。

以上の産出した種の生態性と群集の特徴から堆積時の環境を推定する。本試料からは、汚濁性種および止水性種が複数種特徴的に産出したことから、富栄養化した止水域であったと考えられる。

B 区堀の試料番号 15 から産出した種は、淡水～汽水生種の *Navicula veneta*、*Nitzschia palea* 等である。

本試料は、珪藻化石の産出数が少ないものの、B 区堀の試料番号 14 と同様の群集の特徴を持つことから、本試料も概ね、富栄養化した止水域であると示唆されるが、堆積後にはほとんどの珪藻化石は分解・消失した可能性が高い。

(3) 周辺植生

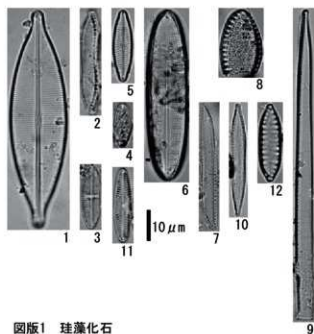
今回の分析の結果、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。一般的な花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている (中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など)。わずかに認められる花粉化石の保存状態が悪いことを踏まえると、今回花粉が検出されなかった理由としては、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したためと考えられる。

なお、わずかに検出された種類から、針葉樹のマツ属、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属などの木本類が、調査区周辺に生育していた可能性がある。また、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンポポ亜科などの草本類は、開けた明るい場所に生育する種を含むことから、遺跡内や周囲の林縁などの草地植生に由来すると思われる。

引用文献

- ・安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88.
- ・Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprohilous and saproxenous taxa, Diatom, 10, 35-47.
- ・Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon, 51, 337-360.
- ・千木良雅弘, 1995, 風化と崩壊, 近未来社, 204p.
- ・Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean, Madras science foundation, 1-13, Plates, 401-621.
- ・Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.
- ・Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III, Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- ・Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- ・Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeres-gebiete, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

- ・伊藤良永・堀内誠示,1989.古環境解析からみた陸生珪藻の検討 -陸生珪藻の細分-,日本珪藻学会第10回大会講演要旨集,17.
- ・伊藤良永・堀内誠示,1991.陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.日本珪藻学誌,6:23-44.
- ・小林弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲保・長田啓五,2006.小林弘珪藻図鑑,第1巻,御内田老鶴園,531p.
- ・小杉正人,1986.陸生珪藻による古環境の解析とその意義-わが国への導入とその展望-.植生史研究,1:9-44.
- ・小杉正人,1988.珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用,第四紀研究,27:1-20.
- ・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1985.Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica,9:250p.
- ・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1986.Bacillariophyceae. Susswasser flora von Mitteleuropa,2 (1) : 876p.
- ・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1988.Bacillariophyceae. Susswasser flora von Mitteleuropa,2 (2) : 596p.
- ・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1990.Bacillariophyceae. Susswasser flora von Mitteleuropa,2 (3) : 576p.
- ・Krammer, K. and H. Lange-Bertalot,1991.Bacillariophyceae. Susswasser flora von Mitteleuropa,2 (4) : 437p.
- ・Lange-Bertalot, H., Witowski, A., and Metzeltin, D.,2000.ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts,1,925p.
- ・三宅 尚・中越信和,1998.森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6:15-30.
- ・三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011.日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- ・中村 純,1967.花粉分析.古今書院,232p.
- ・中村 純,1980.日本産花粉の標識 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録,第12,13集,91p.
- ・Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich K., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughes K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020. The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33.
- ・鳥倉巳三郎,1973.日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録,第5集,60p.
- ・Stuiver M., & Polach A.H.,1977. Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- ・徳永重元・山内輝子,1971.花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- ・Witowski, A. and Lange-Bertalot H., Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pls. 4504 figs. 925 pgs.



図版1 珪藻化石

1. *Craticula cuspidata* (Kuetz.) D. G. Mann (B区 堀:14)
2. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (B区 堀:14)
3. *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson (B区 堀:14)
4. *Luticola mutica* (Kuetz.) D. G. Mann (B区 堀:14)
5. *Navicula veneta* Kuetzing (B区 堀:14)
6. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (B区 堀:15)
7. *Nitzschia brevissima* Grunow (B区 堀:14)
8. *Nitzschia granulata* Grunow (B区 堀:14)
9. *Nitzschia linearis* var. *tenuis* (W. Smith) Grunow (B区 堀:14)
10. *Nitzschia palea* (Kuetz.) W. Smith (B区 堀:14)
11. *Pinnularia subcapitata* Gregory (B区 堀:14)
12. *Suriella angusta* Kuetzing (B区 堀:14)

第4節 甲府城下町遺跡E区の溝状遺構 SD03 に関する自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

調査区内から検出された SD03 では、内部が粘土で埋積されていた。下部にグライ化が見られるなど水の影響がうかがえ、有機物の分解しにくい状態から埋積の過程で混入した植物遺体や炭化物の良好な保存が期待された。また木材が出土しなかったものの、柱穴痕と考えられる穴が認められた。

今回の調査では、遺構覆土を対象として、SD03 周辺の植生や可食植物、柱材片など遺物の検出を目的として微細物分析（洗出し・同定）を実施した。また検出された炭化物について放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代に関する情報を得る。

I. 微細物分析

1 試料

分析に供した試料は、SD03 東壁に見られた3層（資料 No.1）、4層（資料 No.2）、5層（資料 No.3）、6層（資料 No.4）、7層（資料 No.5）、北壁の2層（資料 No.7）、3層（資料 No.8）および柱穴痕（資料 No.9）より採取された土壌試料、合計8点である（表1）。

表 1. 分析試料

資料番号	遺構 / 位置	遺物番号	層位	分析項目	
				微細物	14C
資料 No.1	SD03 東カベ	サンブル01	表土直下 粘土 3層	●	●
資料 No.2	SD03 東カベ	サンブル02	砂礫層直下 粘土 4層	●	●
資料 No.3	SD03 東カベ	サンブル03	粘土ブロック 5層	●	●
資料 No.4	SD03 東カベ	サンブル04	褐色粘土 6層	●	●
資料 No.5	SD03 東カベ	サンブル05	グライ化粘土 7層	●	●
資料 No.7	SD03 北カベ	サンブル	褐色粘土 2層	●	●
資料 No.8	SD03 北カベ	サンブル	グライ化粘土 3層	●	●
資料 No.9	SD03	サンブル	柱穴痕?	●	● (炭化物 4点)
分析点数				8	6

2 分析方法

試料を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。資料 No.9 は植物片主体のため、水洗後の水に浮いた試料（種実・植物片主体）と水に沈んだ試料（岩片・土粒主体）を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。抽出後の岩片・土粒主体は常温乾燥させる。資料 No.1 ~ 5.7.8 は、水洗後の水に浮いた試料（炭化物主体）と水に沈んだ試料（岩片・土粒主体）を粒径別に常温乾燥後、実体顕微鏡下で観察し、炭化種実の他、主に 2mm 以上の炭化材などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や、谷城 (2007)、中山ほか (2010)、鈴木ほか (2018) 等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。また、栽培植物など一部の種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表で示す。分析残渣は、一覧表の下部に定性的な量比をプラス「+」で示す。分析後は、炭化種実と炭化材を常温乾燥後、一部を放射性炭素年代測定に供する。種実遺体は分類群別に容器に入れ、約 70% のエタノール溶液で液浸保存する。その他の抽出物と残渣は容器に入れて保管する。

3 結果

結果を表 2、栽培植物などの主な種実遺体の計測値を表 3 に示す。

8 試料 1750g を洗い出した結果、裸子植物 1 分類群（カヤ）9 個、被子植物 37 分類群（キイチゴ属、ムラサキシキブ属、オモダカ科、イネ、オオムギ、コムギ?、オヒシバ、イネ科、ホシキサ属、ヌカスゲ属、スゲ属（ヤブスゲ類?）、マツカサススキ類、カヤツリグサ属、ヒメクダ属?、ヤナギタデ近似種、ボトクダテ近似種、ソバ、スベリヒユ、ミドリハコベ近似種、ナデシコ科 A、ナデシコ科 B、アカザ属、ヒユ属、タガラシ、カタバミ属、ニシキソウ亜属、エノキグサ、ゴキツル、マクワ、シロウリ型、メロン類、ヒョウタン類、カボチャ属、シソ属、ナス、ナス属?、ゴマ、タカサブロウ）198 個、合計 207 個が同定された。2 個は同定ができず、不明としている。その他、不明炭化物 14 個、木材、植物片、炭化材 0.35g（最大 1.1cm）、炭化材主体 0.05g、岩片・土粒主体 95.1g が検出された。

以下、試料別状況を記す。

・SD03 東壁

3 層（資料 No.1：試料 130g）は、植物片 0.02g、炭化材 0.01g（最大 4.2mm）、炭化材主体 0.02g、岩片・土粒主体 3.9g が検出された。4 層（資料 No.2：試料 90g）は、不明炭化物 2 個 0.01g 未満（最大 1.0mm）、炭化材主体 0.01g、岩片・土粒主体 18.7g が検出された。5 層（資料 No.3：試料 150g）は、

表 2. 微細物分析・種実同定結果

分類群	部位・状態・粒径	資料 No.1	資料 No.2	資料 No.3	資料 No.4	資料 No.5	資料 No.7	資料 No.8	資料 No.9	粒穴数	備考
		SD03	SD03	SD03	SD03	SD03	SD03	SD03	SD03		
		東堺	東堺	東堺	東堺	東堺	北堺	北堺			
		3期	4期	5期	6期	7期	2期	3期			
基本種実											
カヤ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	9
キイナゴ属	核	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ムラサキキシキゴ属	核	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本種実											
オモダ科類	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ	初(基部)	破片	灰化	-	-	-	-	-	-	-	23
	初	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	初	破片	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
		破片	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	3
	玄米	完形	灰化	-	-	-	-	-	-	-	2
オオムギ	穎果	完形	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
コムギ?	穎果	破片	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
オヒシバ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ科	穎果	完形	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
ホシソウ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オカサガ属	果実	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1
スゲ属(ヤブスゲ類?)	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2
マツカサススギ類	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
オヤヅクサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒメタダ属?	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ヤナギタダ近縁種	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ポントクタダ近縁種	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ツバ	果実	完形	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
	破片	破片	灰化	-	-	-	-	-	-	-	1
スベリヒユ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	26
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	17
ムナロハコバ近縁種	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ナゲシコ科 Ⅲ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	4 中量
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ナゲシコ科 Ⅴ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2 小型
アカウ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ヒユ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	10
タガラシ	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	3
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	6
カタバシ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	4
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	2
ニシキソウ属	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	6
エノキグサ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1 顕微欠損
ゴキウ属	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1 基部欠損
マツクワ・シロウリ類	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2
メロン類	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1 基部欠損
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	3
ヒョウタン類	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1 基部
カボチャ属	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1 基部
シソ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ナス	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	8
	破片	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	25
ナス?	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	7
ナス属?	種子	完形	-	-	-	-	-	1	-	-	1 小型、一部欠損
ゴマ	種子	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1
タカサツロウ	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	3
不明	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
種実合計 (不明以外)			0	0	0	0	0	1	206		
不明炭化物	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	12 No.2<0.075g,1.0mm
木屑	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+++ 炭化材混じる
破砕片	0.02	-	-	-	<0.01	0.01	<0.01	<0.01	-	-	+++ 乾重(gp)
炭化材	4.19	-	-	-	27.1	-	-	-	2.57	-	11.27 粒大径(mm)
	>4mm	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.10 乾重(gp)
	4.2mm	0.01	-	-	0.01	-	-	<0.01	-	-	0.24 乾重(gp)
	2-1mm	0.01	-	-	-	-	<0.01	-	-	-	乾重(gp)
	1.4-0.5mm	0.01	0.01	-	0.02	0.01	-	<0.01	-	-	乾重(gp)
2片・1粒主体	>4mm	-	4.10	1.95	2.41	8.30	-	-	-	-	乾重(gp)
	4.2mm	0.63	3.20	1.43	4.13	4.07	-	-	-	-	2.86 乾重(gp)
	2-1mm	1.02	4.33	2.74	8.80	3.25	-	-	-	-	4.36 乾重(gp)
	1.4-0.5mm	2.25	5.04	4.47	9.89	3.54	0.34	0.07	0.07	-	9.89 乾重(gp)
分析量			130	90	150	150	80	90	60	1000	乾重(gp)

注)「+」:少量,「++」:中量,「+++」:多量

岩片・土粒主体 10.6g が検出された。6層（資料 No.4：試料 150g）は、植物片 0.01g 未満、炭化材 0.01g（最大 2.7mm）、炭化材主体 0.02g、岩片・土粒主体 25.2g が検出された。7層（資料 No.5：試料 80g）は、植物片 0.01g、炭化材主体 0.01g、岩片・土粒主体 19.2g が検出された。

・SD03 北壁

2層（資料 No.7：試料 90g）は、植物片 0.01g 未満、岩片・土粒主体 0.3g が検出された。3層（資料 No.8：試料 150g）は、種実遺体 1個（草本のナス属種子?）、炭化材 0.01g 未満（最大 2.6mm）、炭化材主体 0.01g 未満、岩片・土粒主体 0.07g が検出された。

・SD03 柱穴痕（資料 No.9）

試料 1000g より、種実遺体 206 個、不明炭化物 12 個、木材・植物片多量、炭化材 0.33g（最大 1.1cm）、岩片・土粒主体 17.1g が検出された。種実遺体の保存状態は良好である。一方、イネの一部とオオムギ、コムギ?、イネ科、ソバは炭化しており、イネ初 1 個は灰化している。

栽培植物は、イネ炭化初（基部）23 個、初（基部）1 個、炭化初 1 個、灰化初 1 個、初 3 個、炭化玄米 2 個、オオムギ炭化果実 1 個、コムギ?炭化果実 1 個、ソバ炭化果実 2 個、マクワ・シロウリ型種子 2 個、メロン類種子 4 個、ヒョウタン類種子 1 個、カボチャ属種子 1 個、ナス種子 33 個、ナス?種子 2 個、ゴマ種子 1 個の、合計 84 個が確認された。栽培の可能性は、シソ属果実 1 個が確認された。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、草本主体の組成を示す。木本は、針葉樹で常緑高木のカヤ種子 9 個、広葉樹で落葉低木のキイチゴ属核 1 個、ムラサキシキブ属核 1 個の、合計 11 個が確認された。

草本は、抽水植物のオモダカ科種子 1 個、湿生植物のホシクサ属種子 2 個、マツカサススキ類果実 1 個、ヒメクダマ科?果実 2 個、ヤナギタデ近似種果実 1 個、ボントクダデ近似種果実 1 個、タガラシ果実 9 個、ゴキツル種子 1 個、タカサプロウ果実 3 個、中生植物のオヒシバ種子 1 個、イネ科炭化果実 1 個、スカスゲ類果実 1 個、スゲ属（ヤブスゲ類?）果胞・果実 2 個、果実 2 個、カヤツリガサ果実 5 個、スベリヒユ種子 43 個、ミドリハコベ近似種種子 1 個、ナデシコ科 A 種子 6 個、ナデシコ科 B 種子 2 個、アカザ属種子 2 個、ヒユ属種子 10 個、カタバミ属種子 6 個、ニシキソウ属種子 6 個、エノキガサ種子 1 個の、合計 110 個が確認された。

4 考察

SD03 の遺構覆土を対象とした土壌微生物分析の結果、東壁の 3層、4層、5層、6層、7層と、北壁の 2層からは種実遺体が確認されず、炭化材が少量検出されるのみであった。北壁の 3層からは草本のナス属種子? が検出され、周辺の草地に生育していたと考えられる。

SD03 柱穴痕からは、栽培植物のイネ、オオムギ、コムギ?、ソバ、マクワ・シロウリ型、メロン類、ヒョウタン類、カボチャ属、ナス、ナス?、ゴマの種実遺体が確認された。近辺で栽培されたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆される。イネの一部とオオムギ、コムギ?、ソバは炭化（一部灰化）していることから、火を受けたとみなされる。栽培の可能性をもつものには、シソ属が確認された。シソやエゴマなどの畑作物による場合、周囲で栽培された可能性もある。

栽培植物と栽培の可能性を除いた分類群は、草本主体の組成を示す。調査区周辺は明るく開けた草

表 3. 主な種実遺体の計測値

資料番号	遺体名	分類群	部位	状態	個数	粒数	長さ (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	回収率 (%)	
資料 No.9/SD03	柱穴痕?イネ	イネ	穎軸(玄米)	完全	1	-	4.31	2.67	1.94	9	
資料 No.9/SD03	柱穴痕?イネ	イネ	穎軸(玄米)	完全未満	炭化	1	-	4.68*	2.28	1.67	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?オオムギ	オオムギ	穎軸	完全	炭化	1	-	7.43	3.16	2.53	10
資料 No.9/SD03	柱穴痕?コムギ?	コムギ?	穎軸	破片	炭化	1	-	2.23*	-	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?イネ科	イネ科	種子	完全	炭化	1	-	2.10	3.51	0.56	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ソバ	ソバ	稃実	完全	炭化	1	-	3.51	4.14	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ソバ	ソバ	稃実	破片	炭化	1	-	3.67*	-	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?マクワ・シロウリ型	マクワ・シロウリ型	種子	完全	1	-	7.82	-	-	-	33
資料 No.9/SD03	柱穴痕?マクワ・シロウリ型	マクワ・シロウリ型	種子	完全未満	1	-	6.63*	-	-	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?シソ属	シソ属	稃実	完全	1	-	1.58	-	-	-	36
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	8	1	3.06	4.13	0.63	37	
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	-	2	2.91	3.51	0.78	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	-	2	2.68	3.21	0.52	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	-	4	2.75	3.40	0.66	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	-	5	2.81	3.23	0.71	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	-	6	2.88	3.41	0.81	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス	ナス	種子	完全	-	7	2.81	3.23	0.78	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	8	3.01	3.78	0.61	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	7	1	1.98	2.48	0.66	38	
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	2	1.61	2.08	0.61	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	3	1.24	2.21	0.58	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	4	1.62	2.20	0.77	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	5	1.82	2.23	0.80	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	6	1.68	2.67	0.74	-	-
資料 No.9/SD03	柱穴痕?ナス?	ナス?	種子	完全	-	7	1.61	1.88	0.52	-	-

地環境と示唆され、まとまった林分が存在しなかったと推測される。本木は、針葉樹で常緑高木のカヤ、広葉樹で落葉低木のキイチゴ属、ムラサキシキブ属が確認された。河畔や林縁などの明るく開けた場所に生育していたと考えられる。カヤの種子は食用可能であることから、利用された可能性もある。

草本は、抽水植物のオモダカ科、湿生植物のホシクサ属、マツカサスキ類、ヒメクダ属?、ヤナギタデ近似種、ボントクダテ近似種、タガラシ、ゴキツル、タカサプロウ、中生植物のオヒシバ、イネ科、ヌカスゲ類、スゲ属(ヤブスゲ類?)、カヤツリグサ属、スベリヒユ、ミドリハコベ近似種、ナデシコ科 A・B、アカザ属、ヒユ属、カタバミ属、ニシキソウ亜属、エノキグサが確認された。遺構周囲の水湿地を含む草地環境に生育していたと考えられる。イネを共存することから、抽水植物や湿生植物は水田雑草に由来する可能性も考えられる。イネ科は炭化していることから、火を受けたとみなされる。

II. 放射性炭素年代測定

1 試料

微細物分析により検出された炭化物や種実遺体から、状態や種類、検出量、個数を考慮して6点が選択された(表4)。

2 分析方法

木片の周囲を削り落として附着物を除去し、50mg程度に試料を調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶性成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶性成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶性成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。濃度は、塩酸が1mol/Lである。アルカリ濃度は、1molに達した時には「AAA」、1mol未満の場合は「AaA」と記載する。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。δ 13Cは試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.4 (Bronk2009)、較正曲線はIntcal20 (Reimer et al.,2020)である。

3 結果

放射性炭素年代値を表4に併記する。また、暦年較正結果を図1に示す。

試料全てが定法での処理が可能

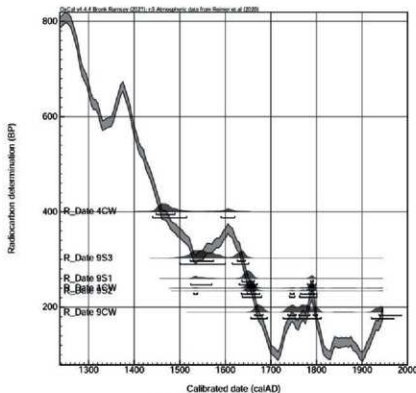


図1 暦年較正結果

であり、年代測定に必要な炭素量が回収できた。

同位体補正を行った後の年代値は、資料 No.1 の炭化材が $400 \pm 20BP$ 、資料 No.4 の炭化材が $190 \pm 20BP$ 、資料 No.9 の炭化材が $260 \pm 20BP$ 、イネ(胚:炭化)が $280 \pm 20BP$ 、オオムギ(種実:炭化)が $230 \pm 20BP$ 、ソバ(種実:炭化)が $300 \pm 20BP$ である。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減

期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期 (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。2 σ の値は、資料 No.1 の炭化材が calAD1531 ~ 1800、資料 No.4 の炭化材が calAD1440 ~ 1620、資料 No.9 の炭化材が calAD1656 ~ 1950、イネ(胚:炭化)が calAD1524 ~ 1799、オオムギ(種実:炭化)が calAD1637 ~ 1800、ソバ(種実:炭化)が calAD1500 ~ 1651 である。

上記を考慮すれば、資料 No.1 の炭化材が 16 ~ 19 世紀代、資料 No.4 の炭化材が 15 ~ 17 世紀代、資料 No.9 の炭化材が 18 世紀 ~ 現代、イネ(胚:炭化)が 17 ~ 18 世紀代、オオムギ(種実:炭化)が 17 ~ 18 世紀代、ソバ(種実:炭化)が 16 ~ 17 世紀代に当たる。なお、上記の年代観については今後さらに遺構の埋積状況や炭化物の出土状態など発掘調査所見を含めて検討する必要がある。

引用文献

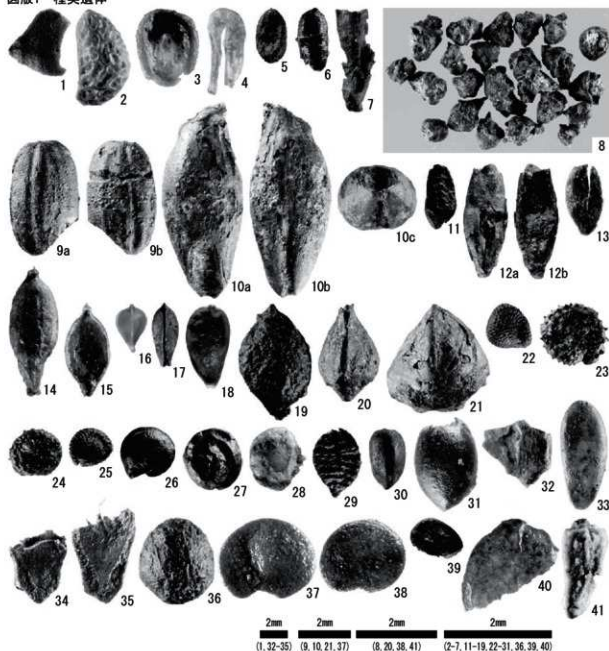
- Bronk RC, 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版), 東北大学出版会, 678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33.
- Stuiver M., & Polach AH, 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木甫夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実 - 形態や大きさが一目でわかる 734 種 増補改訂 - , ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.
- 谷城勝弘, 2007, カヤツリガサ科入門図鑑, 全国農村教育協会, 247p.

表 4. 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\pm 1\sigma$ [%]	暦年較正前	暦年較正年代		標準	Code No.
						1 σ	2 σ		
資料 No.1 S003 種? 4.01	炭化物	AAA	210 ± 20	35.15 ± 0.32	240 ± 22	暦年較正年代		1.094 1.189	pal- LAAA 2224.0
						e	cal AD 1645 ~ cal AD 1663		
						e	cal AD 1785 ~ cal AD 1794		
						2 σ	cal AD 1531 ~ cal AD 1538		
						e	cal AD 1635 ~ cal AD 1653		
						e	cal AD 1743 ~ cal AD 1750		
資料 No.4 S002 種? 4.04	炭化物	AAA	400 ± 20	23.05 ± 0.29	401 ± 23	暦年較正年代		1.0523 1.1563	pal- 2224.1
						e	cal AD 1448 ~ cal AD 1459		
						2 σ	cal AD 1440 ~ cal AD 1515		
						e	cal AD 1590 ~ cal AD 1620		
						e	cal AD 1664 ~ cal AD 1682		
						e	cal AD 1737 ~ cal AD 1755		
資料 No.1 S002 種? 4.04	炭化物	AAA	190 ± 20	31.91 ± 0.25	189 ± 23	暦年較正年代		1.138 1.148	pal- 2224.2
						e	cal AD 1761 ~ cal AD 1785		
						e	cal AD 1793 ~ cal AD 1802		
						e	cal AD 1937 ~ cal AD 1950		
						2 σ	cal AD 1656 ~ cal AD 1692		
						e	cal AD 1727 ~ cal AD 1810		
資料 No.1 S003 種? 4.04	炭化種実 (イネ:胚)	AAa	260 ± 20	31.00 ± 0.41	260 ± 23	暦年較正年代		1.0622 1.183	pal- 2224.3
						e	cal AD 1636 ~ cal AD 1663		
						2 σ	cal AD 1524 ~ cal AD 1570		
						e	cal AD 1630 ~ cal AD 1669		
						e	cal AD 1781 ~ cal AD 1799		
						e	cal AD 1648 ~ cal AD 1666		
資料 No.1 S005 種? 4.04	炭化種実 (オオムギ)	AAA	230 ± 20	36.02 ± 0.21	234 ± 22	暦年較正年代		1.038 1.217	pal- 2224.4
						e	cal AD 1784 ~ cal AD 1794		
						2 σ	cal AD 1637 ~ cal AD 1679		
						e	cal AD 1741 ~ cal AD 1752		
						e	cal AD 1763 ~ cal AD 1800		
						e	cal AD 1637 ~ cal AD 1679		
資料 No.1 S003 種? 4.04	炭化種実 (ソバ)	AAa	300 ± 20	36.27 ± 0.25	302 ± 23	暦年較正年代		1.0329 1.154	pal- 2224.5
						e	cal AD 1626 ~ cal AD 1643		
						2 σ	cal AD 1500 ~ cal AD 1600		
						e	cal AD 1615 ~ cal AD 1621		
						e	cal AD 1648 ~ cal AD 1666		
						e	cal AD 1741 ~ cal AD 1752		

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。
- 2) yrBP 年代値は、1950 年を基点として 40 年前であるかを示す。
- 3) 付記した標準値は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) の暦年較正に算出された値。
- 4) AAA は酸素-アルカリリ-酸処理, AAa はアルカリリ-酸処理を繰り返した処理で HCl は脱炭酸処理 Edg はエッジング処理 Coe はクラゲン抽出処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal4.2 を使用。
- 6) 暦年の計算には、測定された炭素の量を考慮している。
- 7) 1 σ 値を定めるのが優先例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改定された場合の再計算と比較が行われないように、1 σ 値も記載していない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ が 68%、2 σ が 95% である。

図版1 種実遺体



1. カヤ 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
2. ムラサキキノブ属 核(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
3. ホシクサ属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
7. イネ 穂(基部)(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
9. イネ 穂果(玉米)(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
11. オシロイ 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
12. スカサグ属 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
15. スダス(ヤブスダ属?) 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
17. カヤツリグサ属 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
19. ヤナキタナ近似種 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
21. ツバ 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
23. ミドリハコ近似種 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
25. ナデシコ科B 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
27. ヒユ属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
29. カタス属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
31. エノネグサ 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
33. マウシロウノ型 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
35. カボチャ属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
37. ナス 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
39. ナス属? 種子(資料No. 9 SD03北緯-3期)
41. タカサボロ 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)

2. キイチゴ属 核(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
4. オモダカ科 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
6. ホシクサ属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
8. イネ 穂(基部)(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
10. オオムギ 穂果(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
12. イネ科 穂果(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
14. スダス(ヤブスダ属?) 果穂-果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
16. マツカサススキ属 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
18. ヒメクダ属? 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
20. ホントクダ近似種 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
22. スベリヒユ 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
24. ナデシコ科A 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
26. アカザ属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
28. タガラシ 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
30. ニシトウ属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
32. コギョウ 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
34. ヒョウタン属 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
36. シソ属 果実(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
38. ナス? 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)
40. コマ 種子(資料No. 9 SD03; 柱穴痕)

第10章 総括

当該調査エリアは、三の堀を境に西側の甲府城下町遺跡、東側に深町遺跡が分布する。甲府城下町は文禄から慶長初期の甲府城築城とともに整備された城下町で、内城を取り囲む内堀から二の堀までの間を武家地、そこから三の堀までの間が町人地となっていた。甲府城下町と三の堀を挟んで東側に接する深町遺跡は、江戸時代中期の柳沢吉保が甲府城主を務めた時代に同心屋敷がおかれた地域である。深町遺跡は、2020年度に実施した試掘調査で新たに発見され、同年度中に周知の埋蔵文化財包蔵地「深町遺跡」として遺跡台帳に登録した。

第1節 深町遺跡での調査成果

A区の調査成果 今回の事業対象地内では、全体に地盤の削平や攪乱が著しく、調査対象としたのは東端のA区と、西端で三の堀に接するB区の2箇所のみであった。A区では調査区中央から西端にかけての範囲に、東西方向の溝跡を発見した。構造と規模は十分に明らかでないが、溝の壁面は板で土留めされていたようである。調査区東側では北側法面の下端に杭列を伴う溝跡が発見されているが、西側半分で見えられた土留めに板を用いた溝と同一のものであるかは不明である。

B区の調査成果 B区は南側に隣接する濁川沿いに笠森稲荷が鎮座していた範囲である。井戸跡1基、ピット10基、溝跡1条、三の堀跡が発見された。三の堀跡については第4節に記載する。

第2節 甲府城下町遺跡での調査成果

C区の調査成果 堀の内側に存在したとみられる盛土の位置特定や、堀の内側の土地利用形態の把握を主な目的としたが、近代の土地利用に伴う攪乱が著しく、地下室1基を検出したにとどまった。地下室は東西方向に長い約90×3.2mの平面形に、検出面からの深さ約1.2mの形状であった。底面には角材が井桁状に組まれていて、西側は縁に角材を渡した階段状の形状となっていた。側壁は木製の板材で土留めされていた。三の堀に面する東面は攪乱等によりその形状が不明であるが、北縁には当該遺構とは異なる軸の石垣が南を向いて築造されていた。これに対応する北を向いた面があったかは、攪乱等により不明である。石材は加工のされていない安山岩で、石垣底面には桐木が敷かれ、桐木は丸杭によって止められていた。

D区の調査成果 近代の所産と考えられる配石を検出した。これ以下にあったとみられる近世の堆積層及び遺構面、遺構は、近代の土地改変により消失したものと考えられる。

E区の調査成果 D区同様、近代の所産と考えられる遺構が多数発見された。調査区南側には長さ20mにわたる木製の板材を敷き並べた溝状の遺構が発見された。

第3節 三の堀に関する調査成果

B区では調査区西端で南北方向に展開する三の堀の東側法面が検出された。石垣や木製の板材など、土留めをされていた痕跡は発見されなかった。法面の表面には土壌化の痕跡が認められ、土羽であった可能性がある。ただし、当該箇所の特殊事情であったかもしれないし、近世をとおして同様の構造であったとはいえない。ここでの事象を、三の堀全体の基本構造として一般化すべきでない。

埋設保存される予定の、開渠となっている三の堀（現濁川）の範囲では、保存にあたって現況の堀形状（エレベーション図）と擁壁としての石垣のオルソ写真撮影、石垣の表面観察を実施した。

隅角部はいずれも曲面を描くとともに落とし積みによっているため、近代の改修を経ていることがわかる。布積みのエリアにあっても、底部に落とし積み様の石材配置がみられる場合があり、全体に近代の改修を経ていることがわかる。第8章 第50～52図の矢印で示した範囲は、近世の石積みの可能性がある。

写真図版 1 (A区)



A区 全景 南東から



A区 土層堆積状況 西から



A区 1・2・3号トレンチ 北から



A区 1・2・3号トレンチ 南から



A区 1号トレンチ杭列検出状況 北から



A区 2号トレンチ木製構造物検出状況 真上から



A区 3号トレンチ木製構造物検出状況 北東から



A区 下水道に連立杭立会状況 北西から

写真図版 2 (B区)



B区 全景 真上から



B区 三の堀跡 北東から



B区 三の堀跡中央部地すべり痕跡 北から



B区 三の堀跡南壁土層堆積状況 北西から



B区 井戸跡 南西から



B区 井戸跡 底部付近木材検出状況 西から



B区 中央部土坑・溝・柱穴検出状況 西から

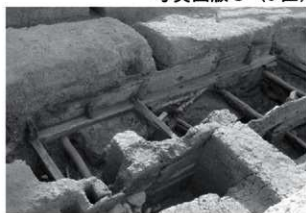


B区 中央部土坑・溝・柱穴検出状況 東から

写真図版3 (C区)



C区 地下室全景 西から



C区 地下室 南側板 北東から



C区 地下室 北側板南面 南西から



C区 地下室 北側板北面 北西から



C区 地下室 西側板 東から



C区 地下室 立角材 南西から



C区 地下室 側板-石積取り付け状況 南東から



C区 地下室 東部 南西から

写真図版4 (C・D区)



C区 地下室 杭列 南東から



C区 地下室 南西部 丸太材 東から



D区 全景 北東から



D区 土層堆積状況 西から



D区 1号建物跡 南から



D区 2号礎石列 西から



D区 1号石列 北から

写真図版5 (E区)



E区 全景 北東から



E区 SE01 土層堆積状況 西から



E区 SK04 埋土出土状況 南から



E区 SP33 集石検出状況 南東から



E区 SD03 東部 東から



E区 SD03 東部 西から



E区 SD03 東壁土層堆積状況 西から

写真図版6 (出土遺物1)



A区出土遺物



A区出土遺物



A区出土遺物



A区出土遺物



A区出土遺物



B区 SP04 出土遺物



B区 三の堀跡出土遺物



B区 三の堀跡出土遺物

写真図版7 (出土遺物2)



B区 三の堀跡出土遺物



B区 三の堀跡出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物



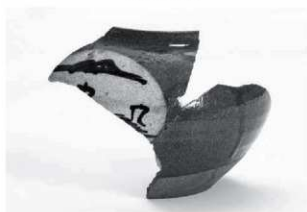
C区出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物

写真図版 8 (出土遺物 3)



C区出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物



C区出土遺物



D区出土遺物



D区出土遺物

写真図版9 (出土遺物4)



E区 SD01 出土遺物



E区 SD02 出土遺物



E区 SD03 出土遺物



E区 SD03 出土遺物



E区 SK04 出土遺物



E区 SK04 出土遺物



E区 SP02 出土遺物



E区 SP03 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふかまちいせき・こうふじょうかまちいせき							
書名	深町遺跡・甲府城下町遺跡							
副書名	(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業、下水道工事事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第346集							
編著者名	正木孝洋 上野坂 株式会社古生態研究所 バリノ・サーヴェイ株式会社							
発行者	山梨県観光文化・スポーツ部 山梨県県土整備部 甲府市上下水道局							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行日	2024年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
ふかまちいせき 深町遺跡	山梨県甲府市城東 二丁目地内	19201	301	35° 39' 25"	138° 34' 48"	20210615~20220226	385㎡	道路・河川・ 水道
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	城下町	近世	堀、井戸、溝状遺構		土器・陶磁器・瓦		甲府城三の堀跡	
ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村 コード	遺跡 番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
こうふじょうかまちいせき 甲府城下町遺跡	山梨県甲府市城東 二丁目地内	19201	253	35° 39' 26"	138° 34' 38"	20211108~202200206 20220707~20220831	1324㎡	道路・河川
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	城下町	近世	地下室、溝、井戸		土器・陶磁器・瓦・金属製品		地下室	
要約	調査エリアは甲府城の南東部、江戸時代に整備された甲府城の城下町にあたり、A・B区(深町遺跡)は武家屋敷、C～E区(甲府城下町遺跡)は町人地とされている。 深町遺跡からは甲府城の三の堀跡や木製構造物を含む溝跡、甲府城下町遺跡からは木製構造物を含む地下室や近代の建物跡や溝跡等が確認されており、近世から近代における城下町南東部の土地利用のあり方を解明する手がかりを得ることができた。							

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第346集

深町遺跡・甲府城下町遺跡

(都)和戸町竜王線街路整備事業及び一級河川濁川河川改修事業、
下水道工事事業に伴う発掘調査報告書

2024年3月18日 印刷

2024年3月22日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発行 山梨県観光文化・スポーツ部 山梨県県土整備部

甲府市上下水道局

印刷 青柳印刷株式会社